



虐呪

第二号

2012

テーマ競作「仮面の町」
又りレー小説「胡蝶蘭」
短篇競作／りレー小説

序文

ここに、文芸部機関誌「虐睨」の第二号をお送りする。

本号では、新たに〈テーマ競作〉と称して、「仮面の町」と題した三篇を収録した。「仮面」は人間社会を語る上で重要な概念だが、これを文芸部員が小説という場においていかに料理したか、ぜひ読み比べていただきたい。

また、冒頭部分を共有し、それに後続する部分を創作する〈又りレー小説〉では、藤野可織氏の「胡蝶蘭」(『いやしい鳥』(文藝春秋)・『超弦領域年刊日本SF傑作選』(創元SF文庫)所収)の冒頭の一文を借りた。部員全員が魅了された元の作品も是非ご一読いただきたい。

以下、今号の収録作品を挙げておく。

テーマ競作～「仮面の町」

- 1 「仮面の町」 三角想樹
- 2 「仮面の町」 普賢咲黎
- 3 「仮面の町」 九条葱太

又りレー小説～藤野可織「胡蝶蘭」より

- 1 「アポクリフ」 三角想樹
- 2 「box」 普賢咲黎
- 3 「あの日」 九条葱太
- 4 「命日のモンブラン」 鵜川龍史

短篇饗宴～SF

- 1 「落下」 三角想樹
 - 2 「砂浜走」 普賢咲黎
- りレー小説

「旅の影」

短篇饗宴～幻想

- 1 「某日」 三角想樹
- 2 「ホレおばさん」 普賢咲黎
- 3 「虹」 鵜川龍史

ファイルの設定上、ここから直接、各ページに飛ぶことはできないが、閲覧しているアプリケーションによっては、目次から飛べると思います。

どうぞ、中高一貫の男子校生の本気をお楽しみください。

文芸部顧問 鵜川龍史

仮面の町

一年 A 組

佐藤アロア

○動機

ついこの前、祖父が亡くなって自宅の物置の整理をしていた時だ。大きな仮面を見つけた。とても大きかった。メジャーで測ったらなんと二メートルもあった。母に聞いたらきっと祖父のものだという。それで僕は仮面の街を作ることになった。

いまどき仮面をつける人なんていない。仮面があるだけでそれをつける固定的な人物像が浮かび上がってくる。だから仮面から町が浮かび上がってきてもいいと思った、ということ。

○制作

材料は厚紙や段ボール、物置にあった板切れとか。仮面の内側に町を建設する。

仮面は縦に細長くて、二メートル×六十センチ。木製。扁平。小さな穴を三つ空けただけの寂しい表情。空虚感が残る。うちの家系に昔からあったものだと思う。仮面の模様は黒ずみ、時々はがれてたり削れてたりする。以下写真。

○一日目

まず仮面のシルエットを、裏紙に映し出す。そしてどこに何を置くかのたまかなイメージを決める。とはいっても、何を置くべきか悩む。何か原始的なイメージ。ツリーハウス？ もっと前衛的でアヴァンギャルドなのがいい。けれど普通の街で、普通に人が暮らしてる。見たこともなくて一見不思議なんだけど、住めば都じゃないけれど、みんな普通。そして少し変。

洗練されてて、間抜けで、ウィットに富んでて、可愛くて、ちょっとおかしい。

まさにそんな感じ。

今日は塔を建てる。百センチの木の棒。強度はそこそこ。棒は絵具で白く塗る。下部を彫刻刀で削って、仮面の両目と口にちょうど突き刺さるようにして、固定する。ボンドを使いできるだけ真っ直ぐ立たせる。ちなみに棒はハンズで買った。

○二日目

ボンドが足りなかったのか、塔がぐらぐらしていた。実際、他の建物を作るのに邪魔だったので、結局引き抜いた。

仮面の中央には住宅を作る。イメージはグループホーム。壁は無く骨組しか作らない。住宅が密集していて、けれど壁がないので圧倒的透明度。できるだけ植物を植え、屋根や壁は布やビニールで作る。アク

リルなどのプラスチック素材は使わない。風が吹き、家の輪郭がはがれていく感じである。

マッチ棒の赤いのを取り外したものを大量に使った。ハンズで六百三十円で大量に入ったのが売っている。それを格子状に組み立てていき、ボンドでくっつける。屋根は片側を高くして、傾斜をつける。緑のカーテンができやすくするためだ。一つ一つの作業は簡単で、意外と家に見える。それらしく見えるというのは大事なことで、モチベーションにつながる。できるだけそれぞれに個性を持たせる形で、大きさや、屋根の形を変え、それぞれにスペースを取る予定で、二十個を作った。

骨組みだけで殺風景な住宅は、植物を植えることで生きた家にする。使えそうな雑草を庭からちぎってきて、色を塗るものは塗っておく。設置はまた明日にする。

この仮面がせめて実際につけられる大きさだったなら、いったいどんな人間がこの仮面をつけるのだろうか。どんな人間なら仮面に空いた穴に生命の光を燈らせることができるのだろうか。

○三日目

配置はアドリブだったのだが、思ったよりスカスカになってしまったので、小さな家を作って足した。物置になぜか保管してあった布きれを適当な大きさに切って、カーテンのように上だけくっつけて壁とした。一つの壁も縦に切れ込みを入れることで、ヒラヒラ感を出した。すべての家には壁を作らなかった。

仮面の端は上に反りあがっていたが、そこまで不自然にはならなかった。両端の反りは、角度を強調するように床を作って、グループホームを少し高く見渡せるようにした。そう言う設定だ。

雑草は小さくサイコロ状に切った発泡スチロールに差してテープで仮止めして位置を調整してから、最終的にボンドでくっつけた。とりあえずはグループホームが完成した。

□

ふと目を覚ますと周りはずでに暗く夜だった。明日の朝は早いかも知れないと思い寝ようとして仰向けになった。上を見ると梁の上に猫がいて、顔にできた幾つもの疣の間から黒い瞳を覗かせている。すると無性に腹が立ってきた。何か投げつけようと思って周りを見回したが、部屋には何もなかった。柱を揺らせば落ちてくるかもしれないと思い、力の限り柱にタックルをかますと、柱は簡単に外れて床に倒れこんでしまった。それでも家はびくともしなかった。猫は梁の上から降りて、隣の部屋の暗闇の中に消えてしまった。

俺は怒りが収まらず、外れた柱を目茶苦茶に振り回して家を解体した。すると隣の部屋の暗闇から腰の曲がった老人が出てきて「静かにしてくれ。今何時だと思っているんだ」と言った。老人はさっきの猫を抱いていた。俺は「すいません」と謝った。「すいませんでした。原さんを起こす気はなかったんですが猫を見ていてつい体が動いてしまって。しかしその猫はあまりにも醜い。殺すか治療するかした方がいい。自分はよく分かりませんが、その猫もだいぶ年を重ねているようですし治療は難しいかも知れませんよ」老人は黙っていたが、仮面をつけているせいで表情が全く読めなかった。俺は何か怒らせるようなことを言ったかと思い、再び口を開いた。「いや……原さんが悪いわけじゃないんです。だから……要は気の持ちようですよ。猫だっていずれは死ぬんですから。いつまでも一つのものにこだわっていても仕方ないですよ。ここはひとつ気分転換だと思って、ね」原さんは何とも答えなかったが、ふと顔を上げ横を向いた。

「こんな真夜中に何をなさっているんですか？ 出来ればもう少し声を落としていただければ。子どもたちが起きてしまいますから」という声が聞こえて、仮面をつけた女性がやってきた。「ああ、本当にすいません。でもこの猫に腹が立って仕方がないんです。せめてこの猫だけでも何とかさせてくださいよ」「私がこいつを治療するから……」と原さんが口を開いた。「黙って！！ 子供達が起きたらどうするんです！？

猫なんてさっさと殺してしまえばいいでしょう」「平岡さんもそう思いますよね。俺もさっきからそう

言ってるんですが原さんが全く俺の意見を無視してるんです」「貸して！！」そう言って平岡さんは原さんから猫を取り上げようとした。原さんは猫を抱きしめて放さなかったが、俺と平岡さんの二人掛りで猫を取りあげ結局俺が銃で殺した。平岡さんは部屋の隅でうずくまった原さんを抱きしめた。「泣かないで、原さん。仕方がなかったの。銃を使ったから痛みは一瞬よ。今度みんなでお葬式を上げましょう。泣かないで……」俺は原さんを羨ましく思った。平岡さんの美しい身体を想像して勃起した陰茎を強く押えた。

○四日目

今日は工事現場を作る。仮面のあごの部分だ。なぜ町を作るのに建設途中の工事現場を作るのかと言えば、町を完成させるのは自分ではないからだ。これがある限り町は完成はしない。けれど、それは常に現在進行で町が作られ続ける、ということなのだ。町を作り続け、あわよくば完成させるのはこの仮面の町に住むであろう仮面の住人たちだ。

割り箸で型と骨組みを作る。割り箸はできるだけきれいに割る（ところどころは削る）。スプレーで銀色に染める。一部は壁をつけておく。建物の下部は針金を使って、特に張り巡らせておく。高いところには大工さん用の足場となる銀色の板（カットしたベニヤに銀のスプレー）を置いておく。更に上から緑の網をかけてみたが、あまり変わらなかったの、これは取り除いた。

スプレーがいい色を出してくれたおかげで、工事途中にもかかわらず重層感が感じられる。

□

端の方に何か新しいものができた。天に突き出した無数の柱が月光を受けて銀にきらめいているように見えた。何かを叩くような乾いた音が周期的に響いてなんとなく居心地が悪かった。俺はしゃがみ込み、地面にぽっかりと空いた三つの穴を覗きこんだ。奥は真っ暗で何も見えなかった。音は穴の中に落ちていき、無数にこだました。

悔しくなるくらい静かな夜だ。まだ何も無い。家とあの奇妙な物体があるだけだ。それとこの穴。一体何の穴だ。穴があれば飛び込みたくなってしまふのはなぜだろうか。けれどこの穴はどこまでも暗く恐ろしい。自分が入るべき場所ではない。それにしても住人の誰かが落ちこちりしたら大変だ。子どもは特に注意が必要だろう。いずれみんな協力してこの穴はふさがなければならない。

○五日目

今日はレストランを作る。住宅地より少し頭よりにある。カフェテリアのような雰囲気だが、この町には飲食店がここくらいしかないので、みんな食べに来る。オープンカフェで、外の光と風が入ってくるように壁は三面だけつけ、残りの一面はあけはなしておく。少し大きめのカウンターと、丸机と椅子を作るだけだ。丸机は画鋸で作る。というより、画鋸はそれだけでなんとなく机っぽいので形はそのまま表面に色紙を切ったものを張り付けた。椅子は工作用紙を切って組み立てた。かなり細かい作業なので大変だった。椅子の色は茶色や黒などの色で統一した。カウンターはベニヤの板を切って使った。木目がいい雰囲気になっていた。壁にも一応工作用紙で棚とか作っておいた。あと忘れてはいけないのが水槽だ。とれた魚を水槽で暫く保存するのだ。

祖父は昔はよくそういう店に行っていたらしい。水槽で魚を生きたまま保管して、新鮮なまま料理するというのだ。自分はまだそんなものを見たことがない。祖父の実家は港町だったと祖父は自分によく教えてくれたものだった。

水槽はプラスチックの透明な板を切って使った。作るのは簡単だったが、別に水槽に見えない。

建物全体がシックな雰囲気だよさそうだったので、すべてベニヤ板で作った。ところどころ泥で汚れて

いるところがまた良し。

□

「ヘイ、サバ定食お待ち！」とやけに威勢のいい兄ちゃんが俺のテーブルに今度はやけに丁寧にサバ定食を置いた。トマトのたれのついた洋風なサバの煮物。キャベツとじゃがいものスープ。副菜にほうれん草。ごはん。ここはやたらとなぜか魚料理が多い。料理はまずくない。骨が多いのは少々困り者だが、景色のいい昼ごはんとはなかなかいいものだ。

ちょうどお昼の時間で、とても混んでいるがにぎわう店というのも悪くはなかった。サバを口に運びながらも一人の店員に自然と目が行ってしまう。ここの店員は皆若くて活気あふれているが、彼女は格別だった。後ろで一つに束ねた髪。透き通るようなきれいな声とふくよかな胸。背は低めですらっとした身体。そして控えめながらも熱く燃える瞳。彼女はきっとお金に困っているに違いない。きっと両親の入院費がかさんでいるのだ。大変だろうに。ああ、彼女がこっちに歩いてくる。俺はさりげなく布巾で口を拭き彼女の方を見る。彼女と目が合う。お互いがお互いのことを理解しあう。二人は溶け合う。頭と足が噛みたいにとろけて合体して一つになる。というのはすべて俺の妄想に過ぎない。

「オナニーしてんじゃねえぞ」と後ろで聞こえた気がして、慌てて自分の股間を確認する。焼かれて出て来そうな巨大な肉の筒と飛び散った精子はそこにはなく。膨れた何の痕跡がズボンの上から分かる程度だった。後ろを振り向くと一人の若者が暴れていた。どうも酒を飲んでいたらしく、ウイスキーの瓶が転がっていた。暴れる男の友人たちも楽しんでいて止めるような気配は見られない。空の瓶が投げられて壁にあたって割れた。周りの客たちは急いで店を出ていく。俺は怖くなかったからスープを飲んでいたら、正直迷惑だった。あんなに元気よくサバ定食を運んできた店員もカウンターの隅で他の店員たちと固まって見て見ぬふりをすると決め込んでいた。店長らしき人物が店員たちをしっかりとつけているが、声が小さいのでかき消されて何を言っているのかよく聞こえない。

「あんたたち迷惑だよ！ 出てってよ！」と果敢にもそう叫んだのはあの彼女だった。暴れていた男たちは一瞬で静まり返る。「スゲー、さすがは南さんだ」「南さんすごい」「南さーん」「南さん超ツェー」と、固まっていた店員たちが徐々にほどけてくる。名前は南、というらしい。若者たちはしょんぼりして普通に食事を再開した。店員たちも騒動が大きくならずに済んだことを喜んでいるように見えた。

一人怒って出て行ってしまった南さんの後ろ姿が神々しかった。慌てて追いかける店長の姿はむしろ頼りなく見えた。

ちょうど店の奥で原さんが刺身を食べているのを見かけた。

○六日目

今日は教会を作る。仮面の頭部にあたる。町人たちが集会を開くような場所だ。町人全員が集まれるような大きな施設だ。彼らに確固とした宗教はない。しかし祈りくらいは捧げるはずだ。死者たちに対して、祈りを捧げることもあろう。

教会くらいはスタイリッシュな作りになってしまうと思う。落ち着いた雰囲気の中にも近代美を感じさせるような絶対的な空間。

工作用紙に裏紙を張り真っ白い壁を作る。そこに黒線を斜めに入れる。クリーム色の照明のなか黒と白の縞々が遠近感を狂わせ幻想的な美しさを強調する。壁は斜めに設置したりする。天井は金網を蔓性の植物で覆う。緑のカーテンではなく緑の天井と言ったところだ。内にはたくさんの椅子と司祭さんのための席がある。それらは工作用紙で作り、茶色で統一する。

工事現場を作っているときもそうだったが、仮面の端は反りがきついためにとってもやりづらい。

俺は後ろの方の席に座っていた。もう後ろの席もいっぱいでは何人か立っているものもいる。一人だけ離れた席に座るおばあちゃん司祭が小さなトンカチで机を二回叩き、コホンと咳払いをする。「おホン、お静かに、静粛にお願いします」話し声はぴたりと止んでみな司祭の方を向く。「さて、今日は週に一度の話し合いの日。私たちの町をより住みやすい場所にするため、我々を育て培ってきた先祖やこの土地に報いるためにも、みんなどんどん意見を発言してください。そしてその前にまず、皆で祈りを捧げましょう。」そう言うと、おばあちゃん司祭は自分の仮面を外した。司祭の顔は深いしわと無数の疣でできていた。目は細いが力強い。みな立ち上がり、俺も立ち上がった。司祭は俺達と同じ方向に向き直ると、床に膝をつき両手を合わせ大声で何かを叫んだ。それは動物の呻り声のようだった。すると皆両手を合わせ同じように何か叫び始めた。俺は皆に合わせようと慌てて同じように叫んだ。南さんも、平岡さんも同じように祈っていた。俺は一生懸命に叫んだ。目の端に原さんが映った。手も組まずうつむいたままぼうっとしているように見えた。俺より後ろだったので振り返って見るような真似はしなかったが、協調性を持たない原さんに苛立ちを覚えた。原さんの顔もきつと疣でおおわれているに違いないと思ったが、声には出さなかった。

しばらくして司祭が祈りをやめ仮面をつけなおし、皆席に座った。「では皆さん自由に意見をどうぞ」素早く手が上がる。「はいどうぞ」「はい。私の子どもたちは毎日外で走り回って遊んでいるんです。けれどそろそろそういう遊びもしなくなる時期ですし、子どものための頭を使うような遊びを考えてはもらえませんか」そう意見したのは平岡さんだった。「確かに娯楽施設とかあってもいいよな」と言ったのはレストランで見た若者だった。確かにこの町にはそういう施設はなかった。おもちゃ屋さんや文房具屋さんがあってもいいのかもしれない。「おもちゃ屋さんや、本屋さん、文具屋さんを作るのはどうですか？」と、俺は発言してみた。「私も賛成です。子供にはそれらが必要だと思います」と南さんが賛成した。俺は喜びで飛び上がりそうになった。思いつきが功を奏したのだ。南さんがそう言った途端、周りの者は次々に賛成しだした。話し合いが一気に解決の方へ向かった瞬間だった。「静粛に静粛に！」司祭はそう言って机をたたいた。「建設途中の工事でそれを作ればいいのではないですか？」と意見したのは原さんだった。皆一斉に原さんを見た。司祭が言った。「原さん。それはだめです。あの場所は我々のずっと前の世代からあのままなのです。変えるべきではないでしょう」司祭の口調には軽い非難が込められていた。軽かった。原さんはそれ以上何も言わなかった。俺は正直原さんには黙っていてももらいたかった。話がややこしくなるだけなのだから。

「わかりました。玩具屋と本屋と文具屋の建設を進めましょう。他に要望がなければ、次の議題に移りますが」誰も手を上げずお互いの仮面を眺めてきょろきょろとしている。

「では次の議題に移ります。ついこの前この町のカフェテリアで数人の若者たちが暴れていたようですが、その者たちは前に出なさい」

教会の中がざわついて、店長と店員たちに抑えられて三人の若者が前に引き出された。「彼らは昼間から酒を飲み暴れた上に我々に暴力までくわえました。我々は何とか彼らをなだめようとしましたが全く言うことを聞かずにこのような怪我まで負わせました」いつ怪我をしたのか、店員の女の子の一人が腕に包帯を巻いている。「追放しかないだろう」司祭がそう言い放つと、彼らは店員たちを振り払って逃げようとした。この町からの追放は要するに死ぬということである。町の外には何があるか分からない。追い出されて生きて帰ってきたものはいない。男たちの顔が恐怖に引き攣るのが仮面ごしにでもわかった。俺はここで店長と店員たちの嘘を公表するような馬鹿なことはしない。それが協調性を持つということなのだから。それに嘘である確証はない。

男たちは教会の外に連れて行かれた。

○七日目

今日は公園を作る。グループホームと工事現場の中間の位置だ。口の下、顎の上。芝生をひき、樹を植えて木陰を作る。グループホーム建設の時に使ったマッチ棒とタコ糸を使ってアスレチック遊具を作った。公園の左半分は芝生を植え、右半分は樹を多く植えて、小さな小屋を建てる。小屋は祖父の工房をイメージしている。祖父はよく自分に木でおもちゃを作ってくれた。竹とんぼを作ってくれたこともあったし、ブランコを作ってくれたこともあった。祖父がトンカチでくぎを打ちつけていたのを覚えている。小屋の前には木のテーブルと椅子があって、そこで遊んだりもした。

芝生はおがくず、木くずに絵の具で色を塗りボンドで万遍無くくっ付ける。この時先に仮面にボンドをぬっておき木くずを上からふりかけるようにするのが良い。木は適当な雑草を自宅の庭から取って来て相変わらず発泡スチロールに差して付ける。発泡スチロールはできる限り小さく切る。小屋は工作用紙で作った。全体を絵具で茶色に塗り、屋根は三角。煙突はない。だが丸い窓がある。木の机は画鋸で作り椅子は木の丸太をイメージして、シャーペンの上の消しゴムを茶色に塗って作った。

□

俺は傾斜のある公園の芝生の丘の上で気持ちよく転寝をしていた。空はよく晴れていて日差しが照りつけたので冷たい空気も心地良く感じられた。隣では司祭が同じように寝転がってまるで死んだように眠っていた。仮面が真っ直ぐこちらを向いていたが、その奥の目は閉じていたのだった。遠くから鉄を叩きつける音が規則的に響いた。

体を起こすと、カフェの若い店員たちが騒いでいるのを見つけた。そのうちの一人が言った。「おい、この歌知ってるか。テンプーレーションヒューミーディティー」「違うぜ。テンポーラリーヒューマーニティーだよ」「ピューピュリリーピュープリーティー」「あははは」「ターミナーリティヒューミーリーテーイ」と、みんな高い声で唄い出した。俺は彼らをはしたないと思った。低能で馬鹿だ。騒がしいのは好きじゃない。俺は小屋の方へ向かった。

いつしか道は枯葉のつもる湿った道となった。足が地面に食い込む感覚が気持ちよかった。小屋の方から、トンカチを叩きつける音が聞こえた。俺は小屋へと急いで走った。

俺は小屋の前で慌てて樹に身を隠した。小屋の前ではカフェの店長と平岡さんの子ども二人が座って話をしていた。彼らに俺はばれていないようだった。息を殺して二人を覗き込み会話に耳をそばだてた。

「いったいどうしたんだい。私をこんなところに呼び出すなんて」

「僕らおもちゃ屋さんも本屋さんも文房具屋さんも欲しくないんだ。僕らは街のいろんな所に行って、走り回ってるだけで十分なのさ」

「そういう訳にもいかないよ。皆や君たちのお母さんと決めたことだし、司祭の決めたことには誰も逆らえないからね」

「おじさん。こっちに来て僕らのおちんちんを舐めてよ。僕らはそういうのがいいんだ」

「な、何を言っているんだ君たちは。大人をからかうのは止めなさい」

「おじさんが南おねえちゃんの胸を揉んであそこをパンツの上から舐め回したこと、僕ら知ってるんだ。だから僕らにもやってよ。じゃないとみんなに言いふらすよ」

「ちょっと君たち、こっちに来なさい。大事なお話があるんだ」

「偉そうなこと言わないでよ！ 変態のくせにさ！ 助けて！ 助けて！ このおじさんが変なことするよ」

「分かった、分かった。やるよ、舐めるから。大声を出さないでくれ」

二人は自分たちの股間を前に突き出す。店長は彼らのファスナーをゆっくりと時間をかけて下し、ズボンを脱がせてやる。

「死ね！ 変態！」

二人は店長の顔と腹を蹴る。顔面の一撃は痛そうだ。店長は蹲って攻撃を受けている。

「馬鹿野郎！ お前ら大人はみんなクソだ。死ねよ消えろよいなくなれよ！」

二人はそのまま走って行ってしまった。俺は陰から出てきて店長の前まで歩いて行った。店長が顔を上げると俺と目が合った。店長が何か言いかける前に俺が口を開いた。

「南さんに手を出したらしいな」

店長は目を伏せた。俺はそのままその場を立ち去った。

○八日目

今日はバーを作る。カフェテリアの隣に作る。カフェテリアと違って酒を出したりビリヤードができたりするのだ。三階建て。三階では街の景色を見ながら酒を楽しむことができる。席の数も少なく落ち着いた雰囲気フロアだ。一階は宴会用でダンスを踊ったりする。二階は玉突き広場で小さなステージもあってそこでピアノを弾いたり歌ったりする。という設定だ。

一階と二階はベニヤの板で壁を作る。三階の壁と天井はプラネタリウムのようにドーム状にするので、工作用紙で作った。天井には小さく円窓を開ける。一階と二階は正方形の形なのでそこから上手くドーム状にできるように調整した（結構頑張った）。三階にはカウンターと丸テーブルが一、二個。二階は玉突き用のボード。一階には席をたくさん。を設置する。丸いテーブルは画鋏で作成し、他は工作用紙に色を塗って作った。

□

皆浮かれていた。雲一つない月夜、バーは何時に無く賑わっていた。

「貴方もう酔ってるの？」

と言いながら隣に座る南さんが俺の肩に手をまわしてくる。

「酔っているのは君の方だろう、南」

と俺は言う。

「私だって、むしゃくしゃする事は有るのよ。あの店長、ほんとに最悪だったんだから。あなたに感謝してるってことよ」

南さんは俺に抱き付いた。が、すぐに手を放して飲み続けた。

「俺と結婚するくらい？」

俺は渾身の笑顔で彼女を見つめた。仮面越しに彼女は目を合わせてきた。一瞬、本当に溶け合った気がした。

「いいわよ。この町に他にあなたほどの男もないから」

「じゃあ、上に行こう」

俺は南さんの手を取って階段を上った。二階はさらに盛り上がっている様子で煙草の煙が鼻についた。中で平岡さんの子どもがハーモニカを吹いているのが見えた。

三階は壁がガラス張りで町を一望出来た。遠くで星が輝いているのがとても近くに見えた。三階の席には俺らのほかに原さんと平岡さんが座っていた。俺はこの二人が鬱陶しかった。けれど、南さんと一緒にいられることがうれしい。

「マスター、何か記念になる特別うまいのを」

「わ、分かりました。何にしましょうかね。そうだなあ、うん、そうですね」

そう言ってマスターは一本のブランデーを持ってきた。

「め、メタクサです。この世で一番のお酒ですよ」

マスターの声は上ずっていたが、一杯飲んですべての思考は途切れた。すべてが幸せに包まれた。

「メタクサ、メタクサ」

と彼女はつぶやいた。俺は彼女の肩に手をまわした。

カン、カン、という音が小さく聞こえた。その音は次第に大きくなり俺の頭を揺さぶり始めた。「カン、カン」と彼女はつぶやいた。

「マスター」俺は無意識にも尋ねた。

「この前、うちの近くで真っ暗な穴を三つ見つけたんだが、あれはなんなんだ？」

南さんは不思議そうに首をかしげて俺を見た。

「ええ、あれはき、虚無に通じる穴です。え、永遠のく、暗闇です」

俺と南さんはお互いにお互いを見た。小さな声で笑った。

「原さん、平岡さん。一緒に永遠の暗闇を見に行きましょうよ」

そう言って俺と南さんと原さんと平岡さんは店を出た。

皆酔っていた。空気は冷たく、空気は澄んでいた。金属のぶつかる音を聞きながら、俺たちは穴のある場所にたどり着いた。穴の中には暗闇しかなかった。音は相変わらず穴の中でこだましていた。

俺は原さんを突き飛ばした。原さんの手は宙をもがきながら南さんの腕をつかみ、二人は虚無に落ちた。音は止んだ。

平岡さんはこちらを向いて仮面を取った。平岡さんの顔は疣で覆われ醜くはれ上がっていた。俺は自分の顔に疣がないか急に不安になった。

○九日目

最後の仕上げに町の真ん中、目と口の穴に三本の棒を立てる。ボンドで固定した。棒には、ヨットの様に大きな三角形の布をつける。仮面はちょうどボートのような形をしている。顔の穴だけふさいでやれば浸水することもなく航海することができる。祖父の家の近くには海があった。そこへ行く機会があったらこれを浮かべてやろうと思う。海は広いし、世界は日本だけじゃないということを町人たちは知っているのか分からないから。ちなみに三角の布はハンズで買った。

前半

GUSH OUT

僕が生まれる前というのは今よりもっと危険な時代だったらしい。しかも危険というのは自然の脅威とかではなく、人々の殺し合いのことだ。現在でも世界西東戦争の傷跡は町にも根深い。

僕の町は年中、霧や煙に覆われていて、上空は飛行機やヘリは通過出来ない。なぜそんなにも霧や煙が被っているのかというのは、三方がセウエド山脈がずしりと聳え立ち、残りの一方は戦争を止めた東、西を分ける壁が久遠に空へ延びている。盆地の典型的パターンが完成した。さらに星の自転とかが影響していて、空気が他の場所よりも重い。三方から入ってきた霧や煙は対流して上空に逃げることも出来ずにその場所に留まるといふ訳だ。これに加えて各家庭が無責任に暖炉の煙突から黒煙を出すから量が加速される。つまり池のようなものだ。川から入って来る水や湧き出た水は流れ出ることも知らずに溜まり、池は湖になる。町の場合ではそれは上に溜まり、その上に溜まっていく。

このように、町に住んでいる僕たちは空を見たことが無い。非道いときには腕の先が見えなくなってしまうほどだ。だから、日の光が当たらないものだから年中冷凍庫にいるようなものだ。ただし、来週の月曜日から金曜日の昼にかけて、五百年に一度、風向きが変わる。よって、空気は入れ替わり、空が見ることが出来るのだというのがここ最近の噂だ。

朝起きると、まず歯を磨いて顔を洗い、コーヒーを淹れる。そしてトーストを二枚焼き、ストロベリージャムとマーガリンを両方に塗って食べる。今日のコーヒーは少しばかり酸味が薄かったし、トーストは耳がちょこっと焦げてしまった。しかし悪くない朝だった。一週間後にはここに日の光が入ってくるのだなと思い、笑みが溢れてしまうのを耐えられなかった。しかし問題は小さな窓でさえ、この家には無いということだ。今週中に窓を作らなければいけないなと思った。両親が「空のある場所に住みたい」と言って僕を残して引っ越して行ったときには僕は小さな宝石装飾店の社員として働いていたし、そろそろ自分が出て行く時期だと思っていた。だから僕は意外な方向からやってきた事柄に対して少し驚きはしたけれども、反対はしなかった。何回かはこの家で女の子と寝たけれども、どの子もパツとしなくて、それぞれ違う道へ分かれて行った。切り出すのは僕だったり、彼女だったりいろいろだった。そんな時、町の路地で球体関節人形を拾った。土で少し頬と黄金の髪が汚れていたが、何回も洗われたようであったが光沢のある淡い紫のドレスは輝いていた。警察に届けようと思って町の中心へ歩いていったが、スモーク警報が出て、帰らなければならなかった。家に帰って、フリースのポケットから人形を出し、濡れた布で汚れた顔を拭き、シャンプーで髪を洗った。洗い終え、机の上に立たせて眺めていたら急に警察に届けるのが惜しくなった。それ以降僕はベッドの近くにある引き出しの中に、旧友から貰った、何処かの国の刺繍が施してある厚い布の上にしまっていて、毎晩寝る前に取り出し、眺めてから床に就くことにしている。そうすることによって、僕は安堵してゆっくり寝られるようになる。しかし、いつもは意識的に見ないようにしている。緊張がとけて、仕事も何も手に付かなくなってしまうからだ。

僕は着替え、アナログの時計を左手につけた。腕を振ってねじを巻かなければならない。両親が引っ越してしばらく経って、父親の本棚に飾られているのを発見した。父親が取りに来ないので、僕が失敬した。どうせ高価な物ではないだろうし、汗で革のベルトの変色している。

時計といえば町の中心の広場に、地面に彫ってある四つの時計は世界的に有名な彫刻家が描いたと昔通っていた小学校で先生に教わった。なんにも役に立たず、どの時計も針の指している方向が違うので誰も見向きもしなかった。見ていたのは小学校の先生ぐらいだった。

僕は茶色いコートを羽織り、財布を持って、町に出た。家の鍵は掛けなくても鼠賊の心配はいらない。そういう穏やかな町だ。荒ぶるのは自然だけで十分。

町の中心部にある広場に向かって歩いていると小さな子供が鞆を持ってぞろぞろ歩いているのが気になった。その光景を眺めていて分かった。今日は土曜日だ。一日勘違いしていた。噴水のある広場に着く前に、温かいコーヒーを一つ買った。動物園のカバが入っていたような色のそれを広場のベンチに座って、飲んでいたら絵が描きたくなった。僕はカップに沢山入っているコーヒーをベンチに残し、歩いて近くにある小さな文房具店に入った。中には眼鏡を掛けた初老の老人がカウンターにいた。彼はいらっしゃいませ、と小声で言った。

僕は店内を見回した。四坪ほどの空間に鉛筆や消しゴムやクリアファイルやらがぎっしりと棚に詰まっていた。僕は小筆を手にした。品の善し悪しはよく分からないが、何となく目に付いた。チューブの油性絵の具も購入した。紙の箱に入った、十二色の物だ。

カウンターに向かう間にもう一つ目を釘付けにしたものがあった。黒い缶スプレー。手頃なサイズで、つい買ってしまった。

商品を木の皮の色をした紙袋に入れて貰ってるときに、店主は僕をちらっと見て言った。「お客さん、店のシャッターにFUCKとか書かないでくださいよ。最近の若者はよくスプレーで落書きするから、一応言っときますよ。」店主は僕にめんどくさそうに紙袋を渡した。「ありがとう。でも、僕はそんなに若くないし、絵も中学以来描いたことないよ。」と言ったら店主は難しい顔をしてそっぽを向いてしまった。僕は軽く会釈をして店内から出た。

街灯にこんなにも寒いというのに虫が小さな旋回をしながら三匹程度集まっていた。街灯の下では二匹、白い蛾が死んでいた。僕は紙袋からスプレーを取り出してビニールを破り、蛾を中心に十字架を二つ描いた。蛾に手足を付けてキリストのようにした。スプレーを噴射するのは心地よかった。

家に帰ったら早速壁にスプレーをしてみた。何の罪悪感も感じられなかった。部屋が柑橘系を一垂らししたような匂いで満たされた。こんな匂いの女の子と寝たことがあるなと思い出しながら、でもそれが誰であるかを忘れてしまったことに気がついた。誰でも良いというのが率直な感想だ。

壁は煤がついたように真っ黒になった。紙袋から絵の具を取り出して、床にチューブを置いて、踏んづけてみた。チューブはクルミが割れるように裂け、茶色いコートに緑の絵の具が飛び散った。ふらっとした。体が熱い。たらたら、机に向かって行って、引き出しから体温計を取り出した。少しばかり熱があるようだった。そのままベッドまで歩いて行って、横になった。悪寒がして毛布を被った。が、息苦しくて眠れなかった。毛布から顔を出し、ベッドの下に落ちていた本を取って開いた。日本語で書かれた本で、買った記憶がなかった。しばらく読んでみると、これまでにないだるさが湧き出てきて、目を瞑った。

人形——と思い出して、突然眠りから解き放たれたのは外が深い闇に包まれてしばらくしてからのように思える。僕は人形を引き出しから取り出し、眺め、しまった。すどん、と何かが腹の辺りに落ちたとはこの事だ。すべてがしっくりいった。もうこの町に用はないんだろうと思った。

なあ、と呼びかけた声の先に無数の人の影が蠢いていた。

DIG AWAY

スコップを地面に突き刺し、ヘルメットを外す。黄色いヘルメットには日本語で『安全第一』と書いてあ

る。陽を求めて、薄暗い洞窟となった道をランプを持って淡々と歩く。

穴から這い出てきて、ペットボトルの水を飲む。長い時間、外に置いといたせいで、生温かくなっている。汗を拭う。一キロ以上先の超高層ビル群を眺める。

町は成長し、分裂する。そしてまた成長する。

古増殖型町群の中でも一番、核町にたどり着くのが困難な町。その町に向かって僕たちは穴を掘り続けている。何年も。というより僕が生まれる前よりずっと昔にこの作業は行われていたらしいから、特別ではない。

一世紀前ぐらいに世界でなんかの規約が採択された。規約の内容はこの際どうでも宜しい。なぜなら採択されたことについての書類を届けるのが僕たちに使命だからだ。国は全ての州に書類を渡し、その書類を各町やらに届ければ事は順調に進んだが、国が一週間ばかり郵送を遅らせた。その二、三日前から町は分裂を始めていた。お陰で、書類は役所に届けられなくなった。すぐに穴を掘って死に物狂いでも届ければ良かったが、どうすればいいか考えているうちに分裂し続けて後戻り出来なくなってしまった。

そして、州が考え出した答えがこれだ。僕たち国家公務員にヘルメットとスコップを支給して、穴を掘らせる。頭がイカれているとしか思わないが仕事は仕事だからしょうがない。

辺りを見渡すと、二百メートルほど離れた所にこれまた巨大な湖があり、それは一つ前の世代がこしらえたもので、残念なことに町に向かって行く方向を間違え、海に出てしまい、八人全員溺死したということが歴史上残っている。この事件で驚くべきことは、八人で、そこまで長い距離を掘れるのかということではなく、なんでそんなにこちらの穴を距離をあけなかったのかということだ。非常に危ない仕事だ。みんな必死に掘っている、ということはなく、みんな適当に仕事をこなしている。

水曜日 快晴

昨日、仮面の町を観察しに行った。いや、仮面の町の仮面を見に行ったという方が正しい。悪くない町だ。なんといってもロンドン風の町並みがいい。霧も少しばかり出ていて、じめじめした感じだった。

ただ、地球の重力の中での町の重力は少しばかり疲れさせたようだ。体が重いよ。

スコップを地面に突き刺し、ヘルメットを外す。黄色いヘルメットには日本語で『安全第一』と書いてある。いつものことだ。

つい先日家に帰ろうとしていたら、一輪車に乗った男の子が近づいてきて、穴は？と言った。

「穴はまだ掘るの？」

僕は答えた。たぶん、まだまだ。

「これからも掘っていくよ。」

いつまで。男の子はバランスを取るために両手をぐらぐらさせて言う。

ずっと先までさ。僕は言う。

ねえ。男の子は言う。仮面が。

「仮面の町が増殖してるよ。他でも。」

そうか。僕は言う。嫌なことになった、と僕は顔に出さずに言う。

男の子は心配そうな顔をして言う。

「そっちにも、ハケンされるの？」

多分な。僕は言う。

男の子はへえ、と言って、くるっと振り返り、両手をぐらぐらさせながら向こうの方へ行ってしまった。

町の増殖を抑えることは不可能だ、と発言したのは町の増殖を抑えるための薬物やら兵器やらを研究し

ている所の所長だったと思う。

所長は言う。町は、
「町が有る限り町は増え続けなければならない。この小さな星の上でそんなことをされたらたまったもんじゃない。そして町が増え続けることによって星の宇宙人に対するリスクが高まる。」

所長はテレビの生出演でそれを言った二時間後、頭をかち割られて、手足を失った状態でテレビ局のトイレで発見された。

増殖、という言葉を知ると、反射的に聞こえた方へ振り向いてしまう。言いたいのは、死体の増殖ではないことは分かって欲しい。

木曜日 快晴のち雨のち雹

こんな天気は初めてだ。ああ、寒い。今、毛布を被ってこの日記を書いている。

面白いことを電話で聞いた。隣の国が、新たな爆弾を開発しているということだった。何に使うのかは聞いていない。楽しみだ。

掘った穴に詰めて、爆発させても良いと思うな。掘る手間が省ける。

ところで虫について書く。

虫が家にいた。珍しいことだ。体が朱く、目が緑色の虫だ。水を掛けて殺し、ホルマリン漬けにした。久しぶりにホルマリン漬けにしたものが増えた。しかし、棚は瓶で溢れてしまっていたので、床に置いた。

一番のお気に入りはこの前書いたもので、二番目に好きなものを今日は発表しようと思う。二番目に好きなのは……

道ばたに落ちていた黒くてつやつやしたものだ。薬ではないかと疑っている。

スコップを地面に突き刺し、ヘルメットを外す。黄色いヘルメットには日本語で『安全第一』と書いてある。当たり前すぎて感想もない。

当たり前というが、大変な事が起こっている。仮面の町の分裂が止まったのだ。

CONFERENCE

最後に入ったのはロシアの大統領だった。一つの席を除いて、全員が座った。さあ、と言ったアメリカ大統領を無視して、クロムウェルがみんなに名刺を配ろうとした。そんなことをしている場合ではない、と黒人アメリカ大統領は叱責した。クロムウェルはへらへらと笑って謝った。アメリカ大統領は不機嫌だったが、敵国がいるので黙っていた。イギリス大統領が部屋の隅に監視されている仮面の町を横目に、人形をポケットからとりだした。急に仮面の町が檻に体当たりし始めた。クロムウェルの隣に座っていた女性がマシンガンをどこからか装備し弾を檻に叩き込んだ。弾丸を喰らった仮面の町はぐったりとした。エジプト大統領は手を口元に当ててた。死んでしまったではないか、とミュワが言った。ロシア大統領が何か言おうとしたが、クロムウェルがこの程度では死んだりしないさ、と言った。ロシア大統領がその人形は、と皆に質問を投げかけた。イギリス大統領は人形がなくなっていることに気がついた。

「またかい」とエジプト大統領は言った。消えてしまった人形は世界の何処かに落ちている。皆、そう信じている。で、対処法は、とアメリカ大統領が言ったとき、クロムウェルの隣に座っている女性の口からプラスチックの棒状の物がぼたりと落ちた。

「なに食ってんだよ。」ロシア大統領が母国語で呟いた。

クロムウェルは驚いて、早く出て行けよ、と言った。隣に座っていた女性の喉の中でなにか堅い物が通り過ぎていった。女性はアメリカ大統領が取り出したショットガンで殺された。死体の腹からは白い液体が流れ出てきた。皆、ぞっとしてSPを呼んだ。SPは一人死んでいてもう一人が片腕を失っていた。ミュワがどうしたんだ、と言ったら、SPは部屋の隅を指さした。振り返ったエジプト大統領は嘘だろ、と呟いた。檻の中には何も居なかった。その時、ミュワがSPにかかと落としを喰らわせ、SPは驚いているのと激痛でアサルトライフルから手を離れた。ミュワはそれが床に落ちる前に片手で取り、前転をしてから構えた。照準はアメリカ大統領に合わせられている。ミュワは引き金を引いた。すると空間が歪み、そこから一人の男が出てきて血を流して倒れた。光学迷彩を使った服を着ているので上半身しか見えない。アメリカ大統領はおお、とうねり声を上げた。

すかさずクロムウェルがピストルをエジプト大統領の頭に突きつけ、片方の手に持っていたナイフをSPに投げつけた。ナイフはSPの胸に向かって飛んで行き、防弾チョッキを着けているはずなのに血が溢れてきた。

ロシア大統領は走り出したが、アメリカ大統領の膝蹴りを喰らって倒れ込んだ。ロシア大統領が床から顔を上げると、アメリカ大統領の顔があった。思わず手が出た。ロシア大統領の拳はアメリカ大統領の首にめり込んだ。アメリカ大統領は衝撃を感じなかったようで、びくともしなかった。ただ、鼻から白い血が流れてきた。

「サイボーグー」直後ロシア大統領は顔面を殴られ、顔が吹っ飛んだ。

クロムウェル、と元、アメリカ大統領が言った。席に着け。

クロムウェルとミュワは部屋に戻って椅子に座った。クロムウェルは足を組みながら仮面の町は、と言った。ミュワは天井を指さした。元アメリカ大統領はピストルを天井に向け撃った。六発全て放ったが、仮面の町は姿を現さなかった。クロムウェルは暗視ゴーグルを頭に巻いて、いないや、と言った。アメリゴ、とミュワは言い元アメリカ大統領、アメリゴは頷き、C4爆弾を腹から出しては設置し、出しては設置した。クロムウェルはショットガンで反応をしなくなった女性を炎で熱して表面を溶かし、接着した。C4爆弾が部屋中にされた頃に、女性の髪の中に隠してあるリセットボタンを押して、女性は目を開けた。女性は分かった、と言って歩き出した。クロムウェルとミュワは女性の後に続いた。

アメリゴは既にパラシュートを開いていた。

三人が安定飛行用会議室のドアから飛び降りたとき、アメリゴはマッチを放ち会議室は爆発した。太平洋の上だったので、アメリカのレーダーに引っかかったかな、と全員思ったが、今はそんな事をしている暇はなかった。消えた仮面の町を探さなければならなかった。

海に沈んだ仮面の町を。

DETERMINATION

肌寒い風が吹いている。八人で囲む焚き火はパチパチと寂しそうな音を立てている。皆自分のしていたことに思い悩んでいた。イビトがいきなり立ち上がった。皆一斉に顔を上げた。イビトはポケットからナイフを取り出し、握りしめた。ナイフが握られた手を焚き火に突っ込んだ。イビトは苦悶の表情をしながら、自分の皮膚を食べていく火と戦った。イビトは焚き火から手を出した。皮膚は溶け、ナイフと一体化していた。皆、ぼんやりとそれを見つめていた。イビトは周りを見渡した。そして、一人一人の顔を確かめるように眺めていった。ガンと目が合ったとき、彼は立ち上がり、合掌をした。皆も立ち上がり、合掌をした。先に自分たちを葬っておこうと、強く思った。死んでも生きても、どちらにせよほとんど変わらないことだ。冷静に考えよう。

しかし、周りの反応は違った。泣き出したり、咆吼を上げたりと、皆忙しそうだった。忙しいだけいな、と僕は思った。

僕は家に入った。椅子には名前も知らない婆さんの死体が縛られている。三週間ほど前の拷問で死んでしまったのだ。階段を通りすぎて、奥の部屋へ向かう。チエが居る部屋へ行く。ドアを開けると、ベッドに居るはずのチエは居なくて、壁に梯子が掛かっていた。すると少量のガラスが落ちてきて、上を見上げるとハンマーも降ってきて、目の前で床に跳ね返った。梯子の先にはチエの下半身が見えていて、窓から乗り出しているようだった。

僕は走って外に出て、みんなに大声で「チエが、チエが、に、逃げた!!!」と言ったらリンが「どこだ!!!」と言い、僕が裏の方へあごをしゃくるとそれまで叫んでいた人とか色々走っていった。僕も走った。チエは二階の壁をつたって降りようとしていたがみんなが来てしまって立ち止まった。悪いことをしてしまったと少し感じた。

ツイナが「降りてこいや」と関西弁で言った。皆も降りて来い、と口々に叫んだが、チエは動かなかった。そして遂に飛び降りた。みんな駆け寄って、落ちてきたチエを捕まえて、泣き叫ぶチエを担ぎ上げ、奥の部屋へと送った。ヤウゼイが亀甲縛りをし、椅子にくくりつけた。放心状態のチエのパンツも鋏で切り捨て、完全に全裸になった。リンが落ちていたハンマーでチエの右膝を破壊した。チエは一瞬顔をゆがめ、ああ、と声を漏らした。うんうんうん、と頷き、茶色く濁った眼から涙が溢れた。皆、それを眺めていた。右足はだらりとだらしくぶら下がり、口からよだれがだらだらと流れた。カナタは早速ズボンを脱ぎ始めた。チエを、ツイナを殺した奴の彼女として彼は憎悪に燃えていた。その後、輪姦。

僕は輪姦には参加しなかった。女性陣もこの前してしまったので飽きていた。僕は婆さんの死体がある部屋で横になっていた。女性陣は三階で何かしていた。死んだ婆あさんの死体の横に、婆さんが持っていた造形がある。拷問の時、婆さんはそれを仮面の町とかなんとか言っていた。仮面の町は、なんだか分からない形をしていて、しかし本能的に町だ、と思ってしまうような物体だ。住宅やコンビニや学校、人間は勿論、道も表現がされていないその造形は、みんなに嫌悪感を醸し出していた。町の要素がない町。その造形には眼がある。町ではない町。

そうか、と僕は思った。町と感じられないから町だと思っのではないか。

とんでもない仮説だ。そう考え直したとき、仮面の町が倒れた。

後半

CONFERENCE

霧が濃く掛かっている細長い道。周りは膝ほど有る雑草が生えている。文房具屋の店主は淡々と、その道を歩いていた。八フィート先は霧のせいで全く見えない。しかし、地面にはパンくずが五フィートの間をおいて落ちていて、行かなければならない所までの印となっている。

二十分ほど歩いたころであろう、開けた場所に出た。三フィート間隔で綺麗に彫刻が成された石像が建てられている。その下にはもちろん墓石があり、十三万程度程の死体が埋まっている。霧はさっきよりだいぶ薄くなった。中心の方へ歩いていくと、とりわけ大きい石像の上に一人の男が立っていた。

「アメリカ。」男は鉄やコードがむき出しになった顔を店主に向け、顔を確認すると、ジャンプして店主の前に降りてきた。

「やぁ、来ないかと思ったよ。ステンチ。」

「とても重要な話なんだ。」ステンチは近くにあった悪魔の石像を蹴って倒し、それに座った。アメリカは先ほど上に立っていた石像に拳を一撃加えて、椅子を作って座った。

ステンチは葉巻を取り出し、火を点けた。白い煙を吐き出し、

「仮面の街が地球外から攻めてきた。」

「何だって！」アメリカは思わず立ち上がった。「俺たちが開発したのはオリジナルじゃなかったのか。」ステンチは葉巻を吸った。

「オリジナルといっても設計図は誰が書いたのか分からなかったじゃないか。」

「だがしかし、ホワイトハウスに乗り込んだ時に入手したものだったからな。地球外の物であるとは思わなかった。」アメリカは自分で勝手に納得した。

ステンチは葉巻を投げ捨て、「どうする。」と呟いた。アメリカに言ったようだが、決して他者への問いかけでは無いことは石像でも分かった。

「住民に銃を持たせるか。」アメリカは言った。ステンチはアメリカの方を向き、「あまり効果を見込めないだろう。」

石像をアメリカが破壊した。「どうすりゃいいんだよ。」

「人間でも分からない事を人工知能が解決できると思うのか。」

「なんだと」アメリカは顔から煙を出した。「人工知能のほうが、お前ら人間よ……りあた…ま……」シューという音を出してアメリカは静止した。人間に従って人間を殺すことは出来るが、人間そのものに刃向かおうとすると制御装置が作動して再起動する。アメリカは今、シャットダウン状態で、身動きが取れない。ステンチはアメリカのポケットから小型マシンガンを取り出した。マシンガンに弾が装填してあるのを確認し、頭部、胸部、腹部に叩き込んだ。

重要端末を破壊尽くされて、ただの鉄の塊と化したアメリカは墓場に散らばった。

ステンチは叫んだ。「出てこい、アメリカ！いや、エターナル！」

霧の向こうから二つの赤い光が動いた。そして軽い地響きをならしながら、それは近づいてきた。ステンチは両腕を大きく開いて出迎えた。

「いやぁ、大きくなったなあ！」アメリカからエターナルへと人格変換を行った彼は、とてつもなく巨大化していた。ステンチの倍ほどの背丈がある。エターナルは石像に座った。「やぁ。」低く、くぐもった声で彼は言った。「今の話しは全部嘘かい？」

「勿論さ。大体君はエターナルになっていたから、最初の会話で気付いたよ。」

ん？ と彼は首を傾げたが、ステンチは構わず話し始めた。

「仮面の街はいいんだ。これまで通り。しかし——」

「新しい街が生まれたか。」ステンチの言葉を遮ってエターナルは言った。右手であごの髭を撫でている。

「政府の対応は？」

「今は住民を混乱させないようにとか言って公表していない。まぁ、あと二日持つか、持たないかな。」

「今日中には住民の前に新しい街がお見えになるだろう。」エターナルは顔をしかめた。そうじゃないんだ、とステンチが言い、「今度は近寄っても目視できないぞ。」

エターナルは溜息をついた。「倒せるのか？ つかどうやって新しい街を確認したんだよ。」

「赤外線か、暗視カメラで写せば、何らかの形で見えてくるんだ。」

「そんな懐かしい付属品が残っているのか。」ステンチは続ける。

「仮面の街2は『隠れ蓑』だ。中に何がいるか分からん。あれは完全に、街だ。」

エターナルは言う。「光学迷彩だよな。」

「今のところそういうことになってはいる。ただ、仮面の街2自体が、本当に街の一部として機能し始めたから……。」

「住民はそれを公園だと思い、ビルだと思い、ケーキ屋と思う。いや、待て、見えないんだろう……、もしかしたら——」

「そう、住民の精神状態に街はなる。」エターナルはなんでだよ、と思ったが、口にするのはやめておいた。

ステンチが長く息を吐き出す。「住民は新しい街を見ても何も思わない。それが当たり前だと洗脳されてしまうからだ。」しかし、そんな事が可能ななのか。エターナルは考えた。

「個々の人間に対して脳干渉が可能なのか？」

「その可能性は十分にある。しかもそれだけじゃない。神経細胞にも干渉できる可能性も低くは無い。」ステンチは自分の文房具店が、街に変わるところを見届けた。運良くステンチは逃げたが、彼の妻は街と一体化してしまった。石化したのだと彼は推測している。

「今度の街は今までの仮面の街とは比べものにならないほど力も強いし、知能も発達発達している。しかも発生原因が分からない。これは仮面の街とも同じだ。どうにかしてこれ以上の発生を食い止めたいと思う。」

「分かった。」エターナルは指を鳴らした。「いつでも掛かってこいや。」

ステンチは頑張ってくれ、とだけいうとの霧の中に姿を消した。

DESTRUCTION

無線に爺さんから連絡が入った。「おーい、アレック。ジープをそこから矢印方向へ進めてくれい。」フロントガラスの端に矢印が投影された。夜中の二時もことである。私はガラスを高感度モードから暗視モードへと切り替える。さらに併用して音拾い機からフロントガラスに音を拾った方向を秒速更新で貼付したら、情報量が多すぎて視界が遮られた。助手席ではレイがマシンガンに弾を装填している。私はジープを簡易自動操縦に切り替えてTNTの入った袋を腰にくくりつけ、爺さんから貰った使い込まれ、さらに強靱となった日本刀を片手で持った。

二十キロほど走らせたならフロントガラスに赤く光った部分が見え始めた。温度が高い。レイが装填終わったよー、と言いナイフを口に咥えた。私はポケットから一枚の紙を取り出し、そこに描いてある模様を見つめ、瞳孔が大きくなったり小さくなったりするのを確認した。そして iPod に刺さっているイヤホンを耳に入れ、神経系を麻痺させるためランドが創った機械的な雑音を聞いていた。レイが立ち上がり、RPG7を手にして荷台に飛び移っていった。十秒ほど走らせたなら、突然大きな発火音と共に暗視モードのせいで赤く光ったミサイルが遠ざかっていった。だんだん近づいているせいで大きくなっていく仮面の街に飛んで行った。レイは荷台から戻ってきて隣に座った。

運転席の下にコードが沢山絡まっていて、私はその一本を無理矢理引きはがして取り、うなじ辺りの蓋を開けてコードを差した。コードは三又で一つは右胸の辺りに差し、あと一つは右腕、もう一つは日本刀に差し。日本刀は私の体と一体化し、一つの筋肉のように感じるようになる。日本刀に私の血液と精神が流れ込み、日本刀の神経が私に伝わってくる。

片手で運転しているとレイはブロンドの髪を夜風に預けながらマシンガンと精神統一を行っていた。手

は親指と人差し指と中指の三本で結ばれていて、瞳孔が極端に大きくなって、ほとんど白い部分が無い。光をなるべく集めようとするからだ。マシンガンを放つ時には周りが暗すぎる。レイは私を気遣ってサングラスを掛けた。一度トラウマになりかけたことがあって、それ以来掛けるようになった。弾詰まりが起きそうな箇所は全て把握していて、その時は精神統一の警戒を大幅に上げるといつか言っていた。

いつの間にか倒れているビルがあって熱を発している。RPG7が命中したらしい。トマホーク機能を追加してあるので適当に狙いを定めればミサイルの方が勝手に向きを変えて行ったのだ。レイがあ、人、と言った。暗視モードで確認できない。警報が小さい車内に響き渡った。幻覚臭が漂っているらしかった。神経系を麻痺させたことはさせたが、まだこめかみが痛くなる。レイは錠剤を飲んで、痛みを少しでも解消させようとしている。そういえば、レイは仮面の街を相手にするのは初めてだったな、と思い、「人が見えたら全て幻覚だと思え」と言った。レイは笑って、「勉強済みです。」と答えた。

仮面の街のすぐしたまで来たとき、レイはドアを勢いよく開けて飛び出していった。レイの姿がバックミラーにちらりと映った。私も急ブレーキを掛けてジープを止めた。左手でドアを開け、走りながら、助けてくれと叫びながら近寄ってくる同じ顔をした幻覚人を斬り殺していく。通常の間ではあり得ないスピードで走り、一番近い仮面の街の、柔らかい足を三本斬り落とした。半分の足を失った仮面の街は幻想人を使って咆吼を上げた。つかみかかってくる幻想人の腹を真っ二つに斬り裂き、仮面の街のガラスの壁を垂直に走り上りながら壁に切り込みを入れていった。ジャンプして屋上に降り立った時に私の重みだけで仮面の街は崩壊した。背中についているジェット噴射にも手伝って貰い地上に着地し、次に近い仮面の街を見た瞬間、背筋が凍り付いた。

レイがレイに囲まれている。

レイは沢山のレイにマシンガンを全方向から喰らっていた。きゃあああああ、と言いながら口から血を吹き出し、それでも尚銃弾をたたき込まれている。私は瞬間的に偽レイを斬りたくり、中心で口から血を流して倒れているレイに叫んだ。

「ジープに早く乗れ！」動く気配が無い。私は抱きかかえてジープまで走って行った。大丈夫か、と言いながら急いで座席に乗せようとしたとき、レイの姿がふっと消えた。

———幻想人。

走って戻るとレイがただ一人お腹を押さえて呻いていた。私が斬ったのか？その可能性しかない。レイはマシンガンを手にとって、嗚咽を漏らしながら私の方へ歩み出した。走ってレイを抱きかかえた。そしてジープにまた戻って座席に座らせた。腹を包帯で巻いたが、包帯に血がにじみ出した。私は近寄って来た五人ほどの人を斬り、ジープを発車させた。

しっかりしろ、と何度も言い、マシンガンを握らせていた。レイは薄目を開けていたが、やがて瞼が閉じて、呼吸音だけがうるさい車内でかすかに聞こえるようになった。その代わりに、私の心臓が鳴らす、テンポの速い鼓動は、いやでも聞こえた。

私は思い出し、爺さんに無線を入れた。「レイが、やられた。」

「なんじゃと?!」無線にはキーボードを鳴らす音が入る。「電気系統の武器かなんかで腹を深く切断されとる。かろうじて生命活動は維持しておるが……。はてはお主、レイを斬りおったな！」

「違うんだよ。」

「私の孫娘になにしとるんや!!」爺さんが暴れ出した。ガラスの割れる音が何回も耳に入る。「やめろよ爺さん!!」

「黙れ！」ジープが浮き上がった。伝説の戦士、爺さん、いやガノリッチの真の力が発揮されようとしている。「はあああああああ!!!」

ジープのフロントガラスにひびが入った。しかも私の方にだけだ。スナイパーライフルでも射撃が困難

な距離にある車に、私の顔面を直で狙って攻撃できる。ひびが入ったところに、ようやく実像が浮かび上がる。早すぎて虚像がガラスにひびを入れたのだ。よく研がれたナイフがフロントガラスに無数に突き刺さっている。最後に突き刺さってきたナイフの衝撃で、フロントガラスが粉々に割れる。私の前だけだ。レイには全く被害がない。私はドアを斬り飛ばしてフレームに掴まる。ガラスが多少飛んできたが、ほぼ全てがシートに突き刺さった。簡易自動操縦に切り替えて、私はジープの荷台に飛び移る。しかし、車はくると向きを変え、私は移り損なった。

地面に打ちつけられて転がる私にはジープの走り去ったあとの砂埃が舞い上がる。遠い彼方にあるジープを見つめ、溜息をつく。ナイフが地面に突き刺さる。顔を上げるとそこには爺さんがいた。ナイフを振り上げる動作がすこしぎこちない。

爺さんではないな、と思って日本刀を爺さんに振りかざす。爺さんは真っ二つになって、そして消えた。そして、遠くで爆発が起こった。ジープに乗ったレイはレイではないな、と思い安心した。

それにしても、この擬態能力はなんなんだ。今までに無かった能力だ。仮面の街が進化して、全く別のものになったか。

私は元来た道に戻り始めた。走る走る走る。レイが待っている。

A SOS

周りは暗い。長い洞窟であるから当然だ。そこに一つの光が浮かび上がる。人かと思ったら、ロボットだった。サイボーグとかそういう価値の高い物ではない。旧型の頑丈なキャタピラで動くやつだ。人命救助用であるが、瀕死の人間など何処にも居ない。

ロボットの名前はS-O-Sだ。しかし、今や他のロボットなども見かけないので、名前は必要ない。名前を呼ばれることもない。ただ、彼だけは自分を保つだけに名前を持っている。しかしそれはプログラミングに埋め込まれているだけの情報であって、ロボットはただのロボットであるとおもっている。

昔はS-1-SやS-72-S、S-3-Zもいた。しかし、皆戦場に駆り出されてしまった。S-O-Sはただ人命救助をしていたので、仮面の街や擬態の仮面などにはあまり出くわさなかった。

大統領レヴェルの間人か、哲学者や生命誕生理論を研究している学者は、仮面の街の出現の理由を知っていた。人間が都市を創ったから、仮面の街が生まれ、また其れが集合して都市が出来、また、それを求めて擬態の仮面が生まれた。

S-O-Sにはそれが埋め込まれた。Sシリーズの生みの親、暗号名AAA。彼は最後に研究室にロボットを呼んで、そのデータを流し込んだ。ロボットはそれを後世に伝える役目を果たせと言われた。ロボットはプログラミング通りに了解した。後世にデータを伝える。もう一度ロボットは了解と言った。AAAはロボットに行け、と行った。ロボットは別れを告げた。

洞窟を抜けた。満点の星空が見える。鉄の破片やかつては人間の一部だった黄ばんだ骨や木が折れて、残った株が点々と存在する。埃が風に飛ばされて沢山舞っている。

ロボットは空に向けてSOSを発信する。それはたくさんの星に反射して、宇宙にこだまし、そして消えてなくなった。

ショートカットは好きですか？

因みにこの僕、アゼル・フローレンスは、好きだ。大好きだ。大好きなのだが、それだけが良いかと言えば、決してそうではないとも僕は言いたい。

は？こいつ何言ってるの？頭がおかしいんじゃない？と思ったかな？そう思った方々に。僕は真面目だ。いや、真面目におかしいと言う訳じゃない。ちゃんと理由があるからこんな話しをしているのだ。

変な誤解をされないためにも、ここはとっとと説明した方がいいかな？では聞いて貰おう。僕の国のあほな話しを。

一時は戦国（嘘）。いやふざけているわけじゃないんですよ？本当にこういう名前なのです。……本当にこういう名前なんですっ！

納得した方もしてない方も、ひとまずは僕の話聞いて欲しい。話せば分かる。僕は、モスナルドという国に住んでいる。女子の髪型の多様さと、美味しいカレーパンで有名な国だ。そんな僕たちの国の国王はルディ・シータという。中年の入ったおっさんだ。そんなルディ（以後ルディと呼ぶ）がこんな命令を下したんだ！

「この国に住む全ての女子はポニーテールにせよ。」

………は？ってなりますよね。だって、髪型の多様さとカレーパンだけが特色といってもいい、このちっぽけな国から、髪型を消すと言うんですよ。あり得ないでしょう？あまりにもあり得ない命令だったので、みんな国王に説明をもとめた。そうしたら国王が、翌日国民の前で説明すると言った。

そう言われたので、僕らはその日は泣き下がった。

次の日、国民は国王の説明を聞くために、国王が住む宮殿に集まった。そこで、国王はこんな説明をしゃがったんだ。

「この国は今、未曾有（みぞうゆう）の危機にさらされていましゅ。」

みぞうゆうって、あんたは某Aさんか！そしてかんでんじゃねええ！そう突っ込みたい気持ちを必死に押さえ、僕は国王の話に耳を傾ける。

国王は一度咳払いをすると、こう続けた。

「髪型の種類が少々多すぎるのです。」

「確かに、髪型の種類が多いのは悪いことではありません。独特な個性を持った髪型は、人を引きつけます。しかし、少々多すぎるのではないかと、とも思うのです。だから、少し減らそうと言うのが、私の考えなのです。」

と締めくくった。確かにそうかもしれない。だが、全員ショートカットというのは、少しやりすぎではないだろうか。

そう思ったので、国王が取ってくれた質問タイムの時質問してみた。

「国王。じゃあみんなショートカットにする必要はないんじゃないですか。」

そう聞いてみると、国王は苦虫を百匹ぐらいかみつづいたような顔で、

「ショートカットが好きだから。」

と言った。

………は？驚きのあまり思考が停止する。

僕の思考停止中に、僕と同じ疑問を持ったみんなが、僕の代わりに質問してくれた。

「では、未曾有の危機というのは、嘘だったんですか？」

国王は額に脂汗を浮かべながら答える。

「え、ええと…、そ、そういうことになるのかな？」

国王がそういった瞬間、一部の酔狂なショートカットマニアを除く全ての国民が、反乱を起こすと心に誓った。そして、国王軍 v s 国民軍の戦争が始まったのだった。

僕たちの国の人口は約20万人。そのうち、反乱に参加した人数は、僕を含めた約8万人ほどとなった。対する国王軍は、兵士で構成された軍隊、約2万人となった。

強い目的を持ったときの人間は、強い。国民の軍団は、コ〇ケで目当ての物を求めるときのオタクのように、バーゲンセールの会場に向かう主婦のように、国王軍の領土を駆け抜け、次々と国王軍を降伏させた。しかし、あと一つという所になって、国民軍の足が止まった。ショートカットマニア軍団のせいだ。敵の軍団、総勢約5000人の軍勢は、『仮面の街』と呼ばれる、国王の住む宮殿の前の町に立て籠もり、最後の抵抗を続けていた…。

国民軍には、部隊が4個あった。2つは敵軍と戦う為の部隊。もう1つは、敵の情報や作戦を掴む為に作られた諜報部隊、そして最後に国民軍を指揮する指揮部隊に分かれていた。そしてこの僕、アゼル・フロレンスは第1部隊に所属している。何故第1部隊かって？

それはね…、僕の名前がアゼルだからさ。え？まだ分からない？しょうがないな一、では説明してあげよう。国民の部隊の編成は、50音順に分けられる。つまり、アゼルは『あ』から始まるので、第1部隊に所属されているのであった。

「こちら第2戦隊。こちら第2部隊。敵が前方に固まっています。指揮官は作戦の指揮をお願いいたします。」

「うむ…、第2部隊は敵の特攻を警戒しながら待機。第1部隊は敵に気付かれないように後ろへ回れ。」

了解。そんな声と共に僕ら第1部隊は移動を始めた。

順調に行けば今日中に終わるはずだったんだ。順調に行けば…終わるはずだったんだ。僕たち第1部隊が移動をしていると、第2部隊から緊急通信が入った。

「こちら第1部隊、敵軍が一斉に攻めてきました！至急援軍を！繰り返す！こちら第1部隊、敵軍が一斉に攻めてきました！至急援軍を！」

「了解。すぐに向かう！」

そう報告を受け、すぐに第2部隊の元に向かう。第2部隊は、敵の猛攻に押され、戦線が崩れそうになっていた。第2部隊は、

「俺、この戦争が終わったら、結婚するんだ。」

「俺には剣がある。これさえあれば俺は負けねえ！」

「おい！どっちが多く倒せるか勝負だ！」

と、次々に死亡フラグを立てて特攻し、次々に倒れていった。残りの兵が少なくなってきたところで、ようやく僕ら第1部隊が合流する。

「第1部隊、到着！第2部隊の援護に回れ！」

「了解！」

僕ら第1部隊が第2部隊と合流したことによって、次第に戦線を押し返すことに成功した。しかし、敵軍は恐れを知らずに僕たちの軍勢と戦い、戦線を維持していた。それはまるで、何かを待っているような表情だった。

戦い始めてから10分程経っただろうか、僕たちの元に緊急通信が入った。

「敵軍が反対側から回ってきます！繰り返す、敵軍が反対側から回ってきました。」

な、何！？囲まれた！？これはまさかのキツツキ戦法！？そして囁んだ！？それともわざと！？

——待て、冷静になろう。こういう時こそ落ち着くのだ、アゼルよ。今起きているこの状況を三行で整理してみよう。そうすれば落ち着けるよね。せーのっ、

第1部隊と第2部隊が合流中。

第2部隊と第1部隊は敵軍との戦闘で体力が残り少ない。

そこに敵の援軍が登場。挟み撃ちにされる。

………ピーーンチ！！

どうしよう、どうしようどうしようどうしよう！このままではこっちが全滅だ！

僕が頭を抱えていると、僕ら第1部隊の隊長と、その部下達が、颯爽と立ち上がった。

「ここは俺たちに任せて、先にいきな。」

その言葉に一同は驚きを隠せない。次々に隊長に意見をする。

「隊長達だけで持ちこたえられる軍勢ではありません！」

「ここは私達も協力します！」

「隊長一人を置いていくななんていやです！」

その言葉に隊長は、

「みんな、この俺が信用できないというのか？大丈夫、俺を信じろ。なぁに、すぐに戻ってくる。心配するな。さあ、行け！」

「「たいちょー——！」」

くうう、隊長は男だ！漢だぜ！死亡フラグをこんなに格好良く立てられるなんて！ここは隊長の言うとおり、撤退だ！

僕たちがいなくなった後、隊長は敵軍の真ん前で仁王立ちをして、

「我はラシュディ・バレル！我が魂にかけて、ここはみんなを逃がしてみせる！行くぞ、野郎ども！YEAH!! LET'S PARTY!!」

「YEAH!!」

BAS○RA 風に言い切って特攻する隊長達を涙目で見送った後、僕は思った。

…ああ、隊長の名前って、ラシュディだったんだ…。

自軍、ベースキャンプにて。僕たちは、隊長、ラシュディの死を受け止めきれずに、思い雰囲気の中にいた。そこへ、指揮部隊の隊長、つまりは今回の作戦の最高権力者、ビリー・マーカスがやってきた。ビリーは僕らを見るなり、こういった。

「みんな、ラシュディが死に、暗い気持ちだとは思う。だが、私の話を聞いて欲しい。」

「ラシュディ達の決死の特攻と、君たちの活躍によって、敵軍の半分が倒れた。更に残りの半分も、自軍のベースキャンプにて休息を取っていて、あまり動ける兵は残っていない。今ここで動けば、敵軍の全滅も望める。しかし今ここで動かなければ、ラシュディの死は無駄になり、敵軍兵士はまた体力満タンの状態でこちらに向かってくる。お前達はそれでいいのか？命を張って貴様らを救ってくれたラシュディに恩返しをするべきでは無いのか？」

その言葉にベースキャンプにいた自軍全員の魂が震え上がった。

「そうだ、ここで腐っていたら、俺たちの為に死んでいった隊長に合わせる顔がねえ！」

「ああ、折角隊長が作ってくれたチャンスだ！ここで生かせずしてどうする！」

「「特攻だ！」」

「うむ、その意気やよし。それではこれから最後の作戦を指示する！全軍、一度しか言わんから、心して聞けえ！」

「了解！！」

——僕らの心は一つになった。

夕刻、敵軍前にて。

敵軍は国王の住む宮殿と仮面の街の丁度真ん中にある小高い山の上に陣を敷いていた。今回は前回と違って軍を二つに分けているということはなさそうだ。敵から攻められにくくするためだろう。もっとも、特攻されるならば、その利点はあまり効果を発揮しないのだが。

作戦指揮は、もう死んでしまったラシュディ隊長に代わり、副隊長マルコ・タイラーが僕ら第1部隊に司令を出すことになった。

「ただいまより、作戦を開始する。第1部隊全軍、気を引き締めてかかれえ！」

「了解！！」

そして僕たちは敵軍に最後の特攻を仕掛ける。敵軍もそれは覚悟していたようで、臆せずに特攻してくる。両軍は正面からぶち当たる。僕もみんなに負けじと特攻を仕掛ける。

「うおおお！！」

「うおおお！！」

両軍一歩も引かない。両軍、ここで負けたら後が無いことが分かっているからだ。

どちらも引かず、このままでは終わらないと思ったとき、指揮部隊の隊長から、指令が下った。

「第2部隊！特攻開始！」

「了解！！」

そして第2部隊全隊員が敵軍の後ろから特攻を仕掛けた。敵軍の猛攻が止まり、所々から驚きの声上がる。

「な、何！？敵が後ろからきただと！？」

「ただでさえこっちは消耗してるのに、更に来るといのか！？」

——キツツキ戦法。これこそが僕たちに示された作戦だった。

～回想～

ビリー指揮官は自軍全体に言った

「我らの戦法はキツツキ戦法で行く。」

「えええええええええ！！」

あちこちから驚きの声上がる。それはそうだろう。敵軍と全く同じ戦法で行こうと言うのだから。

「確かに敵と同じ戦法で行くのはためらいがあると思う。あまりいい気分では無いと思う。しかし、だからこそその作戦で行く価値があると思わないか？」

——だからこそ、いく——。

「我らがこの戦いに勝つには、相手を出し抜く事が必要だ。だから、それには相手が考えない作戦を立てる必要がある。それには、このキツツキ戦法がいいとは思わないか？」

ビリー指揮官の言葉は的を射た、適確なアイデアだった。更に、ビリー指揮官は続ける。

「それに、この作戦で勝ってこそ、ラシュディに対する真の弔いだとは思わないか？」

ビリー指揮官がそういと、今までキツツキ戦法戦法に否定的だったみんなは、考えを翻し、

「そうだ！キツツキ戦法だ！」

「ラシュディ隊長の弔い合戦だ！」

「この作戦を絶対に成功させて、隊長に最高の弔いをするんだ！」

という、キツツキ戦法に賛同する声が大きくなった。そのムードを引き継ぎ、ビリー指揮官は言った。

「では全員、キツツキ戦法で行ってくれるかな？」

「「いいともー！」」

昔はよく見たが、最近はあまり見なくなった返事をして、僕たちの作戦はキツツキ戦法に決まったのだった。

～回想終了～

ビリー指揮官の行っていた通り、敵軍はこの作戦で来るとは思っていなかったらしく、動揺していた。僕たちは、その隙を見逃さず、さらなる猛攻を仕掛ける。

前と後ろで挟み撃ちにされ、逃げ場の無くなった敵の軍隊は、戦意を消失したらしく、次々と白旗をあげ、遂に敵軍全ての白旗が揚がり、戦いが終わったのであった。しかし、本当の戦いはこれからなのである。

さあ、国王の元へ！

国王は、宮殿の中に立て籠もっていた。しかし、僕たち第1部隊と第2部隊、それに指部隊が宮殿の前についた途端に、宮殿から出てきた。宮殿から出てきた国王に向かって、ビリー指揮官が言った。

「国王は、国民は全てショートカットにせよという命令を解除しますか？そうすれば、命は助けてあげましょう。」

国王は観念した顔で言った。

「分かった。その命令を取り消そう」

その瞬間、全部隊から歓声が上がった。

その歓声は、最後の戦いが終わったことを示す歓声だった。

因みに、僕の台詞が少ないという突っ込みは、無しの方向で。

アパートから駅へ至る途中、ちょうど田圃と新興住宅地の境界あたりに洋菓子店ができた。そうかい、そうかい。

その言葉を頼りにして、その洋菓子店に向かった。何もなく無駄に広い田圃の間を 아이폰 で音楽を聞きながらとおって、いくらか進むと小さな林がある。冬の黒い木々の間を通り抜けていくと、ひっそりと目立たないようにその洋菓子店はあった。洋菓子店の周りには木々の間から日がさしていた。童話に出てくるお菓子の家みたいな洋菓子店だった。クッキーやらクレープやらチョコやらのような材料でできている。入り口の板チョコのドアの周りにはミスドのポン・デ・リングがあって、その上にはクッキーのプレートにピンク色のアルファベットが並んでいる。アポクリフという名前のお店のようだ。ちなみに私はポン・デ・リングが食べたい気分です。

板チョコの扉を開けて中に入ると、あまり広くない店内にはいいにおいが充満していた。お菓子の店には窓が無いらしく、外の日の光は感じられなかった。その代わりオレンジ色の電球が明るく光っていて、少しまぶしい感じだった。

「こんにちは」

私はできるだけ明るい雰囲気装った。その方が私にあっていような気がするのだ。

「こんにちは。いらっしやいませ」

店のカウンターにいた男はこちらをまっすぐ見つめてそう言った。背が高そうなくせに猫背で私のことを下から見上げるその男は少し奇妙だった。

私はショーケースの方へ向かってきれいに規則正しく並んでいる洋菓子を眺めた。セブンティンケーキ、エイティンチョコズ、ナインティンパイズ、ジスイズザシュークリーム、ネバネバームクーヘン、スイートポテト、カステラベイビー、タルトン、ハンガリアンムーンドーナツ、パニックプリン、エスカルゴンゼリー、アイスクリームノクチェルノ、などが並んでいた。何が何だか。和菓子も律儀に並んでいたのでお菓子なら何でもいいのかもしれない。どれもが一口サイズでカラフルで名前以外はとてもおいしそうだった。私に食べられることを待ち望んでいるようにさえ見える。なんかお菓子ってこうやって眺めているだけで幸福になれるんだなあ。もしかしたら私はそっちの方面の人間だったのかもしれない。

「何に致しますか？」

店員は落ち着いた低い声だったが、私をじっくりにらんでいるようなギョロ目だったので私は適当においそうなドーナツを頼んだ。適当とは言っても、ポン・デ・リングだ。

「店内でお召し上がりですよ」

と言いながら、店員の男はポン・デ・リングを素手で三つつかんで皿にのせた。素手で！

「！」

「お飲み物はサービスですので、何か好きなものを選んでください」

そう言って男は自分の指をなめながらコーヒーか紅茶かそれとも水かあるいはビールやカクテルがいいですか、などと聞き始めた。店員の行動にすでにドン引きをしていた上に、尋ね方が少々乱暴な気がしたので内心いらいらしたが、しかし何とか怒りを抑えてコーヒーを頼んだ。

「コーヒーで」

「コーヒーですね。分かりました。すぐ準備します。それまでこちらの席で座って待っていてください」

そう言ってその男が空けた席は今まで彼が座っていたと思われる席である。男はカウンターを開けてどうぞ、と言ってきた。

「はい……。わざわざどうも」

怒りの表情が出ていないかがとても心配だった。

「いえ、お気遣いなく」

そう言って男はカウンターの奥へと入っていった。訳の分からない人だった。店に彼以外の人は見当たらなかったが本当に店長なのだろうか。

その男はさっきまでつけていたエプロンを外してTシャツにジーンズというラフな格好で戻ってきた。まるで友達のような。手には二つコーヒーカップを持っていた。

「どうぞ」

と言って男は片方のコーヒーを差し出して私の目の前に座った。私の目の前に変な姿勢で座った彼は何も言わずコーヒーを飲みだした。ずずず、とコーヒーを少しすすった彼は、隣のショーケースを開けてカステラを口に放り込むとこっちに向き直った。私はこの店に軽々しく入ってしまったことを後悔した。

「さて、本題に入りますか。ところで、ドーナツ食べないんですか？」

「？ は、はあ。いただきます」

本題？ どうやらこの男は私のことを知っているのかもしれない。初めから私のことを知っているのならそう言ってくれればよかったのに。私はそう思いながら小さなポン・デ・リングを口に入れた。

「お、おいしい！」

ああ、なんておいしいドーナツか。生きててよかった。

「あなたは今どういう状況なんですか？」

と、男は尋ねた。とはいっても、聞きたいのはこちらの方なのだ。

「あの、その前に、わたしから質問していいですか？」

「構いません。どうぞ」

そう言いながらおはぎを丸呑みしようとするその男。

「あなたは、私のこと、あの、どれくらい知っていらっしゃるんですか？ 言いにくいんですけど、私、昔の記憶がほとんどなくて」

「もぐもぐ、私はあなたが、ごっくん、記憶喪失であるということしか知りません。けれども、ぱくっ、あなたの記憶が元に戻る手助けをするのは、もぐもぐ、一応私の、ゴクリ、役目です」

男はおはぎを食べながらそう言った。おはぎを一口で食べるのはやはりきついらしい。

「私の記憶をもとに戻すのがあなたの役目、というのはどういうことなんですか？」

思わず身を乗り出して聞いてしまった。

「それが私の、この洋菓子店の経営方針と言いますか。私がそう決めたと言いますか、初めから決まっていたとも言えますが、まあ要するにそれが私の仕事なわけです」

どうもこうもむちゃくちゃだ。ギョロ目は変わらないが、少し下を向いたところを見ると慌てているのだろうか。別に攻め立てたりしているわけではないはずなのだが。逆にこっちがイライラしてくる。

「よく分からないけれど、本当に記憶は戻るんですか？」

「それは時と場合と、偶然とあと運命とによると私は考えますが、今のところ失敗した人は一人もいません」

失敗例はまだない。それがセールスポイントらしいな。非常に胡散臭いけれど。

「具体的には、どうやるんです？」

「話すとは少しわかりにくいかもしれませんが。信じてもらえないかもしれませんが。しかし、真実だと受け止めて、落ち着いて聞いてください。実は、私の作るお菓子はどれも普通のものではありません。それは、科学で証明できる類のものではないし、魔法なんてロマンチックなものでもないけれど、まあ、小説みたいなもの

のだと思ってください。つまりところ作り話のようだと受け取ってもらって構わない。私の洋菓子を食べた人は、過去の世界へと行くことができるようになります。過去の世界にはあなたの過去が、記憶がしっかりと残っています。それを確かめれば、あなたは記憶を取り戻すことができるはずですよ」

そう言って男はグッドマークをしてにっこり笑って見せた。私は話の内容をほとんど理解できなかった。よく分からないまま私もグッドマークをかえした。無意識的にそのまま親指を下向きにしそうになるが笑顔でこらえた。

「と、ということは、私は過去の世界へ過去を確かめに行くんですね」

「そうです」

「過去の世界から現実の世界に戻れなくなるなんて危険なことはないですよ」

「ありませんよ」

「そうですよね。さすがに何のリスクもないはずが、って、ないんかい！」

「ええ」

男は興味深そうな笑みをこぼした。目はどこか遠くを見ているようだ。

「あの、さっき小説のようなものだと言ってましたよね。なんの危険もない旅なんてただの旅番組じゃないですか。いいんですか、それって？」

「現実と小説を混同してはいけません」

男は人差し指を立てて、メトロノームのように私の鼻の先で振って見せた。

「あなたの記憶をもとに戻すことが最終目的ですから、それができればなんだっていいじゃないですか。しかしあなたは特別の例外ではあります」

そう言って男は今度はシュークリームを放り込む。

「なぜですか？」

私はきょとんとして尋ねた。

「この店に来てポン・デ・リングを食べてくださったのはあなたが初めてです。自慢のメニューで私の好物なんですけどね、気が合いますね」

他に選びようがないと私は思うのだけれど、男の妙な気迫に押されて私は愛想笑いをかえした。

「あなただから打ち明けますが、私はそろそろこの店をやめようと思っていたんです。そのタイミングであなたがやってきてポン・デ・リングを頼んだ。これは何か縁があると思いませんか」

男の喰いつきは突然すぎて気持ち悪かった。

「本当の本心では、故郷に戻ってしばらくゆっくり過ごしてみたいのです。学生時代の彼女に私の作ったお菓子を食べてもらいたいです」

突然の身の上話の展開に悪い予感しか感じなかった。早くここを出た方がいいかもしれない。

「私はそろそろ行きます。先を急ぐので。ポン・デ・リング、ご馳走様でした」

「お役にたてれば幸いです。では、お気をつけて」

よくもまあそんなことをぬけぬけと言えるものだ。少し感心すらしてしまう。私は水色の小さなショルダーバッグを肩にかけなおして、振り返らずに店を出た。

私は洋菓子店を出て、田圃とは反対側の駅のある方へと向かった。駅を向かう途中には、新興住宅地があるはずだった。だが現実はそのとはいかない。なぜって、ここはすでに私の過去の世界なのだから。

ああ、空が暁の薄暗い赤色をしている。超、中二っぽい。駅は二キロくらい先だと、アポクリフの例の店員は教えてくれた。だが、駅に向かうにはさびれた街々を通り抜けなければならない。

例の店員が言うには、過去の世界と言っても純粋にその人の過去の世界というわけではないようだ。もし純粋な過去の世界だったら、旅なんてできないんだろうと思う。自分の立ち位置すら把握できないだろ

う。この町に映った私の過去を私はひしひしと感じている。

空は薄く暗い赤色をしていて、月だか太陽だかわからない明るい丸いものがある。町の建物は皆半壊していて、植木も電柱も皆倒れて電線が絡まってぴんと張ってしまっている。時折ピンと張った電線が震えて低く嫌な音を放った。地震の後のような景色だったが、自身の過去だけに笑えない。いや、逆に笑えてくるかな。私もこんなにひどいやつだったのかって思うと何だかうれしくてにこにこしちゃうなあ。

瓦礫や半壊した建物たちはみんな変な色をしていた。カラフルで、まるで洋菓子みたいだった。蛍光塗料でもぬられたみたいに赤い光を受けて発色している。通りづらい道なりだというのに、やけに多くの人が道を歩いている。どいつもこいつも見たことあるような、ないかもしれない顔だ。パット見覚えのあるのがないのは残念だった。けれど、駅にたどり着く前に記憶を思い出したら逆に死亡フラグだ。へへへ、そう言えば昔友達と死亡フラグを作るにはまっていたような気がするなあ。誰だかはまだ思い出せないが、親しい友人だったような気がする。そう考えている私の横を赤いスリムな車が結構なスピードで横切って行った。危ないなあ、と思っていると案の定何人かはねられていた。そのことにも驚いたが、はねられた人が何もなかったかのように再び歩き出すのにはもっと驚いた。みんなまるで気がない。私が健全な女の子でないことは確定していた。崩れた滑り台の横を通りながらそう思った。

その時唐突にがさっというリアルな物音がして私は我に返った。驚いて振り返ってみると、そこにいたのは一匹の黒い猫だけだった。可愛い猫だね。

半壊の新興住宅地を抜けると、商店街の残骸らしきところにたどり着いた。駅も近いのだろう。人も少し増えた。なんだか怪しい雰囲気立ち込めている。スーツ姿の裕福そうな真面目そうな会社員が多くなってきた。彼らと私にいったいどんな接点があるっていうのか。うすうすわかるけどね。変なおいもするし。みんな私の太ももを見てにやにやしたりこそこそ話し合ったりしているからわかる。私は彼らと寝たのだろう。一人で？ それとも誰かと一緒に？ 一人でこれだけの人数と寝たのなら立派なものだ。自慢できる。……誰に？ ……誰？ そう、私は誰？

「やあ！ やあ？ やあ(爆)」

アクセントを変えて三回同じ言葉が繰り返された。振り返ると見覚えのある女の子が立っていた。セーラー服を着た女子中学生。懐かしいなあ。

「やあ、アユミ、久しぶり！ 立ててる？」

「フグちゃん！ 実は私昨日靴ひも切れたと思ったらリアル死にかけた！」

「だいじょぶだいじょぶ。私こう見えても強いからね、大体のことは生き残るよ」

この子はフグちゃん。フグみたいな顔してたからそう呼んでた。中二の時一緒に死亡フラグを立てたはずが私だけなぜか生存フラグになってしまった。そう、彼女はもう死んでいる。人は記憶の中で生き続けるってほんとだなあ。ちょっと感動した。

「てかさあ、何でアユミがここに居んのさ？ もしかしてあれ？ 不可能を可能にしちゃったとか？」

「実は私さ、今記憶喪失なんだよね。だから自分を探しに来た」

「うわっ、生存フラグ！ だめだよ、アユミはもっと死亡フラグ立てなきゃ死ねないよ。私なんかたてすぎで死んじゃったんだからね」

「フグちゃんが冥土の土産だとか言って私におそろいのキーホルダー買うからでしょ」

「それもそうか」

フグちゃんは昔と同じだった。死亡フラグが好きなのは中二の時から成長できていないからなんだろう。私も思わず童心に帰ってしまった。

駅の方が騒がしかった。電車が何本も行き来して、いろんな人やいろんなものを運んできた。

「そうか。昨日からやけに駅がうるさいのはアユミが記憶喪失だったからなのか。アユミの記憶がこっちに

送られてきちゃってる」

「ごめんフグちゃん。私そろそろいかなきゃ。まだ全部思い出してないから」

「わかった。ここは私に任せてアユミは先に行って。アユミなら全部思い出せるよ」

「ありがとう」

大丈夫。ちゃんと二人とも生存フラグだ。運命的な再開だったと思う。

駅は汚くなってはいたが、壊れてはいなかった。フグちゃんの言う通りやってきたのは私の記憶のほぼそのものだった。小説なのに記憶がこんな簡単に乱雑にすんなりと私の頭の空白にはまっていく。百二十円切符を持ってホームのベンチに座る私は、自分の過去が一つずつ頭に収まっていく感覚を満喫していた。私は不良の女の子で、ポン・デ・リングが一番好きで、中学生のころに友人を一人亡くしていて、今は麻薬を売買していて、自分でも結構吸っていて、娼婦である。私は車に轢かれて記憶を失った。うすうす気づいていたことではあったが、気持ちのいいものではない。しかしこれらはすべて私の、私自身の過去だ。受け入れよう。人は過去を増殖させていく生き物だと知ってはいても、私は未来を、明日を向いて生きていたいから。

ホームで流れ行き交う電車を眺めていたら、電話が鳴った。水色のショルダーバッグから 아이폰を出して、電話に出る。 아이폰につけたおそろいのキーホルダーが鞆のチャックに引っかかって切れた。「もしもし、俺です」

声の相手は洋菓子店の例の男だったのだが、いきなり、俺です、もなかなかない。

「帰りが思ったより遅いので心配で電話してみました。大丈夫でしたか？」

「心配しないで。全部わかったから、すぐ戻る」

そう大声で言って私はガッツポーズをした。もちろん満面の笑みで。 아이폰から自分の声が聞こえてはっとした。

それにしてもこの列車、長くないか。回送電車はまだ続いている。電線の震える音も心拍停止を伝える嫌味な機械音のように一様に響いている。終わらない now loading はフリーズと呼ばれます、まさにそんな状況。

そんな中終わりのない長い長い列車が止まって人が降りてきた。緊張が走る。けれど、出てきたのはTシャツにジーパンというラフな格好に加えて、猫背。そして両手にいっぱいのだーナツ。

「やっと、見つけました」

そう言って、男は笑顔で私にドーナツを渡した。

さて、かえろっか

アパートから駅へ至る途上、ちょうど田んぼと新興住宅地の境界あたりに、洋菓子店が出来た。ぽかぽかした春の日差しが窓からするすると入って来るような頃だ。洋菓子店が出来たのは、五年ほど前、古本屋があったところだ。古本屋はこの時代にあまり合っていないし、場所も場所というもので潰れてしまった。

僕は二週間日ばかり経った夕方に、その洋菓子店に入ってみた。僕は洋菓子という物を特別好きこのんで食べるタイプではなかったが、大学の研究があまり上手くいってないので、何か気晴らしが出来る物は無いかというノリで洋菓子店に入ってみた。カウンターの奥に少女がいて、読んでいた本を閉じて「いらっしゃいませ。」と言った。

ケースに入っているケーキはどれも珍しい物ではなかった。ショートケーキ、チョコレートケーキ、モンブラン……等。彼女だったら軽く作れそうなものばかりだった。しかし僕は今、気晴らしの出来る物が欲しいのだ。

「すみません。お勧めの品はございますか。」

少女は顔を上げ、「こちらのチョコレートケーキはお勧めできますが。」

「ああ、ありがとうございます。」僕はチョコレートケーキをもう一度見た。

もとはホールケーキだったのか、三角形型の何層にも重なっているチョコレートケーキ。上には絶対に乗っかっているチョコレートの板。少し金箔らしきものがかかっていたが、とても買う気にはならなかった。僕は少し苛立っていた。

「なにか、凄いのはありますか。」

少女はまた顔を上げ、しっかりとした目で僕の目をじっと覗き込んできた。僕も必死で目に力を入れて見つめ返した。

非道く恐ろしいほどの長い時間が僕らを取り巻き、僕がああっと叫び出したくなったとき、彼女は視線を逸らし、本に葉を挟んで奥の部屋へドアを開けて行ってしまった。僕は焦った。通報されるのかと思った。でも、外へ出てはいけない気がして、さらに動こうとしても体が動かないのだ。それで、もっと僕は焦った。汗がだらだらと流れ、混乱している頭をどうにか制御し、洋菓子店から出ようとした。

ドアまであと二、三步の所で、お待たせしましたと背中が聞こえた。急いで振り返り、僕はカウンターにスタスタと歩いていった。はいつと聞くと少女はクスクスと笑って、「こちらになります。」と言った。少女は手に抱えていた、少し大きめの立方体の箱をカウンターに置いた。木製だ。

見るからに高そうだ。案の上、少女は「フランスから輸入したものです。」と言った。僕は今二千元程度しか持っていない、僕が難しい顔をしていたのか、「二百三十八円です。」と少女は言った。安心して、財布から三百円を出した。少女は百円硬貨三枚を握り潰すようにして受け取り、六十二円のおつりを渡した。

僕は礼を言って、箱を抱えて店を出た。何分いたのか分からないが、夕日がずっと向こうの方でぼんやり光っていた。相当冷え込んでいたが、半袖の僕はむしろ暑かった。箱を抱えているせいだ。Tシャツが汗でぐっしょり濡れて息苦しくなってきた時、アパートに着いた。箱を片手でようやく抱えることが出来て、家の鍵を開けるのには少し苦戦した。

冷たい玄関に箱を置いて、夢を見ているような感じになる。財布からレシートを取り出して見た。こんな安い物が売ってあるのか。しかも専用の箱付きでだ。レシートを見て店の名前を初めて確認する。『EAT ME』。アダルトビデオのタイトルのような名前だ。すぐに値段を確認する。二百三十八円（消費税込）。僕は喜びと同時に恐怖を一瞬感じた。しかしその恐怖はたちまち消滅してしまい、箱を開けようと思った。開けられなかった。蓋が無かった。

そう、箱に蓋が無かったのだ。どうこねくり回そうと蓋らしき物は無かった。僕は非道くむかむかした。こうなったら壊してでも開けてやろうと思い、ハンマーを引き出しから出して、叩きまくった。表面は少し凹んだが、どんだけ叩こうと一定以上凹むことは無かった。

何時間経ったのか分からない。僕は少々疲れているのだ。最後の一発をガツンと振りかざしてやったら、ゴンッと音がした。僕はハンマーを放り投げ、シャツを脱いだ。もう寝ようと思った。続けてズボンとパンツを脱ぎ、シャワーを浴びて、バスタオルにくるまったままベッドに座ったらもう寝てしまっていた。

目を覚ましたのは日の出前だった。ドアを拳で殴っているような音が部屋に響き回ったからだ。何回もゴンゴンと音がするので舌打ちして跳ね起きた。「なんなんだよ！」

電気を消すのを忘れた部屋は、散々荒らされていた。泥棒が入ったのだ。急いで玄関に向かう。鍵を閉めるのを忘れていたドアはノブを回せば簡単に開いた。

僕はガクンと膝の支えを無くし、座り込んだ。溜息しか漏れなかった。しばらくして気付いた。まだゴンゴンと音が鳴っている。うな垂れて、ベッドへ向かう途中、箱を発見した。しかしそれはもはや箱ではなかった。黒い毛で覆われ、ゴンゴンと鳴っていた。

箱が生き物と化して僕の足にまとわりついてきた。僕が驚いた顔で立ちすくんでいると、箱は家の中で走り出し、もっと家を荒らした。

僕はふうっと溜息をついた。泥棒なんて入っていなかったのだ。僕は、はははっと笑いだし、箱はゴンゴンと鳴いた。春の下旬の事だった。

彼女が『箱』の事を知ったのはそれから五年後のことだ。同居しようと言われ始め、最初は嫌がったが泣いてしまったのでとうとう同居することにした頃だ。僕は大学を卒業し、年収が一千万万越えだったので生活には何の支障も出なかった。『箱』は何も食べないし。

僕があこのアパートから駅前のマンションを買って、彼女が初めて部屋を訪れたとき、押し入れに隠しておいた『箱』がゴンッと鳴いて飛び出し、彼女の足にまとわりついた。彼女はわっと言って足を滑らして転び、僕は「おいっ」と怒鳴って箱を蹴飛ばした。

彼女は今では『箱』の事を可愛がってはいるけれども、あのときは大変だった。結局、僕が「なんで教えてくれなかったの。」と責められ、謝りまくる羽目になった。

僕は今、彼女の作ったチョコレートケーキを口に運んでいる。甘ったるくて、少し酸味のある果実の入ったケーキは今まで食べた中で最高に美味しい。僕は隣に座っている彼女の少し大きくなった腹を見つめる。彼女は僕に向いて座り、腹を撫でる。『箱』が元気にゴンゴンと鳴いて、僕はあのときと同じように、ハンマーでは無いけれども、優しく、生命の宿った腹を人差し指でそっと叩いてみる。

アパートから駅へ至る途上、ちょうど田んぼと新興住宅地の境界あたりに、洋菓子店ができた。

その日は、夏だった。太陽がじりじりと照りつけ、セミの合唱が響き渡り、陽炎が浮かび揺らめく、夏だった。

その店は、出来たばかりだというのに、いや、出来たばかりだからだろうか、人の流れがあるように見えた。実際、美味しいらしく、田んぼのおばあさん達の会話にちょくちょくその洋菓子店の話が出てきていた。

その噂を聞き、私も実際に行ってみることにした。

洋菓子店のガラスケースの中には、あえて言うほど珍しい商品はなかったが、見た目的にはクオリティーが高そうに見えた。店では、女1人と男1人で切り盛りしていた。たぶん夫婦であろう。

レジを担当している女が、「商品はどちらにいたしますか？」と聞いてきたので、一番メジャーなショートケーキを頼んだ。

女は、商品を渡すときに、私と目が合うと、一瞬目に鋭い光を宿した。

それから私は、アパートに帰った。そして、さっそくショートケーキを食べてみる。

そのショートケーキは、少しだけ甘みが強く、私が高校生の時、他の町で食べたショートケーキの味にそっくりだった。しかし、いつどこで食べたかまでは、思い出せなかった。そして私は、高校生の頃を思い出し、罪悪感の中に引きずり込まれた。

高校生の頃、私は友人を殺した。いや、直接的に殺したわけではない。間接的に殺したわけでもない。いや、間接的という言葉の範囲に、見ていただけも含まれるならば、間接的に殺したと言えるだろう。

友人は、正義感が強かった。いじめられている人を見て放っておくことが出来なかった。ある夏休み明けの昼下がり、友人はいじめられている同学年を助けた。助けてしまった。放っておけなかった。

助けた挙句にいじめていた奴らを更生させることができたなら、どんなにいいだろう。どんなに楽だろう。しかし、現実には、そんな淡い希望とは裏腹に、辛辣に、これでもかと思うほど辛辣に、現実をぶつけてくる。

その結果は、だれでも想像がつくであろう。そう、いじめの対象が、友人に移ったのである。いじめというか、ほぼリンチに近かった。

そして、助けた日から2週間後、僕がたまたま校舎の裏に行った時、友人がリンチを受けていた。悲惨で、残酷で、悪意に満ち溢れたその場所に、僕は行くことが出来なかった。足が動かなかった。ただ、見ていただけしか出来なかった一。

そしてその友人は僕の目の前で息を引き取った。

@

忘れたいけど忘れられない、消したいけど消せない、嫌なことを思い出してしまった。

そこで私は、気を紛らわすために、散歩に出かけた。

外は、夜に近いくせに、寒さとは無縁だった。それどころか、幾分暑い。

そのときだった。後に気配を感じたのは。

「うわああああああああああああああああああ！！！」

そんな声と同時に、腹部に何かが突き刺さった。

腹部から赤い血が流れていたの、それが包丁だと気づいた。

気づいたとともに倒れこむ僕の目線に、こちらを見る影があった。

それは、洋菓子店の女だった。

その女の顔を見て、僕は突然に、唐突に、なんの前触れもなく、全てを思い出した。

そうだ、あのケーキの味は友人の家で食べたケーキの味だったのだ。

僕が、友人の家に初めて行った日に出されたものだった。

その日は、夏だった。太陽がじりじりと照りつけ、セミの合唱が響き渡り、陽炎が浮かび揺らめく、夏だった。

そんな事を思い出しながら、僕の意識は混沌の中に飲まれていった。

アパートから駅へ至る途上、ちょうど田んぼと新興住宅地の境界あたりに、洋菓子店ができた。毎日同じ道、代わり映えのしない風景に突然飛び込んできた変化に、昨日の記憶を塗り替える痛みを感じたものの、手を引く娘がそんな思いを断ち切った。

「車が来ないか、ちゃんと見てから渡りなさい！」

見通しの良い直線道路、休日であるにもかかわらず、車も人も通らない。それでもそんな言葉を叫ばずにいられないのは、娘の左手が冷たく凍えているからでもある。その手を温める妻は、いない。

「も一、お父さん。わたし、もう中学生だよ。子供じゃないんだから」

妻もこのくらいの頃には生意気を言ったのだろうか、私にはまったく不平不満を漏らしたことのなかった彼女がいなくなって、五年が過ぎた。日々、妻の面影を色濃くしていく娘の右手がすり抜けていくのにも、そろそろ慣れなくてはならない。今に、別の男がこの手を温めるのだ。

「こんなところにケーキ屋さん、あったっけ？」

いや、気づかなかった、と正直に口を開く前に娘はもう扉に手を掛けている。白木造りの扉は重々しく、雪原の山小屋のような外観は、背景の田んぼを西欧の田舎町に塗り替えた。ただ、フランス語で記された店名はいただけない。これでは、この町の誰もこの店を名前では呼ばないだろう。

「微妙な場所だね。ここじゃ、住宅地の人たちは買いに来ないだろうし」

娘の後ろ姿を追いかけて店内に入ると、天井から効果的に取り入れられた外光が、甘い香りを温かく包んでいた。この数年、あまり甘い物を食べていなかった私も、思わず唸り声を上げずにいられない。しかし、と腕時計を見ると十一時の十分前、まだショーケースには一つのケーキも並んでいず、どうやら開店前に飛び込んでしまったらしい。

娘が興味深げに焼き菓子の入った籠を眺めていると、奥から清潔な白さを身にまとった人物が現れた。パティシエ、というよりも洋菓子職人と言った方が似つかわしい、そのいかめしい表情に、思わず身をこわばらせた。

「すいません。まだ、開店前だっていうのに」

「いえいえ、どうぞごゆっくり」

口を開くと柔和に崩れた表情は、最初の印象を一転させた。気が緩むのと同時に、こんな場所に洋菓子店を開く店主に興味湧いた。娘は、今度は色とりどりのクッキーが入った籠を眺めている。

「今日からですか」

「いえ、昨日から。でも、お客さんはお二人が初めてです」

「ここは難しい場所でしょう。駅前にはチェーンの洋菓子店もありますし、住宅地の人たちはあまりこちらには来ませんし」

「まあ、でも、こういう場所がいいですよ。何しろ、こういう場所にはたくさん悲しみがたまりますから」

気球のように膨らんだコック帽が、外光によって散った顔の皺を一瞬陰らせた。それが、彼が屈んだせいだと分かるのに時間がかかったのは、彼が思いのほか長身だったからだ。レジの下から取り出した小さなカードを差し出ししながら、彼は店名らしきフランス語を早口で言った。

「誕生日や結婚記念日みたいな祝い事があれば、ぜひ。電話でのご予約も承っておりますので」

「妻はいないんです」

言って、余計なことだったとはとしたが、その時に店主の瞳が輝いたのを私は見逃さなかった。といっても、それは彼が再び体を起こしたからかもしれない、店内にあふれかえる光は、きっと私の目も輝かせてい

るに違いないのだ。

「お母さんは事故で死んじゃったんだ。お父さん、余計なことと言って、パティシエさんを困らせちゃだめだよ」

素直に謝りながら、お前が彼女に似てきたせいだよ、と釈明にもならないことを考えていると、店主が口を開いた。

「大変ですね。私は独り身で通してきましたので、こういった場合にどんな言葉をかければいいか。でも、いい娘さんでうらやましいです」

「その分、自由がきいていいですね。自分の店というのは、憧れますよ」

今度は娘に対して不用意だったか、わき腹にひじ打ちを食った。店主の笑い声が私たちの間を優しく満たす。

「そろそろ」

と時計を見ると、すでに十一時を回っていた。開店はまだなのだろうか、と思っていると

「お父さん、このクッキー、かわいい！ 百二十円だって。いいでしょ？」

「じゃあ、一つ。あまり邪魔してもなんですから」

「いえ、またいらしてください。次にお越しの際には、素敵なケーキをお目かけされると」

「ええ、ぜひ」

駅へと続く県道に戻ると、冬の初めの風が首筋から熱を奪った。娘はクマをかたどったクッキーをあちらこちらと角度を変えつつ楽しんでいる。食べないのかと聞くと、その無粋をとがめられた。そういうものなのだろうか。

「モンブランが好きだったよ」

娘に妻の好きなケーキを聞かれたのは初めてのことだった。

駅前にある洋菓子のチェーン店には、この五年行っていない。それは、モンブランが甘すぎることで、レアチーズケーキにブルーベリーソースがかかっていないことでも、シュークリームの皮が厚すぎることでなく、クリスマスケーキを買って帰る途中で妻が事故にあったことによる。乗用車にはねられて反対車線に投げ出された彼女は、トラックに頭を轢かれた。それからというもの、クリスマスケーキはもちろん、娘の誕生日ケーキも二人で作った。そのために奮発して買ったちょっといい電子レンジは、近頃ではたまたま勝手に電源が落ちる。

「今度のお母さんの命日には、モンブランのホールケーキを作ってもらわない？」

妻の顔がモンブランと言ったような気がして、驚いた。それが違う意味にとられたのか、娘は申し訳なさそうな笑みを浮かべて、すぐに話題をすり替えた。

だから、その週の土曜、少し早めに退社した私は、再び洋菓子店の扉をくぐった。日が暮れていたせいで店内の印象は全く違ったが、壁に掛けられたランプを模した電気は、温かな印象をより強めていた。

ショーケースには定番のケーキのほかに、ムースやババロアが充実していて、黄色や赤や紫の幾何学的な立体に、細かな意匠が凝らされているのには目を見張った。中でも惹かれたのがベリーのムースだ。赤紫の立方体の上に散らされた粉砂糖の雪に、細かく刻まれたドライフルーツがイルミネーションのように輝いている。

「こんばんは」

声が聞こえるまでその存在に気がつかなかった店主は、今日は初めから柔和な表情で、私もまた警戒を解いて口を開いた。

「モンブランのホールケーキって、お願いできます？」

用意していたセリフはすらすらと、何の引っ掛かりもなく流れ出した。娘の顔がちらつく。気遣いは彼女の成長だが、それでも距離が開いていくようではいたたまれない。

「もちろん。大きさは、お二人で召し上がるなら三号か四号ですね。お日にちは？」

手際よく話を進めていく店主だったが、質問がプレートに入るフレーズに至って止まってしまった。

「クリスマス、ではないんですね」

「妻の命日なんです。モンブランは妻の好物で」

「それなら、プレートには娘さんとお二人でメッセージを入れるといいんじゃないですか。デコペンをつけておきますよ」

胸が痛んだ。娘との距離を案じていた私と、その距離を詰める提案をくれた店主。これが洋菓子職人の技術かと、痛む心を外に向けていなす。お土産を買って帰ろう。

「あと、そのベリーのムースを、二つ」

店を出ると、夜気に体が縮み上がった。振り返ると、暗闇に浮かび上がる洋菓子店が、田んぼに立てられた口ウソクのように燃えていた。窓には、中でせわしく動く店主の姿が大きく映っていて、その姿は幾分悪魔じみて見えたが、それは、彼の気遣いが私の心を見透かしていたせいだ。小さな箱を握る左手の先が痺れている。店主からこの小箱を受け取った時に流れ込んだ毒によるのか、それともこの胸の痛みがケーキに流れ込もうとしているのか。このベリーのムースの儂げないでたちには、私の悲しみをそのままにしておかない、生真面目さのようなものが感じられた。作り手が作り手なら、ケーキもケーキ、と言ったところか。

娘の用意した夕食の後、食卓に並んだ二つのムースを前に、私は不思議な悲しみに彩られた感慨に襲われた。妻を失って、初めて並ぶ洋菓子店のケーキ。そう言えば、生前にはこういったことが頻繁にあったのだ。喪われたのは妻だけではなかった。彼女と過ごした時間、その意味も、トラックが踏みつぶして行った。しかし、命は戻らなくても、その意味はここにこうやって帰ってくる。ベリーのムースに結晶した悲しみは、甘味よりも酸味を色濃く印象付け、私の舌は鋭く傷つけられた。であればこそ、私はまたこうして、食卓にケーキを並べるだろう。

そして何より、ケーキを口に運ぶ娘の笑顔が、やはり妻に見えたから。

家に帰ると、娘が泣きはらした顔で居間に座っていた。どんなに疲れていても笑顔で迎えてくれた妻のことを思い出し、彼女が私から隠し通した表情の可能性について考えた。娘の肩に掛ける手が柔らかくなる。娘は泣いていたことを隠さない。その距離に安堵する。

「いなくなっちゃうの」

「誰？」

「お父さん。いなくなっちゃうよお」

言葉にした途端に堰を切ったように溢れだした涙は、私のワイシャツを濡らした。小さい頃、よくネクタイで鼻をかまれて、頭をいたものだ。それが今はこんなに大きくなっている。泣く理由も、怖い夢を見たとか、花が散っていたとか、おもちゃに傷が付いたなんていう可愛らしいものではなくなっているはずだ。

呼吸が落ち着いてくると、娘は同じクラスの男の子のことについて話し始めた。父親一般はそれを楽しい話として聞けないだろうが、娘の右手を奪っていく存在について、日頃から考えを巡らせていた私には、彼女の頭を撫でながらその左手を見つめる余裕がある。妻のものだったはずの手は、小さく怯えているように見えた。

「彼（娘は決してその名前を口にしなかった。私としても、それは積極的に耳にしたい情報ではない。）引っ越しちゃうの。クリスマスに」

その日は妻の七回忌だ。非情な二択に娘は苦しんでいた。引き裂かれた小さな胸を思い、その片方が私のライバルであることも忘れて、震える彼女の体を抱きしめた。

「行ってきなさい」

「でも、お墓参り……」

「彼のことを放っておいて墓参りになんか行ったら、お母さんがなんて言うと思う？」

「うん」

「夜に、ケーキを食べよう。お母さんと、ね。それまでは、自分のことを大切にきなさい。クリスマスなんだから」

でも、彼はいなくなるんだな。落ち着いて話を聞いていられるのは、そういう事情があるからかもしれない。嫌な父親だ。

いや、普通の父親か。

クリスマスイブは終業式だった。娘が腕をふるってくれるのは毎年通り。私がプレゼントを買って帰るのも毎年通り。家計を考えてねだってくれたのも毎年通りだったので、私は早めに退社して、オフィスから程近いデパートに向かった。ぴたりと寄り添ったカップルをすり抜けながら、人混みを嫌った妻の言葉が耳に蘇った。

「お金を払って人波を泳ぐなら、冬の海に飛び込んだ方がましよ」

冬の海に潜れば君に会えるのか。でも、僕は人波に挑もうとしている。助言をくれ。彼女に似合う、彼に魅力的に映る服は、どこに行けばあるんだ。

駅前のスーパーで見る服とは一桁違う。子供服というくくりでもない。一着一着手に取りながら、その中に現れるのは妻の姿だった。

「これなら、いいんじゃない」

イメージの妻がうなずく。それは、深い紫色のワンピースで、カーテンのようにひらひらした生地がくっついている。ドレープと言うらしいが、いつもの娘の姿を思い浮かべながら、あまりにも大人びて見えることに戸惑い、値札を見て固まった。店内の女性を見回して、コートも必要だろうかと考えていると、まつ毛が跳ね上がった店員に声を掛けられ、これを下さいと言ってしまった。

晩餐の後の居間で、プレゼントを渡すと早速、着てみせてくれた。喜びながらも恐縮している様子に、申し訳なさの方が先に立つ。いいんだよと落とした視線を再び上げると、その姿が遠くに見えた。手を伸ばして肩を撫でる。

「いつの間にか大人になっていくな」

「だから言ってるじゃない。もう子供じゃないんだから、って」

ブランド名の入った紙袋を丁寧に畳んで、押入れに仕舞った。風呂から戻った娘は、タオルで髪を拭きながら、落ち着いた様子を装って口を開いた。

「お父さん、明日……」

「ああ、お墓参りはお父さん一人で行くよ。年が明けたら一緒に行こう。七回忌って言ったって、特別何をするってわけじゃないんだから」

「ごめんね」

「謝るくらいなら、明日、しっかりな。帰ったら、ケーキを食べよう」

「ごめん」

クリスマスは朝から晴天で、コートを羽織った私は、娘よりも早く家を出た。普段の時間からすれば遅い朝だが、陽射しが空気を暖めるにはまだ時間がかかる。霜の降りた田んぼを眺めながら歩いていると、洋

菓子店から甘い香りが漂ってきた。その中にはモンブランのホールケーキという、一風変わった注文も含まれているのだろう。

墓地までは一時間半かかる。郊外を結ぶ路線を南に下る電車に乗ると、土曜だというのに席が空いていた。腰を下ろしながら、まだ眠っているらしい車窓からの風景を見つめる。一人きりのクリスマスはいつ以来だろうか。

墓には既に花が手向けられていて、行き届いた掃除の様子から、実家のお義母さんの顔がちらついた。葬儀の席で挨拶したのが最後で、会ってもいないし連絡もしてこない。孫の顔を見たくないのだろうか、とも思うが、それだけ妻との溝が大きかったのだろう。生前、あまり実家のことは話したがらなかった。人づてに聞いたこともいくつもあるが、であれば私が口を出して事態が好転するとは考えられない。ご両親にとっては、どこの馬の骨とも知れない男、それが私なのだ。

いつもの蕎麦屋に寄って、少し早い昼食をとる。一人だと、何もかもが早く進んで行く。吹きすさぶ風に震えて自販機を探すことも、道端で寒さに萎れた花に指先を触れることも、葉の散った銀杏並木を見上げて来年は黄葉の頃に遊びに来ようと話をすることもない。二人用の席に座って、来年はそこに娘がいてくれるのだろうか、と答えのない問いに縛られる。昨日のワンピース姿が頭から離れない。風景に穿たれた穴のように、右隣が空いている。怖い。それが分からないことも、それを知ること。蕎麦屋の店主がこちらを見ている。娘と一緒にじゃないことに気付いているのだろうか。一年に一度の来店。それでも、忘れられない客というのがいるのだろうか。

洋菓子店には二組の家族連れがいた。子供の服装から、新興住宅地の住民だと分かる。そちらの人々にも認知されたのだ、と胸をなでおろす。店の側の視点に立ってこの場をやり過ごさずにいられない。

「いらっしゃいませ」

「忙しそうですね」

「おかげさまで」

幾分うつむきがちに接客する店主には、疲れがにじんでいた。冬の空気を振り払う外光の温かさも、店主に訪れるのはまだ先のような。クリスマスに忙しいのは、サンタクロースばかりではない。ケーキを受け取って飛び跳ねる子供を、母親が笑ってたしなめる。親も忙しい。一人で何役もこなさなくてはならない。サンタクロースのふりをしたことがあったらどうか、と顧みると、ひげ面の妻の姿がよみがえった。

「プレゼントを要求するサンタクロースっていうのは、初めてだな」

「だって、これ以上あげるものはないもの」

プロポーズ直後のクリスマスだった。甘い匂いに朦朧としていると、こちらです、という店主の声に揺り戻された。渡された箱にはリボンが掛かっている、こういう時は中身を確認するもんじゃないのか、とも考えたが、気にすることでもないかとうっちゃった。それよりも、そのリボンがあまりに子供じみているのに、頬が緩んだ。本人がどう思おうと、娘はまだまだ幼く見えるのだ。ずっと一緒にいると分からなくなる。あのワンピース姿など、出産後の妻よりも大人びて見えたくらいだ。化粧っ気が無くなってからは、生来の童顔のせい、妻はますます若く見えるようになっていた。

「いいクリスマスを」

「ありがとうございます」

家の中の空気が冷たい。昨日の食卓が思い出される。エプロンをした娘がディナーを準備してくれているというのは、世間的に考えれば、相当に幸福なことなのだろう。それでも、私はそこに妻を招きたい。食卓に置いた三つ目の椅子の掃除を怠ることはできない。カーテンを開けて日の光を入れながら、居間に体を横たえる。畳の目をいじりながら、ワンピースの触り心地を思い出す。

知らぬ間にうとうとしていたのか、気づけば日が暮れている。冷えた体が身震いする。時計が見えず、時間が分からない。伸びをしながら体を回転させてうつぶせになった。藷草の匂いなどしない。五十を間近にした中年男の臭いだ。寒い中でも汗ばんでいた体を撫でながら、風呂に入ろうと考えた。

時間が経つのが遅い。テレビはクリスマス特番で、いろんなタレントが出ては消え、消えては現れる。大変な業界なんだろうなと思うと、華やかさが途端に色褪せた。スポンサーの案内が終わって、ニュースが始まった。落ちつかない。その時になって、部屋の中をずっと歩き回っていたことに気がついた。

こんな時、人はテレビで見た行動をなぞるものなのだろうか。娘の部屋に入って、荷物を確認した。修学旅行用に買った大きめの鞆と、衣類、下着もごっそり無くなっている。そして、タンズにはワンピースが置き去りにされていた。

「君がいいって言ったから」

「あなたが勝手に買ってきたんじゃない」

「言ってくれたらーちゃんと、言ってくれたら」

耳から部屋の静けさが流れ込んでくる。冷蔵庫に走った。箱を取り出して、リボンを解く。メッセージプレートを見る。

「お父さん ごめんなさい お母さん ありがとう」

娘はいずれ帰ってくるだろう。何らかの形で連れ戻されるだろう。だが、そこにいるのはもう、私の知っている娘ではない。

僕は間違えたのか。

モンブランを箱に戻しながら、胸が冷えていくのを感じた。

科学技術で栄華を誇った人間たちの世界は、かつての面影をかりうじで残す構造物と、至る所に延びる骨の線路に覆い尽くされている。

倒壊した高層ビルはところどころ苔が生えツタが這い、太陽の光を一心に求めた、か細い植物が懸命に茎を伸ばしている。窓のあったはずの場所には暗い虚無が広がっていて、そこに腰かけて祐樹は、背中をなでる風を服のたなびきで感じていた。風には何の感触もない。涼しくもなく暖かくもなく、ただコートがバサバサと時折音を立てたり、髪が揺れるのを感じただけだった。祐樹はコケを指ではがして触ってみた。乾いていたが、しっかりとくっついている。襲撃を受けて三日しか経っていないとは思えないほど、環境の変化が進んでいる。建物の下敷きになっている骨の線路も、新しくは見えなかった。周囲には襲撃を受けた後に特有な、百合の花のようなにおいがする。幸いこのにおいのおかげで、死体のおいはほとんど感じなかった。祐樹は地面に飛び降りた。

「埜(たお)越(ごし)さん、何か見つけましたか？」

と、酒(さか)澤(ざわ)が祐樹に尋ねた。酒澤は控えめな女性だが、やるときはやる。頼もしい部下だった。酒を飲むと性格が豹変する。

「特に目新しいものはないな。酒澤は何か見つけたか？」

「いえ、こちらも特には」

「そうか……」

「……羽(は)流(る)さんのこと、思い出してます？」

「……」

「す、すいませんでした！」

と言って、緊張した顔で敬礼をする酒澤。

「いや、いいよ」

「『確かに思い出していた』っと」

横山は、ネームに走り書きでそう書いて、少しだけ絵も添えた。ネームの段階ではそう細かく描く必要はない。期日に間に合わないときは自分でもやるが、最終的に絵を描くのは有沢君の仕事だ。横山は大雑把な指示を出すだけでいい、とはいってもまだ月刊の雑誌の見開き一ページも描けていない。時間はかかる仕事だが、締め切りまでまだ二週間あるし、描く内容ははっきりと決まっていた。祐樹の背景に、いつもの羽流の姿と、飛び降りているときの羽流の姿が薄く描かれる。羽流が飛び降りたことは初めの段階で提示してあった。これは祐樹の回想のようなもので、祐樹はそれを思い出すたびに複雑な気持ちになる。羽流が飛び降りた理由がいまだわからないということと、あるはずの死体が見つからないということだ。そして、実は羽流が飛び降りをしたまま行方不明になった時期と、列車が現れて町を襲い始めた時期が奇妙な重なりを見せて……

「それにしても、何でここが襲われたんでしょう？　ここが地下の住人たちにとって何か重要な場所だったんだろうか」

酒澤は途中からつぶやくように言って、小石を蹴った。砂埃が上がった。

「奴らにとって重要なら、ここが三日もそのままなはずはないんだがな」

「それもそうですよね。彼らの目的はいったい何なのでしょう？」

「俺に分かるわけないさ」

「……」

「……どうした？」

「なんか、変な音しません？」

祐樹は耳を澄ます。

「……すぐにここから離れるぞ。さか……」

チャイムが鳴った。横山は玄関先まで行くのが億劫だと思った。重い腰を上げて席を立った。最近体がだるいのだった。立つと少しくらくらしたが、ひんやりとした床が気持ちよかった。

「宅急便で一す」

頼んでいたエクササイズマシンかと思ったが、違った。茶色い封筒を手渡された時、はがれかけたセロハンテープが指にくっついて気持ち悪かった。嫌な予感がした。封筒には差出人の名前も何もない。封筒をビリビリとあけてみると、手紙のほかに、てかてかした紙が入っていた。写真だ。女子高生、なのかな？ 学生服で、腰のベルトには風船を三個結びつけ、ローラースケートを履いた少女が、両手でスカートと髪を抑えながら、空中を舞っている。まあ、実際は落ちているのだろうが。

手紙には次のように書いてあった。

この写真は本物です。写真に写っているものは事実です。七年前にとある学校の屋上から彼女は飛び降りて、即死した。あなた、この事件を知っていましたか？ この事件は遠い外国の小さな事件だった。これはあなたの漫画 The Falling にそっくりです。横山さん、これはまずいですよね。あなたが、こんなところからネタをパクったなんて。この写真はネットにも上がってないし、コピーもしていません。このことをばらされたくなければ、三千万を現金で、用意してください。これが届く次の日の正午きっかりに、同封の端末に連絡を入れますので、その時に会いましょう。

ぞっとして、首筋に嫌な汗を感じた。頭がくらくらした。何とか足に力を込めなおして踏ん張り、ゴンッ、と靴棚に力いっぱい頭突きをした。一瞬余計にくらくらしたが、持ち直した。すると急に意識がはっきりしてきた。

「うおおお、これはまずい！」

と独り言を言って、横山はとりあえず、仕事場に戻った。

ざわ」

「は、はい！」

その音は次第に大きくなっていく。二人の足もとに、真新しい骨の線路が地面から浮き出るように現れる。埜越と酒澤は急いで軍用のヘリに乗り込む。列車は地上を縦横無尽に走るため、車での移動は禁物である。二人はヘリで飛び立った。

地上の世界から打って変わって、地下の世界に移る。合図として、漫画の外枠が黒く塗りつぶされる。

僕らの古い言い伝え。地上は広くて光にあふれていて、こことは全然違うだろう。

どこまでも、新緑の草原が広がっている。空にはどんよりと暗い雲。肌寒い風が時折かなたからやってきては、僕の足もとをスルスルと抜けていく。その草原には今はもう使われていない古い井戸がある。でも誰もそれを見た者はいない。草に覆われて見えないだけかもしれないし、そもそもそんなものはないのかもしれない。僕らはその草原を進む。誰かが、危ないよ、と言ってくれる。落ちるかも知れないよ、という。でも誰も井戸を見たことはない。だから大丈夫なのだ。

井戸はみんなの心の闇の部分だ。地上で行方不明のものが出れば、きっと井戸に落ちたんだってことになる。井戸はみんなの心の奥底に巣を作っていて、暗いものをひたすらため続けている。彼らにとって、そ

れは僕たちだ。地下に住んでる僕たちは、彼らの生み出した闇だ。僕らは、差別されてるんだ。

「どうした？ ポーっとして」

ユウが静かに横に座る。

「僕には双子の兄貴がいるんだ。祐樹っていうらしいんだ。この話したっけ？」

「はじめて」

「祐樹ってユウと似てる。一文字違い」

「地上で生きてるの？」

「もちろん。だから会いに行く。列車に乗ってさ」

そうやって璃(り)空(く)は目の前で水蒸気を吐きだしている列車を指さした。

「ユウには会いたい人とか、いないのか？」

「……いない」

「本当に？」

「……うん」

「列車には乗らないのか？」

「……乗らない」

「じゃあ、いつかお別れだな。俺は地上の光を見ればもうここには戻らないよ」

「……」

「ユウ、一緒にこい。俺はお前と……」

ユウはとても悲しそうな顔をして璃空を見上げる。璃空は思わず口をつぐむ。

「璃空、それ以上言わないで。私も君のこと、好きですけど……。好きだけど」

「……」

「乗りたくないんだ。私はここで、璃空のこと見守ることにする」

「……まだ行くと決めたわけじゃない。まだ一週間近くあるから、よく考える……」

また一つ、列車が戻ってくる。パイロットが降りてきて、ヘルメットを外す。

っと、はっ、よ、よだれええええええええあ！ 必死でふ、拭くけど、ちょっと汚いしきさい。これ有沢君に出すの……やけど……まあ、いいな。大丈夫、大丈夫。と思って、横山は両手を頭にのせて椅子にもたれかかる。窓からの日差しで暑い。時計を見るともう正午近い。横山は、机の上の母の写真を手に取り親指でなでる。横山が子供のころに事故に巻き込まれて死んだ。突然だった。最後の言葉は最後の言葉として、とても耐えられるものではなかった。母の死体を横山は見ることができなかった。

ちゅりんちゅりんちゅろりん。聞きなれない着信音が鳴った。録音してある。どんだけ気持ち悪いやつなんだ、と横山は思う。もらった携帯を手取る。そのまま耳に運ぶ。

「昨日はよく眠れたかい、ミスター？」

「……金はある、が」

「なんだ？ 何か問題でも」

「その写真は本物なのか？」

「手紙で書いた通り、その事件は小さい事件だから調べてももう見つからねーよ。信じるか信じないかはお前次第だともいえる。けど、問題はそこじゃない。俺はいつだってお前を殺せるんだからな」

「何？」

「けど殺さない。だって The Falling は俺の愛読書だからさ。ファンです」

「とんだファンもいたもんだな。何が目的だ？」

「調子に乗るなよ、先生。とりあえずは金だ。鎌倉だ。駅まで持ってこい。またこちらから連絡する」

俺はいつだってお前を殺せるんだ。奴は俺のことを監視しているのか？ 横山は思う。警察の介入はばれてると思った方がいい。けれど、それも分かっている鎌倉まで呼んでいる。大丈夫。横山はまたうなづく。大丈夫、とあってうなづく、本当に大丈夫だと思っている。大丈夫さ。大丈夫だ。

「大丈夫ですか？」

酒澤が言った。

「それを聞くのは私だ。山本、根岸、酒澤、埜越チーム行くぞ！」

地上軍の戦闘機が空母から続々と発進する。大きなビル街に線路が現れたのだ。映像を見る限り、骨の線路はすでにビルを貫いているように見える。列車が到着するまでの時間はあと一分弱。ぎりぎり間に合う。祐樹はハンドルを握り、スピードを限界まで上げる。

十六歳にしてエースパイロット、埜越璃空は列車に乗り込んだ。操縦席はそんなに快適な場所じゃない。列車だってれっきとした生き物だ。中は狭くて、柔らかい肉でおおわれている。呼吸は苦しいし、暑苦しい。けれど目を閉じるとだんだんと感覚が薄れてきて、目の前が開ける。列車とシンクロをしているのだ。同調が安定すると同時に大量の情報が視界にあふれてくる。現在地の気温や湿度、風向き、遠く離れた場所のようす、地上で交わされる会話、攻撃目標、目標に急速に接近する機影！ あうち！

おいおいおいおい、まずいって、やめろよ、死ぬぞ。と、意味の分からないことをつぶやく。駅で電車を待っていたら隣に立っていた青年がダイブ！ 止める隙もなかった。止まらない急行がやってきた瞬間、電車の目の前に気持ちよさそうにジャンプした青年が、いまにも四肢を伸ばそうとしている光景が目に焼き付いた。横山は咄嗟に走り出した。改札を無理やりつつきって外に出て知らない店のトイレに入った。

ちゅりんちゅりんちゅろりと携帯が鳴る。横山は急いで携帯に出る。

「やめろ」

横山は息を切らして言った。

「わざわざ尾行をまく必要はなかったんだぜ。で、何をやめてほしいんだ？」

「これ以上誰かを巻き込むな」

「しらねーよ。今は単なる偶然だ。俺の差し金じゃあない」

「ふざけんな、死ぬ」

「あっはっは、早くやめたきゃ来いよ鎌倉。大仏だって暑いなか待ってんぞ」

大仏はもう何十年も座ってるんだ。そこで待ってろ！ 横山は壁を思い切り殴る。

「そこでおとなしく待ってろ！」

横山は携帯をポケットにしまって、外に出る。タクシーを呼んで乗り込む。

タクシーの中は冷房が効いていて涼しかった。清涼感のある香りが微かにして、横山の吐き気を吹き飛ばした。平日の昼間に外に出るのはずいぶんと久しぶりだったが、道は思ったよりすいていた。これなら一時間ぐらいで着けそう。

ラジオから音楽が聞こえる。ドビッシーのような曲調。横山はシートに深く座って深呼吸をするが、落ち着かなかった。タクシーは揺れも少なく、音も静かだったが、それが横山を不安にさせた。次はだれが死ぬかもわからない、という恐怖。窓の外に目をやると、町はとても明るい雰囲気満ちていた。カラフルな街並み。おしゃれな若者たち。よく見ると飲食店や洋服店が多い。ここはどこだ？

目を瞑ったりするのが怖いのでしきりに窓の外ばかり見ていた横山は、腹が減ってきた。今日はまだ何も食べてなかった。

「運転手さん、そのコンビニでいったん止めて。ちょっとおにぎりでも買ってくるから」

「わかりました」

タクシーはすりとコンビニの前に走っていき綺麗に止まる。

「ありがとう」

そう言って横山は急いでコンビニの中に入った。そこでまたあの着信音が鳴る。店の中とかで聞くと恥ずかしい。ジュースを選んでいた丸刈りの学生やレジに並ぶサングラスをかけた女性が振り返る。横山は急いで携帯をとり出した。

「もしもし」

「お前、金はどうした」

「あ」

「あ、じゃねーだろ。駅においてきたのか。それだときっとお前らの仲間が回収しちまってるだろうな」

「俺を監視してるんじゃないのかよ」

「俺はさっきまでマリオカートで忙しかったのでね。今対戦中だから」

「ふざけるなよお前。こっちはいい迷惑だぞ」

「俺はいつもわざと最下位になる。最下位になるといいアイテムが出やすくなるんだ。キラーって知ってるか？ 黒いミサイルの形になって飛んでくんだが、Falling の列車にそっくりと思ったよ」

そっくりなんて日本語は存在しない。

「どこがだ、あほ」

「へへへ、まだだ、横山。真っ直ぐ鎌倉へ向かえ」

「他人は巻き込むな！」

そう横山が言い終わる前に通信は切れた。結局自分の命が惜しくて犯人に従ってるだけの様な気がした。漫画のようにかっこよくは生きられない。おにぎりを持てるだけ持って、緑茶をつかんで、万札を置いてコンビニを出た。釣りはいらぬから。

外に出るとタクシーはそこにはいず、代わりに大きなバイクが一台、そこには停まっていた。運転手はヘルメットをかぶっていて顔はわからないが、体つきからして女性だと分かった。

「乗りなよ、ミスター。お茶くらいは持ってやるから、おにぎりは持てるだけにしとけな」

横山は唖然にとられた。まったく次から次へと……。現実感というものが欠落している。

横山はおにぎりを地面にボトボトと落した。おにぎりがかawaiiそうだと思った。

「早く」

バイクの女がせかす。横山は何も言わずにその女の後ろに座った。

がちゃ、という音がして横山の右手に手錠がかけられる。手錠はひやりと冷たい。バイクが急加速する。

視界に現れる情報は、やがて画面の端にまとまっていき視界は安定する。脳の中にある聴覚器官が、ハルの声を察知する。

「視界良好！ 準備OK！」

「埒越璃空、行きます」

列車はゆっくりと走行を始める。目的地までの移動や攻撃などは、列車がある程度やってくれる。璃空の仕事は、ハルからの情報と自分自身の判断で列車をうまくコントロールすることだった。

列車には、死んだ人間の意識が憑りつくことがある。すべての列車がそうであるわけではなく、むしろそれはレアなケースだった。それが起こる理由も、まだ解明されていない。だが、パイロットは、列車に取りついた意識と同調することで、かなり正確に列車をコントロールすることができる。つまり、パイロットには適性も出てくる。ハルがいて、その同調率が並はずれた高さを持っているという理由で、璃空は列車に乗り込んで戦うことができる。ハルと、璃空の同調率の高さもまだ理由が分かっていない。璃空は一度、ハルに生きていたころの話を尋ねてみたことがあるが、理由はやはりわからなかった。ハルは地上軍の研究所に勤めていた科学者だった。地下の人々と列車についての関係性や、地下の世界とはそもそもな

んなのか、ということについて研究をしていて、ハルは落下という行為に目をつけた。つまり、地下のどこかにいるとしか特定できない地下の人々とつながるためには、重力の違いと地球内部から出る電磁波の壁を超える必要があると考えた。地上の塔から落下する際に発生する無重力と腰のベルトにつけた強力な電磁波発生装置。そして、ジャンプするための一押しは、電磁波の同調によって破裂する風船のパン。

「わかる？ パンっだよ。パンっ」

「それで、ハルはジャンプできたんですか？」

「あはは、できないできない。できなかつたよ。風船割れたのに何も起こらなかつたときは焦つたな」

「それで死んだんですか」

「どうなのかな？ 私、怖かつたけど落ちながらついコンクリートの地面を見上げたんだよ。そしたらそこで列車が口を開けてた。たぶん食われたんだと思うんだよね、列車に」

「……」

正直ハルが生きていようと死んでいようとどちらでもよかつた。意識ははっきりしているが、ハルは璃空の意思には逆らえないのだから。最高のバディだつた。列車に傷一つつけずに目的を遂行したこともあつた。

列車は海中に出た。一度迂回してから海上に上がる。海流の向きや速度から、近くにいる魚や鳥の数まで、璃空には手に取るようにわかる。海面に隠れていた骨が姿を現し、そこを列車が水しぶきを上げながら走り抜ける。目的地まであと十キロ。予測到達時間は一分だ。地上軍の戦闘機の速度はマッハ、時速は千キロ弱、に近く、列車の最高速度でも追いつくことができない。だが敵を全滅させる勝算もある。

祐樹はマッハーをたたき出すメーターを冷静に見つめていた。体中を低い音と振動が駆け巡ってかき回していく。攻撃対象の都市を肉眼でとらえ、スピードを緩める。他の戦闘機もスピードを落とし、徐々に隊列を広げていく。所定の位置につく。先行部隊は、祐樹たちを突っ切って、線路の彼方へ疾走する。黒い点のように、列車が来るのが確認できる。早くも先行部隊が攻撃を浴びせているのが見える。列車がビルを突き破る直後、一番勢いが落ちているところに、レーザーワイヤーで網を張り、減速させたところに直接接触を試みる。これが今回の作戦だつた。

おにぎりを食べようと横山が奮闘しているときに、前の女がワイヤレスイヤホンと小型マイクを渡してきた。横山はおにぎりを諦めて捨て、それらを受け取る。ビニールの半分はがれたコンビニおにぎりは見るも無残に後方に吹き飛んでいった。参画のおにぎりが人の頭に見えてぞっとする。

「おにぎりを落とした。食べようと思つていたのに」

「お茶ならあるけどって、違う違う。少ししたら高速に乗って鎌倉まで行くから」

「本当に鎌倉に行くのか？」

「ボスはそこにいるからさ」

「お前じゃなかつたのか」

「わざわざ迎えに来てやつたんだ！ 黙つてて、ボスにつなぐから」

ゴソツという音が耳を指す。

「とりあえず目的は金だ、と言つたが、俺は初めからあんたにこの写真を渡すつもりだつたよ。俺達には、目的がある。お前の命は俺が握つてることを忘れるな」

「何が目的だよ？」

「テロだ」

横山は思わず息をのむ。横山は頭の中を整理したくなつた。金が目的だなんて全くの嘘じゃないか。落ちる少女の写真。落ちること。テロ……

「テロだつて？ ……ぶつけるつもりか」

「察しがいいな、ミスター」

「どこでやるつもりだ、時間は？」

「俺んところからも見える。一緒に眺めようじゃないの。盛大なテロをさ」

「鎌倉から見える場所……、もうすぐなのか」

「ああ、ほんとはお前も乗客になってるはずだったんだがな。まあいいよ。アクシデントはつきものだ」

「……」

こいつの言ってることはどこまで信用していいものなのか。服には盗聴器を事前につけておいたから、横山の声は警察に届いているはずだった。だとすれば止めることはできるかも知れない。生きて帰れる保証はないから、できるだけ情報を警察に伝えることだ。

「なぜテロなんかおこすんだ」

「緩んだ社会への警告……（笑）」

「本気かよ」

「信じてないのか～？ 理由なんてそうそうあるもんじゃないさ。ミスターたち一般人が思っている人の命の重さを奪うのに、いったいどんな理由が理由になるんだ？」

「ないよりはいい」

「はっは、なら聞くが、電車の前に飛び込んだ奴に死ぬ理由があったと思うか？ 俺が見るにあれは本能的に飛び込んだだけだよ。人には死へ向かう本能がある。それが好奇心や空想の肥大化で弾けちゃうんだろよ」

「これ以上他人を巻き込むなと言ったろうが」

「だって、漫画の中で言ってたじゃないですか。人は這い上がることを学ぶために落ちるんだって。このテロの責任はミスターにもあるんですぜ。ミスターの作品は人が死にすぎるんですよ～」

……何だと！

「教えるよ。目標は鎌倉駅付近のビル密集区域で、その中心を通るリニアモーターカーを脱線させる。列車はすでに遠隔走行になっている」

「鎌倉駅付近。リニアモーターカー」

と、横山はつぶやいた。聞こえれば警察が列車を止めようとするはずだ。横山にできることは、この状況ではゼロに等しかった。横山は、ここでこの女の運転手を殺してしまおうかとふと思った。けれどそんなことをしても意味がないことはわかっていたし、こんなところで命を捨てたくはなかった。横山はバイクの後部座席で、落ちないようにしがみつくとしかできない。

先行部隊の攻撃は当たっていないようだった。地上軍の戦闘員は先行部隊からの通信でその事実を知る。今回の列車はかなり手ごわいかも知れない。祐樹は見たことがなかったが、列車の中には骨の線路を自由自在に伸ばすことのできる特殊な奴がいるらしい。敷かれた骨の上を進むしかないと考えられていた列車に何かの変化が起こったらしい。

地上軍のレーザー攻撃は悉くかわされてしまう。ビルと周辺の避難はすでに終わっている。攻撃をすべてかわした列車は戦闘機の横を走り抜ける。先行部隊の戦闘機も急旋回をして追いかける。しかし、後方にあった骨の線路が分岐して伸び、旋回する翼を引き裂いた。線路はさらに別れて次々に戦闘機を落としていく。列車はもうすぐそこまで近づいて来ていた。

来るぞ！ と、誰かが叫んだ。

轟音が響き、破片が飛び散る。それと同時に祐樹たち捕獲部隊は網を展開する。列車の速度を抑えるように次第にスピードを落としながら列車を囲い込む。ビルが二つに折れて崩れていくのに誰も振り返らなかったが、再び後ろから分岐した線路が伸びてきた。

「来ましたよ」

と、根岸が言う。護衛部隊の戦闘機からレーザーが発射され、伸びてきた線路を破壊する。ミサイルは列車に向けて発射される。レーザーの雨を潜り抜けた骨の線路が捕獲部隊の一機に接近する。

「山本！」

「大丈夫です！ 逃げるだけなら得意です」

という山本の背後で線路は花卉のようにわかれて山本を覆い始める。

「やられるか！」

と山本が骨の間をすり抜けようとした時、列車が体を回転させる。

ぐしゃ

山本が殺される。

「やまもと～！」

と根岸が叫んだ。

「根岸さん、落ち着いてください！」

と酒澤。護衛部隊が放った大量のミサイルが列車に近づく。

「根岸、酒澤、次で仕掛けるぞ！」

「りよ、了解」

祐樹は長年の勤を働かせる。タイミングがすべてだった。

列車がミサイルを数発受け、残りは避けた。外れたミサイルは列車の前にあるレーザーワイヤーに触れて爆発する。爆発の煙が一面に広がる。通信を遮断する物質を混ぜた煙で、互いの視界も封じる。すべては操縦者の勤にゆだねられる。

列車が煙を抜けて出てくる。祐樹の目の前には黒い大きな列車が見える。戦闘機の腹部から足を出して列車をがっしりと捕まえる。車体の上部に酒澤の戦闘機が見える。反対側には根岸もついているだろう。列車に直接接触して近接攻撃を仕掛ける。はずだった。だがとつぜん、祐樹の意識は震え始めた。列車との同調現象が始まった。目の前の景色が遠くなる。ハンドルのざらざらした感じ、スーツの手触り、感覚が遠のいて行き祐樹は目を閉じる。羽流と璃空の記憶が視界に現れる。二人が並んで立っている。やがて羽流はこちらを向いてニッコリ笑い、手を振る。璃空は言う。「僕はあなたの……」

璃空が言い終わる前に、何かが祐樹の体を切り裂いた。列車が羽のように体の一部を開いている。

「埜越隊長！」

酒澤の声を最後まで聞き取れたか判別がつかなかった。

埜越と根岸の機体を引き裂いた列車は、攻撃によって動きを止めた。

見覚えのある街並みを颯爽と通り抜けて、バイクは本当に高徳院にはいった。ここってバイクのまま入ってしまっているのだろうか、という呑気な不安を横山は感じた。それなりの観光客はいて、警官隊がずらりと並んでいたりしなかった。バイクは鎌倉大仏の十メートル近く前でギギッと音を立てて止まった。大仏の前で多くの人が写真を撮っていたが、こちらに気付く様子を見せる者はいない。

「待ってたよ。ミスター」

と、後ろから声がかかる。振り向くと若い男が歩いてくる。茶色の革ジャンに黒のスキニーで、青いキャップ帽をかぶりDSを持っている。今風の若者という感じがした。

「一緒に眺めよう。ビルが倒れるの」

「……」

「どうしたの？ 急に黙っちゃって」

「俺には発信機も盗聴器もついている。お前たちやお前たちの計画は全部警察にばれてる」

「だから？」

「テロは起こさせないぞ」

「警察で俺たちが止められるわけないよ。テロは成功する」

バイクの女が言う。

「やめろ」

「今更無理だよ」

「何か方法があるんだろ！ 今すぐやめろ！」

横山は男を突き倒した。男は倒れる勢いを利用して横山をひねり倒した。横山は背中を強く打ちつけた。

「まっとうな口をきくな」

男はナイフを取り出して横山の額につきつける。背中に小石が食い込んでとても痛い。

「俺はあんたの漫画は好きだったよ。でも調子に乗りすぎてると思わねえか。なんでお前の現実に現実感がないか分かるか？ お前らが現実を見ないからだよ。ネットばかり見てないでたまには街に出てみる。おふくろの墓参りぐらいしてみろ」

横山は右足を男の鳩尾に打ちこんで後ろに張り倒す。ナイフを奪い取っていう。

「お前に俺の何が分かる？」

突然、遠くで大きな音がした。同時に横山たちの周りの広場でも次々と小さな爆発が起こる。驚いている間に、胸のあたりに強烈なパンチを食らって横山は倒れる。若い男は拳銃を抜き横山に向ける。弾けるような轟音が頭に響いたが、弾け飛んだのは横山の頭ではなく、大仏の頭だった。銃口からは日本のいろんな国旗が繋がって出てきている。

がつっ、と男のこめかみに女の痛そうな回し蹴りが決まった。男は痙攣していたがもう立ち上がる力はないようだった。女は白い煙の出る袋を大量にあたりに投げた。

「これ、あげるよ。そういう約束でしょ」

と言って、女は一枚の写真を手渡した。空中に舞う少女の写真。裏には名前が書いてあった。

「さよなら」

そう言って女はバイクに乗って去って行った。

完全に油断していた。地上軍の戦闘機に双子の兄が乗っていたことでハルが兄との同調を開始してしまったのだ。西風(ならい)羽(は)流(る)。埜越という名前の人間なんて知らないと言ったのに。それで反応が遅れた。兄貴の声も聞けなかった。

璃空は硬い病院のベッドから起き上がった。体の至る所に包帯が巻いてあったが、動けないほど痛くはなかった。一つしかない窓から三日月が見える。空気がとても冷たく、皮膚に突き刺さるようだった。地上であるらしい。

地上。幼いころから想い続けてきた希望の場所。大きな井戸の底からながめた暗く青い空と美しい星々……。あの時見ていた夜空が、井戸の入り口部に設けられたコンピューターによる疑似映像だったと知ったのは、列車に乗れるようになってからだ。ユウという大切な親友をなくし、すべて設計と洗脳で作られた地下世界から列車で飛び出して、埃っぽい地上世界を破壊し続け、生き別れの兄を殺したあとの月が、こんなにきれいなはずがなかった。璃空は声を殺して泣いた。

ガチャリと重い扉が開き、女性が一人入ってきた。

「今晚は、埜越璃空さん。私は地上軍体列車戦闘員の酒澤と言います」

璃空はきょとんとして、その女性を見つめた。なんと言っているのか分からなかったのだ。

「あなたがたおご……」

「あなたも！」

「？」

「あなたも乗っていたんですか？」

酒澤はうつむいて言う。

「ええ。あなたと、あなたの列車にとどめを刺したのは私です」

「そうですか……」

それを聞くと璃空は酒澤から顔をそむけた。璃空は涙をぬぐった。

「僕は、どうすればいいんですか」

「あなたは落ち着くまでここにいていい」

「落ち着けるわけじゃないじゃないですか。自分の周りの人がどんどん死んで行って！僕はもう地下にも地上にも居場所がない。そうだ、殺してくださいよ。僕は裁判にかけられれば間違いなく死刑ですよ。早く殺してほしい」

俺の話は人が簡単に死にすぎる……。人の命が簡単に奪われるだなんて思っちゃいないが。

「気持ちはわかる。お兄さんを亡くした悲しみは私たちも同じ。頼れる仕事仲間だったから」

「……何を求めて生きていけばいいのか分からない」

「それはこれから見つけていくのよ。祐樹さんと違って全然若いんだから」

「双子だったんですよ」

「知ってる。列車の放出する気体には、周囲の時間を遅くする作用がある。列車が双子を時間的にも隔ててしまった」

「そうです」

「祐樹さんとはいつ別れたの？」

「もう生まれてすぐです。兄のことは周りの者から教えてもらいました」

「そうなの……」

「どうして地上と地下の人々は仲良く暮らせないんですか？争ってもいい事なんて何一つないのに」

「もはや理由は確かめようがない。けれど列車が現れてから関係が悪化したことは確かね。私が生まれる前はもっといろいろ行き来があったみたいだし」

「列車のせいだって言いたいんですか」

「今回捕獲した列車を解剖して彼らの生態を研究中なの。列車に関することが何か分かれば私たちはいろんな問題を解決できるのかもしれない」

「解剖だって？」

「どうしたの？」

「……いえ」

璃空は視線を落とす。涙が落ちるのをどうしても止められない。

病院の硬いベッドで、横山は目を覚ました。隣には有沢君がいて、「大丈夫か。大変だったな」とほほ笑みかける。

「まだ、動くな」

そう言いながら有沢は横山が体を起こすのを手伝ってくれる。

「大丈夫か？」

「大丈夫だ」

訳も分からず、大丈夫だ、と言った。

「いろいろ言わなきゃならないことがあるが、それはまた次の機会に……」

「いま。いま、話してくれ」

有沢君は横山の必死さに少し驚いたようだったが、素直に話を始めた。

「まず、今回の事件についてだが、テロは何とか防がれたよ。列車は、ビルに衝突する前に脱線したんだ。一人の女の子が電車の中から警察に通報したんだ。『私たちを見捨てて他の人を助けてください』ってね。脱線が比較的軽度だったため、死傷者は最小限に抑えられたそうだ」

「そうか」

「まあ、うれしいような話ではない。このテロで亡くなった方も多いいということにも目を向けなければならないのは当然のことだ」

「だ、大仏は？」

「大仏は内部に爆弾が仕掛けてあったらしい。顔面が木端微塵だ。何か思い入れでもあったのか？」

「昔、母によく連れて行ってもらったんです。母が好きでね。母がこう言ったのを今でも覚えてるんです。『鎌倉大仏さんはいったい何をこんなにも長く座って待っているんだろうねえ。よほど大切なものなんだろうねえ』大仏さんはどこか遠い目をしていますし」

「すぐに作り直されるさ。安心するんだな。あと、君の持っていた写真のことなんだが」

「空中の少女の写真ですか？」

「そうだ。あれがネット中で少し話題になっている。本物の写真のようにあそこまで作り上げる奴もなかなかいないってね。だけど君の持っていたあの写真。撮影されたのが二十年近く前になってる」

「知ってます。裏にはM a r yって手書きで書いてありました」

「彼女はもうこの世にはいないのだろうな……」

「死者がこんな形でよみがえってしまうのは、本能的な嫌悪を感じます。そして時がたてばまた彼女は情報の波の中に消えていく」

「せっつないな」

「いま嘸んだでしょ」

有沢は少し笑う。

「病室に置いといてやろうと思って君のお母さんの写真、ちょうど持ってきてたんだ。退院したら、墓参りぐらいしてやれよ」

「わかっています。有難うございます」

「俺はもう帰るから。まあ、しばらくはゆっくり休め。じゃあな」

「はい」

有沢が立って病室を出ていく。彼を見ると頑張って The Falling を書きあげなきゃ、という気持ちになる。

酒澤は分厚いコートにマフラーを巻いた姿で、雪の降る夜を歩いていた。埜越祐樹が列車との戦闘で殉死してから、酒澤は軍をやめた。誰もが才気ある彼女の辞職を残念がった。けれど酒澤は、もうやる気を失ってしまった。なんだかんだ言って埜越のことが好きだったのではないかと思っている。

酒澤は今は小さなケーキ屋さんで働いていた。小さなころ母が作ったケーキの味が忘れられなくて、ケーキ職人になるのが夢だった。ケーキが理屈抜きに人を幸せにできるのなら、理由はそれでいい気がした。店はまだ開店前の朝八時。酒澤はかがんで、シャッターをガラガラと上げる。その拍子に鼻と口を覆っていたマフラーがずり落ちて、口元が見える。酒澤の白く暖かい息が、しんと降る雪をとかす。

The Falling は無事完結し、横山は母の墓参りをした。人は這い上がることを学ぶために落ちると言ったのは母だったのかもしれないと、横山はふと思う。母とはいい思い出しかない。母が安らかに目を閉じたときは死ぬほど悲しかったけれど、The Falling の連載が無事終了できたのももしかしたら母が見守ってくれていたのかもしれないと思う。自分でも馬鹿だと思っくらい母に感謝している横山だったが、十分幸せ

だった。横山は母の写真を細かく破って宙に放る。

「ありがとう、そして、さようなら」

横山はもと来た道に戻っていった。二度と振り返らなかった。

一陣の風が草原を吹き抜け、笑顔の女性は散り散りに霧散した。

望遠鏡を覗いた先に、少女が立っていた。思わず望遠鏡を目から離し、地平線に向かって手を振る。もう一度望遠鏡を覗き込むと少女がこっちに手を振り替えしているのが分かる。もう片方の手に双眼鏡を持ちながら。

少女は双眼鏡をリュックサックにしまい、またこちらを向いた。そして手招きをして向こうの方へ走っていった。

走らなければならない、と思った僕は望遠鏡を背負って、少女を追いかけ始めた。

印鑑には『現在』と彫られていて、紙には『過去』と押されている。現在はその瞬間に過去に変わってしまうから。印鑑は足跡に似ている。しかし、足跡は突然に過去に変わりはない。それを言うのならば足跡は過去であり、俺は現在である。

俺とは誰か。俺は正体を名乗った瞬間にその正体から別の正体が変わる、もしくは、誰かが俺の正体を知った時に正体が変わるのが俺の正体である。俺はこの瞬間正体が変わってしまうのが偽となり、俺という正体がいつか分かってしまう。俺足跡は変化が以上に激しいが、俺は永久である。

つまり俺の言いたいことは、俺の意見はころころ変わると言うことであり、別に俺の不変性を説いているのではない。

生存する物には必ず存在意義があるという。その意見を肯定するには俺が必要だ。この世界に生きているのならば、その意見を否定するのは簡単だ。

俺がこの世界に存在していないから。

残念だが、人間はこの世界に俺を見つけていない。勿論そうである。俺は隠れている。時には海底で蟹と戯れてみたり、何億光年も彼方の星の砂で城を造ったり、電車内で女性の隣に座してみたりするが、人間があっと思ったときには俺の正体は変わり、俺だったものは蟹を食べようとする魚に変わったり、宇宙人になったり、女性の友達となる。俺に出会った人間は気のせいかなとでも思い、ツチノコに遭ったような気分になる。

この紙に俺が存在しているではないか。そう言う人がいるかもしれない。しかし俺は俺でなくなる。つまり俺は俺にもなれるということだ。しかしその俺は本来の姿の俺ではないということは当然である。

僕は砂漠を疾走する。砂の上を走るのは大変疲れる。それでも少女に追いつかないのは確かで、それもずっと先の方にいる。僕が走ったあとに砂嵐が巻き起こる。少女が走ったあとにも砂嵐が出来る。少女の砂嵐は僕には物凄く小さく見える。でも感覚で分かる。少女の砂嵐はとんでもなく大きいことが。すべての砂漠の砂を吸い上げているんじゃないかと思うくらいだ。しかし僕の砂嵐も砂漠の砂を吸い上げている。

僕は彷徨っている白馬に会う。白馬は僕を追いかけてきて言う。

「目的が何もありません。」

僕は走りながら答える。

「背中に僕を乗せて少女を追え。」

白馬は喜んで僕を背中に乗せ、砂漠を爆走する。途中でトカゲさんと待ち針さんに会う。

トカゲさんは走りながら

「私もお供させてください」と言う。僕は駄目だ、と言う。少女が気持ち悪がるから。

待ち針さんも走りながら

「私もお供させてください」と言う。僕はいいよ、と言う。少女が転んでドレスが破けたときに君は使えるから。

そうこうしているうちに少女の砂嵐が非常に大きくなってきた。僕は白馬にもっと速く、と言う。白馬はこれが限界です、とゼイゼイ言いながら加速する。

僕と白馬と待ち針さんは少女の黒い砂嵐に突入する。

変換です、と俺は答える。メノイケルスは質問を繰り返す。

《あなたはここで何が出来ますか。》

変換です、と俺は答える。メノイケルスは質問を繰り返す。

《あなたはここで何が出来ますか。》

俺は立ち上がって変換を開始する。

「変換です。」と俺は答える。芽野伊、蹴る酢は質も无尾久里か江州？

【穴田箱子で菜荷蛾で着ます化。】

俺は歩き出す。俺の勝ちだ。体全体が化学の教科書になってしまったメノイケルスはページの間からコーヒーを垂らして動けないでいた。もうすぐ州警察が来るころだ。変わり果てた同僚を目にして最初は気付かないであろう。気づいた頃には俺は特別指名手配犯だ。

俺は重い体を引き摺って、テーブルの上にあった、冷めたカレーを二口ほど食べて、逃走の準備をした。当分、変換は出来ないであろう。乾パンを二つ黄色いリュックに入れ、サングラスにマスクをして家を出て行った。

白馬は砂嵐の中で目を開けられないようだった。もちろん、砂が目に入るからだ。僕も目は開けられないので、待ち針さんが方向を指示した。待ち針さんには目がないからだ。そんなんで方向が分かるのか、と聞いたら、全て勘です、と単調な声で言っていた。どうせ道は一本しかないのだし。

僕は顔にへばりついている物の存在に気付く。ゴーグルだった。白馬と僕はそれを装着し、辺りを見渡すと、砂嵐に覆われた町の中だということが分かった。少女の影が見えるようになっていた。

「白馬よ、あれだ！」と僕は指を指すと、待ち針さんは違う、と言い、あれはトカゲさんです、と言った。

いったいなにが起こったのか全く分からない。仕方ない、目を瞑っていたのだから。

俺は全てを飲み込んでしまいそんな川の橋の手すりに寄りかかっていた。パトカーのサイレンが遠くに聞こえる。家を出てから色々なことがあった。

まず、排水溝にサングラスを落とした。その後州警察に追いかけて、息苦しくてマスクを外して捨てた。路地裏を全速力で走っていたら猫を踏んで猫にまで追い回された。リュックに入っていた女性の裸の写真で抜いた。儀式が終わろうとしたときに女性州警察に見つかった。写真を落とした。また路地裏を走っていたら、友達にあった。友達も州警察だった。

で、ここまで国道を走ってきたというわけだ。

川を覗き込む。川はどぶ水で真っ黒に染まっていた。品のない黒だ。もう少し赤や紫をいれると落ち着

く色になる。

手すりの上に上る。背後でパトカーのドリフトする音が聞こえ、それを最後に俺は飛び降りる。川は俺を迎える。

白馬はへとへとになっていて、僕も、待ち針さんも何か起こりそうで起こらない現実にはいらしていた。白馬はとうとう走るのを止め、僕に向かって言った。

「もう無理です。彼女は速いし体力があります。」

僕は分かった、と言い、白馬から降りる。その拍子に白馬が倒れる。
「最後の時間は充実していました。」

白馬は、そう言うとも目を瞑って動かなくなった。しかし、ぼんやりとした白馬が冷たくなる白馬から出てきて、軽く会釈をして曲線を描きながら歩き出した。

僕は待ち針さんを手にとって、白馬の心臓に突き刺した。

待ち針さんは、ばいばいと言って、その場に留まった。

僕は走る。彼女を追って、どこまでも。

俺は落下中だ。周りには何本もの決して交わらない道がもの凄い量あった。

俺は落下中だ。俺は今、一つの道を創り始めている。そして後ろを歩く者は誰もいないことを知っている。決して交わらないから。

パトカーのサイレンが後ろで聞こえる。振り向くとパトカーがぐるぐる回転しながら俺を追いかけてきた。パトカーだけでなく、州警察の警官もたくさんぐるぐる回りながら追いかけてくる。追いかけているのではなく、ただ落下しているだけかもしれないが。

俺はふと思いつく。これは俺が中心となって出来ている竜巻のようだ。ただ、そんな感じがするだけであって、本当にそうではないが。

俺の落下はずっと続く。暇すぎたので、バックを背中から外して、乾パンを取り出す。乾パンにかぶりつくと、上の方でパンッと乾いた音がしたので振り返ると頬を何かが擦った。とっさに俺は乾パンを口にほおばり、バックを背負い直し、完全に地面に垂直になるように頭を下にした。どんどん加速していく。道がとんでもない速さで遠ざかっていく。落下中にさっき頬を掠めた銃弾がぐるぐる回転しながら通り過ぎていくのが見えた。俺の方が銃弾より速いということだ。

何かが足を掴んだ。仰向けの体勢になって確認すると、州警察の輩だ。州警察はパラシュートをいきなり開くと、Gが体に掛かり、目眩がした。州警察はさらに、片方の手で銃口を俺に向けてくるので、俺はなんにも出来ない状況にいた。変換さえ出来る力が残っていればとは思ったが、そんな力は勝手に生成する物ではない。

時間が引き延ばされた。俺は何かが起こらないかと願い、州警察は銃口を俺に向けている。

州警察が引き金を引こうとした瞬間、パトカーが州警察の頭に直撃した。勿論俺にも直撃したが、何も問題はない。

俺はパトカーを蹴って、再び落下に戻った。主人公の運は限りなく良いに決まっている。そしてまた危機に晒される。

今度は何人もの州警察がアサルトライフルかマシンガンだか分からないが、連射機能のある銃を持っていた。

あり得ないほど運が良いので、背中に何か当たった。背中に手を回すと、ショットガンがあった。州警察が銃の弾を装填し、乱射し始めた。何回も擦ったが、俺もショットガンを撃ちまくった。ショットガンは確実に、一発撃つ毎に、一人ずつ血と肉の塊となっていった。

離されている、と思ったのは少し前のことだ。白馬がいた頃は、少女を目で確認することは、可能ではあったし、今は、砂嵐も向こうに見える。

僕はスピードを上げた。腕を振り、足も確実に地面を捕らえていた。僕の後ろでは砂嵐がより大きくなり、体は飛んでいるように軽かった。しかし、差は縮まらなく、むしろ差は広がっていた。

城に少女が入ったのが分かった。砂嵐が消えたかと思うと、その先に城があったからだ。僕は砂を蹴って、全速力で走り続けた。

背中が何かに衝突をして、俺の落下は終了した。砂の上だった。背中への痛みを耐えながら、よろよろと立ち上がって、歩き出した。と共に、してはならないことをしてしまったと、冷や汗をかいていた。

あとから、どさどさとパトカーや州警察が落ちてきた。みんな動かない、と思ったら、砂に飲み込まれていって、消えていった。

俺は俺が飲み込まれているの気づくのが少しばかり遅かった。腰まで来ていた砂から抜け出すことはどうしても出来ない。もがいてももがいてもどうすることも出来なかった。やがて俺は砂に引きずり込まれてしまった。目を瞑っていたが、じゃりじゃりした砂は非常に気持ちが悪い。

砂の層から抜けて、俺はまた落下した。下にはまた砂漠が見えていた。どうせ同じ事の繰り返しだなと思った。

城に到着した。立ち止まって、息を整えた。息を吐いて、右足をあげた瞬間、時間は過去方向に向かい始めた。僕はまた、砂漠を走り出す。しかも後ろ向きで。

さらに足がどんどん上がらなくなっているのが分かった。というのは砂に引きずり込まれているからだ。少女の路に繋がっているんだと思った。走り続けたことが無駄では無くなった。

砂の層を抜けると、砂漠に落ちた。起き上がると近くに少女の手首があった。手をつかんで、うんとこしょと引っ張り上げると、少女は顔を背けながら、遅い、と呟いた。

【リレー小説】「旅の影」

【鵜川龍史】

どうやら、全部割り終わったらしい。先程まで悪意を叩きつけるように響き渡っていた音は、店内から去っていった。このレストランが面している通りはあまり広くない。音が空にしか抜けないせいで、通りに面した店のガラスが叩き割られる音は遠ざかりながら膨らんでいった。

こんな時の私たちは慣れたもので、誰も泣いたり叫んだりしない。二つ先のテーブルの下に泣いている女性がいるが、きっと旅行者だろう。こんな日にこの町に来たこと不幸を気の毒に思わないでもないが、それが昨日だったとしても状況は特に変わらない。

「大丈夫ですか」

この町に暮らす者の常として、旅行者には親切に、だ。椅子の上に置かれていた鞆に降り注いだガラスを払いながら、柔和な表情で話しかける。幸いにも、鞆は口がファスナーで閉まるタイプだ。それに、紫のエナメル地は、破片を払いやすい。指先に薄いガラスが刺さったが、大した問題ではない。未だに通りに響いているガラスを割る音は、レストランの中に再び流れ出した音楽の中に溶けた。

女性の髪はストレートで短く、肩のあたりで緩く内に巻いている。これなら、ガラス片が降り注いでも安心だ。しかし、ニットのカーディガンはいただけない。せめて、上着は脱ぐべきじゃなかった。

「大丈夫ですか」

相変わらず震えている女性の肩に手を置くと、驚いた表情で私を見た。大きな瞳は魅力的だが、つけまっげはこの町ではまずい。本当に何も知らずに来てしまったらしい。

「大丈夫。何の問題もありませんよ」

言葉の方向を変えて、彼女の安心を導こうとしたが、気が動転しているらしく返事はない。しかし、私の手を払いのけないところを見ると、警戒はしていないようだ。

店員はあらかじめ床のガラスを掃き終え、客もまた、店に残る数組を残して精算を要求する声を上げている。すぐ隣のテーブルでは、シルクのシャツからガラスを払い終えた男が、パスタの上に掛かったソースをテーブル脇にどけている。端の、パスタがむき出しになっている部分はどうするのかと見ていると、指先できれいにしたフォークを使って、器用に切り分けた。私のテーブルではペンネ・アラビアータが湯気を上げているが、それを食べようとは思わない。

「どうです、店を変えませんか。この町のことを聞いておいた方がいい」

【九条葱太】

そこから私達は、少し厳かな雰囲気を持つバーに移った。私は彼女の分のコーヒーも頼み、彼女が落ち着くのを待つ。

十分ほどたっただろうか、少し落ち着いたように見える彼女に、私は聞いた。

「大丈夫ですか」

彼女がゆっくりとうなずいたのを見て、私は、ゆっくりと説明を開始した。

「この町には、何かがあります」

その瞬間、彼女が息をのんだのがわかった。

「いつも影のようにやってきて、目に付いたものをひとつ決めると、徹底的にそれを壊して去っていく。本

当に影にしか見えないので、私達は『シャドー』やら、『くらやみ』と呼んでいますね」
「それから、もうひとつ特徴があります。それは、『余計な物』や、『付属品』をえらく嫌うということです。あなたは幸いにも旅行者なので、襲われていませんが、念のためにつけまつげは落としておいたほうがいい。これが町の者だったら、どうなっているかわかりません」

そういうと彼女は、慌てた表情で更衣室へむかい、つけまつげを落としてきた。
「そんなに慌てなくても大丈夫ですよ。『シャドー』は、旅行者を襲いませんから。この町に暮らすものの常は、旅行者には親切に、です」

それから私達は、黙々とコーヒーをすすっていた。
彼女は、いろいろと気持ちの整理をしているようだった。
うかつにはしゃべりかけられないような空気が、彼女には流れている。
私は、彼女の気持ちの整理ができれば、話しかけるつもりで、黙って彼女の様子をうかがっていた。

【普賢望】

それから、彼女の家に行くことになった。彼女は旅行者ではなく、空き家だった町の北の方の安い物件に、昨晚移り住んだらしい。

「ここです。」と彼女が言った先には、壁の色が血がべったりとついているように赤黒く、色のインパクトの割にはこじんまりした家があった。窓からは燭の灯がちらちらと見えていた。表札にはアルファベットで『MAWATARI ALESA』と書いてあった。「まわたりさん？」と聞くとおびえた目でうんと頷いた。

まわたりさんがドアノブに鍵を差して回すと重く鈍い音が鳴り響いて私の頭も反響してごおんごおんとなったなと思ったときには深緑色のソファに横になっていた。上半身が裸だった。毛布を払いのけ、走ってドアノブに手をかけた。ドアを押す。またしても低い音が鳴り響いたがどうにか耐えた。頭が非常に痛い。ドアの向こうはとても長い廊下で、この部屋がどうも一番奥らしい。

ハンマーで殴られたような痛みが頭を襲い、思わずその場に倒れた。俯せのまま元の部屋に戻ったら反対側のドアからまわたりさんがティカップを持って現れた。

「気絶ってどういう原因でなるか知ってる？」

まわたりさんは言った。まわたりさんはティカップを机に置いて、同時に机のうえにあったパソコンを開いた。

私は言った。
「なにか強い衝撃があって、痛いって感じたときに、脳の容量みたいなのが溢れて起こることでしょう。」

まわたりさんはパソコンで何かしながら言った。

「だいたい間違ってるポイントも抜けてるわね。」

パソコンをこちらに向けた。動画が流れていた。男たちが戯れて、馬鹿騒ぎしていた。男の一人が誰かを殴って喧嘩になった。みんな笑って手を叩きながら喧嘩を見ている。喧嘩している誰かが石を拾ってこちらに投げた。不意にカメラは落下しみんながこっちを見ている。一瞬静かになったかと思ったらまた馬鹿騒ぎし始めた。カメラの視線が上がりカメラを撮っていた人へ向けられる。その人は痙攣していて周りは馬鹿笑いしていて動画は終わった。

「痛みで気絶する場合ね。」

まわたりさんはまたパソコンで何か打ったかと思うと少女の顔がアップになった映像が流れた。まわたりさんの方を向くと、にやけながら「集中して見て」と言った。

少女はひたすら叫びつづけていたが、突然叫ばなくなって、痙攣しながら白目を剥いた。

まわたりさんはそこで動画を止め、私の方を見ながら言った。

「こんなふうに気絶する場合もあるわ。あなたはさっきどっちで気絶したの？」

私は腹が立った。鈍い音で気絶したんだからどちらかという痛みの方が？ 私がよく分からないのにそういう風に聞く女は少し腹が立つし答えも本当は分かっているのだろう。

まわたりさんは顔を近づけてきて言った。

「どちらでもないのかもしれないね。」

こいつを気絶させてやろうと思った。

私は頭が痛いのに関わらず、まわたりさんに抱きついた。すると、抵抗するまわたりさんの股の辺りから黒い影が飛び出てきて私の首を絞め始めた。シャドーはまわたりさんからどくどくと出てきていた。

【三角想樹】

その黒い影はみるみる大きくなっていき、私の視界を覆った。

目が覚めると私は床に倒れていた。古いカーペットのごわごわとした感触が伝わってくる。気絶してしまっていたようだった。どれくらいの時間が経ったか分からない。体を起こしてみるがまだ頭が少しくらからする。隣ではまわたりさんがかすかな寝息を立てて眠っている。

夢だったのだろうか。すべて。だが夢にしてははっきりとあの生暖かい感触を覚えている。首を絞められたのだ。本当に夢と言い切れるのか？ あれはこの町にいるシャドーなのだ。いや、彼女がシャドーだったのだ。いつも影のようにやってくる。

私は重い頭を持ち上げて、服を着た。今すぐにでもここを出たい。私はこの町のあらゆる不幸に慣れているつもりでいたのに、泣いたり叫んだりはしなかったけれど。そうか、恐怖か。シャドーとは恐怖のことだ。痛みや快感だけじゃない。恐怖だって人を気絶させるじゃないか。いつの間に恐怖はこんなにも膨らんでしまったのだろうか。

だめだ。思考を整理できない。頭が痛い。とにかく今は現実を。ここから脱出するのだ。

私はまわたりさんに毛布をかけてやった。それから、そばにあった新聞の山をまわたりさんの周りにぶちまけた。私はポケットからライターを取り出し、小さい炎を新聞の端のほうに近づける。ゆっくりと炎は大きくなっていくのだが、とても最後まで見届ける気にはなれなかった。

鈍く重い扉を押した。背後に明るい炎を感じた。だが構わず力いっぱい押した。私は長い廊下を走った。

頭がくらくらした。全く現実感というものが無い。私は人を殺したのか？ まだ夢の続きなんじゃないかって思う。そう願っている。けれど暗い廊下で誰かに追われるような気がして走り続けた。

私は「旅行者には親切に」を破った。けれど、そもそも彼女は旅行者じゃなかったんだ。彼女も、彼女の家も、この町には不要なものだ。みんな燃えてしまえばいい。そう考えながら、私は涙を流していた。

まわたりさんが死んでしまってから、一週間がたつ。私は今、彼女と出会った場所でペンネ・アラビータを食べている。窓のない吹き抜けのレストランも、それはそれでなかなかいい。お客さんも少なくない。昼下がりに入りたくなるカフェのようだ。

まわたりさんが死んでしまって、この一週間にシャドーは現れていない。やはり夢ではなかったのだ。

ところで、ペンネ・アラビータを食べるつもりでこのレストランに来たのだが、少し辛すぎやしない

か？ 指先がしびれてきた。ペンネ・アラビアータと指先の痺れに何の関係がある？ 分からない。だが頭も痛くなってきた。吐き気もする。思わず私はその場にうずくまった。

「大丈夫ですか」

その声に顔を上げてみると、見知らぬ女性が微笑をたたえてそこに立っていた。

某日（土）

えー……。パチパチパチ。始まりました。日記ですねえ。はい。日記です。……。

どうやって始めるべきか分からず、だらしのない一文目になった。ぐはっ

一応書いとくけど、別に理由がある訳じゃない。ただほんの気まぐれで、日記を書こう！ と思ったのです。まるで神の啓示があったとでもいうように！

というのは嘘ですね。実は、昨日の夜に自分の部屋で、あるものを発見してしまって……。

そのことをここに書きたくてもうしょうがない。それを見つけてしまった時の衝撃といたら、もう言葉では表せない。ていうかギャグだよ、これ。というのはつまり……。

キノコ！

が、生えてた。

俺の部屋に！

すっきりした。

こういうことはいつまでもグダグダしていてもしょうがないのだ。すっぴし言ってしまうのが良い！それにしても自分で改めて書いていて、複雑な気持ちだ。ショックで、気持ち悪くて、心臓がずきずきして、不安で、イライラするし、どうしていいのかわからない。つまり、複雑だ。

廣明に「お前なんか、部屋でなめこでも育ててろ！」って言ったばかりだぞ。おあいにくなめこじゃないけど。どうすんだよこれ。

知らない間に結構育てて、かえって手が付けられないというか、手をつけたくもないから、見なかったことにしようか。だめだ。ケータイで写真撮っちゃった（泣）。すごい立派なんだよな……。明日からもうキノコ食べねえよ。焼き払ってしまいたい。

魂鎮めのつもりで書いてるのだが、ヤバス。気持ち悪くなってきた。意味ねえじゃん。まあ、でも、とにかく、なんだかんだ言って、マイ日記一ページ目。面白いね。（どうしようもない鬱）

某日（日）

クラスみんなが俺を変人扱いしている。だが俺は、クラスみんなを変人扱いしている（多分）。

蛙ってかわいくね？ チョーかわいいんだけど。え、マジ可愛いよ。あのねー、蛙の可愛さが分からないのってねえ、俺駄目だと思う。足がいいとか、顔がいいとかじゃなくて、もう全部いい。もう、だめっ！！。可愛すぎる。やばいね。

なんと俺のクラスでは蛙好きが俺しかいなかった。蛙とトカゲどっちがいい？ って聞いたら、もうみんな蛙。間違えた、トカゲ。だめだよ。私爬虫類とか駄目～、っていう回答は書く気にもならない。爬虫類でひとくくりにするな。なぜだ～！！！！！！

まあ、蛙は可愛いよね。他の動物には特に興味もないけど。

某日（月）

俺の部屋は、家と離れた場所にぽつんと立った小屋だ。元々は物置だったものを父親が補強したものだ。それはとところで、俺の小屋の前はすぐ畑になっていて、そこで蜂の幼虫を見つけた。いえーい。蜂の幼虫

は大きさがあって、柔らかくてそれでいて肉厚な感じだ。ヒキガエルの餌にちょうどいいのだ。それでそれを拾ってヒキガエルのケースに入れたら、一瞬で蛙に食われた。きれいなまでに、跡形もなく。丸のみだ。ヒキガエルが餌を飲み込むときの、目を閉じてぎゅるぐるりとやる感じが気持ちいい。いつもコオロギやダンゴ虫ばかりでもつまらないだろうから、たまにはほかの餌もやらないとね。

今朝は驚くほど爽快な朝だった。鳥のさえずりで目を覚ますときの心地よさ、ああ。部屋に差し込む朝日。まるで春先のように涼しい空気。『希望』の二文字にあふれた朝だった。いつもは夜にやっている腕立てと腹筋を朝やった。二十五回ずつやろうとしたけど、十七回がピークだった。

学校に行く途中の道で配られているチラシをもらってきた。邪魔になるだけだからいつもは無視する。クラスの奴らは蛍光ペンや消しゴムの入った塾のチラシをもらってきて、喜んでいるのだが、よく理解できない。そういう文具って、なんか安物っぽいから嫌だ。一週間で使えなくなるぜ、絶対。それを今日は気分がいいからもらってきた。新しくできたペットショップのチラシだった。この近く？

そこじゃなくてさ、チラシが欲しくて自分から受け取ったら、ありがとうって言われたんだ。俺感激のあまり、吹き出しちゃってさ。そのまま走って逃げたんだ。

某日（火）

最近俺へのいじめがすごい。廣明が中心になっている。いじめられる方はいつもどうすればいい。我慢するしかないってのか。俺は俺で、生きていけばいいんだよ。気にするコタあ、無いのさ。はっはっはっはっはっはっは！

本当は戦わなければならない。弱気になればそれは自分を否定することになるんだ。

某日（水）

今日俺の机に蛙の死骸が大きなくぎで打ちつけられていた。ヒキガエルがあおむけに。白いお腹を貫かれた。真面目に殺してやる。現実がかすんでいくようだ。怒りに身を震わせた。でも何もできなかった。「やってみろよ」って飄々に言う廣明を前に、くぎを握ったまま動けなかった。

そして、取り返しのつかないことをした。猫を殺した。うちに寄りつく野良猫を殺した。無性に殺したかった。何の疑いもなく横になった猫のお腹を。なかなか死ななかつたんだぜ。じたばた動き回って、俺は突き刺した右手に力を込めて、いったいどうしてこんなことをしているのか分からなくなった。でも手を離せなかった。途中で手を放していても、ゆくゆく猫は死んでしまっただろう。これを書いている今日の前に、ネコの死骸がある。どこに埋めよう。せめて吊ってやろうと思ってる。

某日（木）

復讐しよう。夜学校に忍び込んで、廣明のロッカーの中に火をつける。いや、やるとしても夕方だ。教室に誰もいなくなった時、南京錠を断ち切って中の教科書を燃やし尽くす。もしかしたら昔盗まれたCDがあるかもしれない。体育着燃やされたらあいつきつと怒るぞ。体育しかとりえのないようなやつだ。PSPだろうと携帯だろうと全部焼却炉だ。

廣明は野球部だ。高校野球部は学校でも一番遅くまで練習してるから、狙いやすい。活動日は月、火、水、金。夜は八時まで。だとしたら週末。がいい。明日だ。やるぞ。

某日（金）

成功した。ロッカーの中に油をぶちまけて、マッチで火をつけた。燃え尽きるのを最後まで見届けたかったが、ロッカーを閉めて帰った。証拠は何もない。見られてもいないはずだ。あの時間学校に残っているのは野球部の奴らだけだ。ざまあみろ。

某日

足音が聞こえる。続いて鍵を開ける音がある。私は顔を上げて音のする方を見る。学生だった。彼は家の中に入る。私はゆっくりと足を上げ、家の方に向う。ごみ箱の上に飛び乗る。窓が開いているのを確認して、窓の端に飛び乗る。拍子にごみ箱が倒れる。私はその家の中に入る。先ほどの学生がベッドの上に座っている。彼は私の方を見る。ちらっと見て、すぐに視線をそらす。私はあおむけになって床を転がる。大きな伸びをして、欠伸をする。突然私のお腹は痛む。お腹が痛い。痛い。痛い。熱い。血が流れるのを感じる。私は暴れる。けれど彼の手は私を離さない。けれど暴れる。痛くて。声を上げる。大声を上げる。そうしたらだんだん力が抜けていって、目が閉じて、何も見えなくなる。

某日（土）

学校側の反応は速かった。俺は退学になった。ようやくだ。俺だってあんな学校あと二年も通いたくない。

公園に鳩の死骸があった。鳥の死骸の中でも鳩はかなりひどい。鳩の死骸って、目がすごくね？ オレンジで透き通ってて結構きれいなんだ。目だって知らなかったら、拾っちゃうかも。体はつぶれてても、案外眼だけきれいに吹っ飛んでたりする。死骸はときどき見かけるけど、死ぬところは見たことがない。車に轢かれたりしてんのかな。

某日（日）

母親に連れられて、新しい学校を見に行った。こじんまりとした学校で、山の中にある。うちからは一時間半かかる場所だ。なんとなく予想はしていたが、緊張する。俺がこんな学校に通うことになるなんて。屈辱だ（笑）。だめな子どもたちのたまり場だから。胸糞悪い。きっと他人の目も気にせず、悪いことをできるしされるんだろう。

しばらく無視し続けていた内に、キノコがすごいことになっていた。ベッドの裏がキノコ畑に。そんな予感もしてたけれどね。さすがに駆除した。ベッドを移動させて、大量の新聞紙を使って。千切れる感じが気持ち悪すぎた。キノコ畑から、昔の宿題のプリントが出てきて、それがキノコにまみれてて、小さな蜘蛛が引っ付いてたりして、俺は吐いた。家は木造で、だいぶ腐ってる。まずいな。これ以上書きたくない。

某日（月）

雨が降っている。車の窓の水滴が、どんどん上にのぼっていくのがどこか感慨深い。トンネルに入ると、黄色い明かりが終末感をあおる。すごく不安だけど、ポジティブに行こうって考えてます。友達が欲しいなあ。

しかしとりあえず一人部屋で良かった。寮だって聞いていたから、どうなるかと思ったけど、ゆったりしてる。いい学校じゃないか。部屋の写真撮りましたー。いえーい。ネットがないのは痛いかも。てか、そもそも圏外だっていう（笑）。けどそれ以外はまあまあ充実。授業はちょっと心配だけど、それはそれ。ていうかベッド硬い……

某日（火）

クラスのフィンキはいい感じだ。でもなんか馬鹿っぽい。笑いのツボが全然違う。低レベル。ていうか、超健全な学校って感じだ。すごくむかつく。

クラスに入って驚いたのは学年が同じでないことだった。どちらかというとなんより下の方が多かった。今日は俺にはちょっかいだしてこなかったけど、きっとじきに来るぞ。あいつら悪餓鬼だからな。そして俺がホントの悪を教えるぜ。ククク。あいつらの口癖はこうだ。おまえ今、地雷踏んだぜ。

L a m i n a ラミナ？

学校の敷地にはウサギが放し飼いでいて、結構人懐っこい。寄ってきたから膝の上に置いたら、クソされた。くそっ。

想像していたよりもずっといい。もっと厳しくされるのかと思っていたが、全然フリーだ。快適快適。昨日までの不安が嘘みたいだ。キノコともおさらばだし。ふん！

某日（水）

今日の授業はディスカッションだった。捕鯨に賛成か反対かについてグループに分かれて討論する。要するにそんなこと突然言われても困るわけだ。そこであいつらの登場だ。リュウと、クロウだ。いつも一緒に動く。たぶん双子だ。あいつらは先生に何でこんなことをするのか聞きに行った。あいつらは十歳くらいだろうが、ここに送られてくるようなやつらだ。先生は遠慮せずに普通なことをこたえる。そうするとあいつらは先生にいろいろ口答えする。俺は年上らしく仲介にはいるふりをする。するとあいつらは俺を押し倒す。俺はわざと先生の方に倒れて先生にのしかかる。先生は悲鳴を上げて足をくじいた。あいつらは走って教室から出ていく。俺に黒板消しを投げつけていきやがった。

某日

夕方の空。私は空を飛んでる。ごみ捨て場でもないのに、カラスが集まっている場所を見つける。飛ぶのをやめて近づいてみる。強い匂いがする。鳥の死骸が見える。カラスたちはその肉をあさっていたのだ。そこに加わって肉をついばむ。頭は肉が少ない。その代わり骨を割ると甘い肉が出てくる。それはうまい。まず目をほじくる。目の周りの肉をくちばしでかき回すと、すぐとれる。眼球は食えない。そして頭をくちばしで勝ち割る。血が流れる。私の黒いくちばしが血で湿る。

私はドリトル先生じゃない。動物の気持ちが分かる訳じゃないから。動物の言葉だって話せない。動物の病気も治せない。動物と一緒に旅行もしない。ペットすら飼ってない。ウサギだって私には寄ってこない。

某日（木）

今日は面談をした。ここの生活には慣れたか？ とか、友達はできそうか？ とか。まだえーと、そうか四日だな。四日しかたってない。だからもちろんよく分からないことはたくさんあるんだけど、特に不安なわけじゃない。カウンセラーのヘアスタイルはちょっぴり気になるな。超ロングだ。目の色が青っぽいのはカラーコンタクト？

廣明たちは元気にやってるだろうか？ 反省会でも開いてくれてんのかな？ んなわけあるか！ くそめが！ どうせ今までと変わらずいじめをやってんだろ。全く高校生にもなって馬鹿なんじゃねえの？

俺がいなくなったから、今ごろ金森はかわいそうだな。あいつはいじめられても黙っちゃおうようなやつだしな。俺は嫌いだったけど。

ロッカーはどうなったろうか。でもロッカーって空気の抜ける場所無いから、強くは燃えないよね。まあいいよ。廣明の財布入ってたから。廣明の彼女の写真、どうせならもらっときゃよかったな。財布に入ってたから燃やしちゃった。みんな俺のこと怒ってるかもな。でももういいんだ。

図書館

某日（金）

正直に言おう。俺と同じクラスの、L a m i n aちゃんに惚れた。一目ぼれです……。年は同じくらいだと思うけど、いつもひっそりとしているので小さく見えます。いつも分厚い本を持ってる。読書は俺の苦手分野だ。もっとまずいのはリュウとクロウがラミナによくからんでることだ。二人はラミナに気があるっぽい。ラミナも二人とならときどき会話をしてる。ラミナは可愛いからクラスの注目の的のはずだが、彼女にいちばん近いのが例にもよってあの二人というわけだ。嫉妬じゃないが、悔しい。気がする。

だめだ駄目だ。恋は人の目を曇らせる。俺はこんないい子ちゃんたちと同化しちゃいけないんだ。みんな悪ガキにしてやるんだ。まずはリュウとクロウだけ。

某日

月の明るい晩で、私は倉庫の壁を這っている。枯れ木の間に入る。小さい蜘蛛が二、三匹いる。どれも私に気付いていない。一匹に狙いを決める。突然、倉庫のドアが開いた。誰かが私ごと木々や箱などをどかさず。私は素早く壁をよじ登る。男は重たそうなスーツケースをたくさん持っている。カーペットをめくってそこにある扉を開けるとスーツケースを持ったまま中に入る。空いドアからは満月がこぼれて見えた。

某日（土）

俺昨日こんなこと書いてたんだな。あかん。やっぱ俺悪餓鬼とかそういうの向いてないとおもうんだ。やっぱ恋したいからな。正直ラミナちゃんに近づくためにあいつらに近づくな……。いかんいかん、なんて正直なことを書いているんだ。人間として最悪だ、うん。

土曜は毎週ミサをするらしい。芝生の庭を挟んで学校と反対側に教会がある。十字架がかかっている。宗教ってなんか胡散臭いよな。罪を許すために金取るようなやつらだけ。聖書を渡されてそれをちょっとだけ読む。それで仏壇みたいなお偉いさんが、なんか置くんなんだ。そして、歌を唄うんだけど、馬鹿馬鹿しくって。聖書も聖歌も日本語じゃねえし。よく分からんが、司祭さんは日本語を話したぜ。キリスト教内での恋愛って話だが、一昨日も同じこと話してるって隣の奴らが話してた。なんだかイライラしてきたぞ。

教会には図書館が一緒にくっついてるから、そこに行けば……と見つめた。

某日（日）

毎週日曜は家族と会う日、ってことになってる。父さんと母さんは昼前ぐらいに来て一緒に飯食って帰っていった。とくに何の感情も抱かない。チョコレートを一枚持ってきてくれたことは感謝だ。自分で食べるんじゃねえぞ。

学校の敷地は多分普通の校庭四個分くらいはあると思う。書いていて、それが広いのか狭いのかなんなんだか。要するに結構広ってこと。敷地は高い塀で囲まれていて、外の様子はわからないけど、山の中だということはおかしくない。敷地の右半分には学校の校舎とか寮とか教会とかが密集している。ウサギ小屋もある。教会の裏手には墓地もある。誰の墓？ 左半分は大きな空地のようになっている。左の上の端の方には大きめの倉庫がある。何が入ってる？

山の中だからなのか、とても日が長いのでよく散歩をしますね～、はい。まあよくではないんですがね。それで学校の敷地のことを軽く調査したという訳です。そしたら彼らに遭いましたよ。リュウとクロウですね。無視するのもどうかと思ったので、よっす、と言っておきました。そしたら見事に無視されましたよ、ははは。

うぜえな、無視されてないよ、別に。二人そろって、やあ、って言われたよ。正直、顔がそっくりだからどっちがどっちかよく分からない。片方はアメリカ系でチャライ感じで、もう片方は気持ちやさしめでダンスとか習ってそうな顔してる。結構イケメンだぜ。イケメンと言われるイケメンじゃないけど、だってまだ小学生くらいにさえ見えるし、年相応のいい顔をしている。強そうにも見える。でも俺はひるまない。なぜなら俺はよりイケメンだと自負しているからだ。所詮年下だし。

あいつらがじっと俺を見つめたまま動かないからどうしてやろうかと思ったけれど、あいつらはなぜか俺の前で劇をやり始めた。二人は一メートルぐらい離れて、片方が後ろを向き、もう片方は地面に膝をついて手を合わせた。片膝をついた方が、手を合わせながらぶつぶつ言って顔を伏せている。立っている方はもう一人の方を見ないで胸の前で十字架を作っている。片方は司祭で、もう片方は教徒らしい。

「さっきから君はいったい何をしているのかね」

と、司祭は見下すように言う。

「司祭様の前で、神に許しを乞うているのです。」

と、教徒は司祭の方を見上げて言う。

「神の慈悲は闇夜を照らす月光のようにお前のどんな罪をもお許しになるだろう。神を信じよ。されば救われよう。さあ、もう帰りなさい。」

と、司祭は言う。

「私はいつまでも神と共に居たいのです。もう少しだけここにいたいのです。」

「黙れ、早く帰らんか。私が許さなければお前は神に許しを乞うことも許されぬ。」

「司祭様だけが神のお気に入りという訳ですか。」

「神の前に私を信じなければならぬのだ。神は決して私たちを見捨てはせん。けれども盲目的に信じることと、うわべだけであることは地雷を踏んだも同然だ」

司祭はひさまづいた教徒をける。教徒は大げさに転ぶ。司祭はもっとける。何度も何度も力を込めて。嫌な奴らだ。

某日（月）

昨日のこともあってリュウとクロウとの距離が縮まったとばかり思っていた俺の勘は外れた。まったく見向きもしないんだ。

今日学校で軽い火事があった。調理室からボヤが出たらしい。サイレンが教会の鐘だったので、なんか感激した。キリスト教の学校だったなんて知らされてなかったくせに。でも山奥の宗教の学校って、はたから見ると危ない宗教団体だよな。

恐る恐る図書館に入ってみた。教会の二階だ。すさまじかった。読書とか勉強用のスペースはほとんどなくて、そびえたつ本棚が圧迫感だ。どの本も古そうで分厚くて、例の魔法学校のイメージ通り。（なんとわかりやすいことか！）一通り中を歩いてみたが、ラミナはいなかった。生徒も全然いなかった。本を読む人なんていないんだ。そんな気がしてたよ。

鼠がいた。

普通のネズミ。灰色っぽくて、茶色にも見えて、ハムスターみたいで、すばやくて。

本をかじったりしてるみたいなんだ。結構至る所にいる。分厚い本を取り出したら俺に飛びついてきたのには驚いたけど、慣れの問題だな。慣れって恐ろしい、っていうか、人懐っこいとかいうレベルなの！ワイルドだよな。

某日

日が斜めにさして、風も少しある。芝生に人影はなく、他のウサギもいない。ウサギ小屋までは少し距離がある。私は歩かない。日向のベンチに人が座っている。ノートとペンを持っているが、何かをしているわけではない。私は近づいてみる。私は彼の足もとにうづくまる。彼は私を抱き上げる。足が地から離れてふわりとするが、彼の膝の上に置かれる。彼の足の上を少しもぞもぞ動く。排便をする。私はウサギ小屋に向かって帰ろうと思う。

某日（火）

今日は朝から雨だった。部屋の窓から外を見ていたら、ラミナがいた。こっそり後をつけた。まったく振り返らなかったけど、気付かれてないよね？ ラミナは教会に入ったが、裏から出て墓地に向かった。雨の中、美少女がお墓参りという何ともメルヘンチックな情景を見てしまった。お墓参りという書き方がよくない。日本みたいだ。くうううう。書けない。一体なんでっていう疑問がある。親戚の墓でもある？

ますますこの学校があやしい気がしてくる。

某日（水）

今日は快晴だったので、昨日できなかった外での写生大会があった。学校全体のイベントで、まあすごいらしい。（何が！？）俺はいつものベンチに座って教会の十字架のあたりを描いた。そしたら珍しくリュウとクロウとラミナの三人が揃ってやってきた。それでさ四人で一緒に描いた。リュウは教会を、クロウも教会をそれぞれ半分づつ描いた。ラミナは十字架のところに巣を作ってる鳩を描いていた。ラミナの声を初めて聴いたよ。しかしラミナは目がいいんだな。時計の針までしっかり描いていた。消しゴム貸してあげたくらいでは何にもならんだろうか？ 悪いが、絵には自信がないという自信がある。

なんか俺のテンションいつもと違うな～

某日（木）

どうにもおかしい。昨日学校で火事があったらしい。？？？ 朝起きたら学校がはんぶん燃えて無くなった。放火？ でもおかしいぜ。燃えたのは昨日の午前中だってみんな言ってる。午前中は写生大会があったでしょ。その時燃えてた？ 学校が燃えてるのに気付かず写生って、なんかいろんな意味でシュール。て、のんきだなおい。今日はリュウ、クロウの二人組とも、ラミナとも会ってない。リュウとクロウが部屋にこもってるなんてありえない。まずいな。何かが……。まずいんだよおお。

某日（金）

学校が半分焼けて、授業がしばらくなくなることはあっても、俺が連れ戻されることはないわけです。それはみんなそうで、なんだかみんなのんきなもんです。リュウとクロウのことを知っている人もいませんでした。こういう二人組の男の子いたよね？ って聞くと、マジで、は？ って顔される。まじっすよ。やばいっすよ。知らないわけないじゃん。これはあいつらの仕掛けたドッキリってことはある？ 俺ってそんな人気者？ （違うか）いや、あいつらならどんなことでもしそうだけど、さすがに規模がでかいな。危ないし。（大人の意見キター！）そういうことはやっちゃいけないと思います。

ラミナにもあえないし、泣きたい気分。こんなんでもいいの？ なにが？ いいんだよ。きつとね。うーん。まだ様子見しかないか……

某日（土）

ラミナは知っていた。っていうのは、リュウとクロウのこと。ラミナも変だと思ってるって言った。

ラミナの部屋の番号を覚えてくれたので、俺も教えといた。……。なんか、俺のことを避けてる？ そのままそそくさで行っちゃった。距離が縮まったのか、どうなのか。しかしあの二人はどこへ行ったのだろうか？ 俺には手がかりが何もない。いや、きっと何かあるはずだ。二人のいた証拠となるものがあればいい。写生大会の絵だ。あれはスキンヘッドの先生が回収していたはずだ。写生大会が本当に行われたかも意見が食い違うからなあ。できればラミナと情報交換したいんだけど、部屋に押しかけるのもなあ。なんだかいろいろ面倒くさくなってきたぞ。(笑)

某日(日)

昨日ミサがなかったことを書き忘れてた。なかったんすよ。まだ一回しかやってないのに。なんか、本音を言うと残念かな。うん。今日は両親も来ない。火事があったことは知っているんか。それとも知らんのか。どっちにしる俺は見捨てられたのかな。それこそどっちにしる変わらないんだけど。いや、変わるよね、はい。

で、で、で、結局何を書きたいのかといいますと、いま私の直面しているこの事態のことなんです。いてもたってもいられず、きょう午前中に押しかけてしまいました。ははは。押しかけてしまいました、だつてさ。なんなんだよ。ラミナは無口だから、一緒にいてもあまりしゃべらない。というより、考え事でもしてるみたいだ。情報を軽く整理する。

○学校が焼けた — 水曜の夜の間

／ 水曜の午前中に調理場から発火

○リュウとクロウが消えた — 知っている

／ 二人の存在すら知らない

これらが周囲と食い違う。他と違うのは俺とラミナだけ。

整理してみると大したことで無いように思えてくるんだけど。いろいろな意味でまずいな。ここをおろそかにしたら俺はどこまでも行ってしまいそうだ。

ラミナは時々不思議な夢を見る、という語り口から行こう。ラミナは時々不思議な夢を見る。それも近頃は頻繁だつて。気付くとラミナはラミナじゃなくて、何か違う何かになっている。さっきまでみんなと授業を受けていたはずなのに、気付いたら空を飛ぶ雀になっていたり、小さなアリになっていたり。それは必ずしも妄想ではなくて真実の眼だ。たとえば、その夢のおかげで誰も気づかないところに鳥の巣を見つけたりだとか。動物のかじった痕跡を見つれたり。さすがに学校の外のことはわからない。

某日(月)

ラミナと一緒に部屋に寝たことは秘密。

大まかに言うと、ラミナも結局何にもわからなかったから、二人して謎な空気に包まれたまま、夜を明かした。

ラミナの書いているという日記を見せてもらった。結構面白い。何かの動物の視点になって目の前にあるものを淡々と描いている。なるほどこれはいったい誰の日記なのか分からない。一人称は「私」で統一されているんだが、これがアイデンティティになるかは疑問。けど、夢があるよなあ。いいなあ、超能力者。ん、待てよ。ラミナが特別な人間だったとするならば、ラミナがみんなと違うものを見ていても不思議じゃないのかもしれない。だとしたら俺は？ 俺とラミナの共通点は、それこそ日記を書くことぐらいなもんだ。

そうか、俺も超能力者なんだ。きつともうすぐ俺の隠された能力が覚醒するに違いない。

ラミナが帰ってしまった後で、一人でこれを書いていると何だか、寂しいというか、しんみりしてきた。い

たたた、みたいなの？ でも最近暇なので、書くことがない割によく日記を書いています。(あんま書いてねえか)

某日

私は狭い檻に入れられていて、角がつかえてしまう。折りたたんだ脚は力が入らない。私はエレベーターで上に上げられて、外に出る。外は夜で静まり返っている。私はトラックに入れられる。トラックにはほかにもキツネやサルや、蛇とか、がたくさんいる。

見知らぬ男が学校の先生にケースを渡した。先生はあけて中を確認する。片方にはよく分からない白いものがたくさん。もう片方の大きい方には拳銃が数丁。弾も入っている。それと別にお金もあった。見知らぬ男は笑顔で荷台の扉を勢いよく閉める。

某日(火)

鬱憤晴らしに朝から晩まで散歩をしている。というか、散歩することにした。ストレスからか、すごく足がむくむくするんだよねえ。この日が長いってことは前にも書いたよね。今日は曇りだけど何だか明るくていい気持ち。ここは何時でも散歩日和だ。生徒たちも、外出してない二日三日のうちにずいぶん減った。みんな帰っちゃったの？

教会に聖書の日本語版があったので、勝手に持ってきた。先生たちなんてほとんどサボりも同然よ。あのスキンヘッドとロングはどこ行った？

聖書一ページ目

アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。

アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちの父、ユダはタマルによるパレスとザラとの父、パレスはエスロンの父、エスロンはアラムの父、アラムはアミナダブの父、アミナダブはナアソンの父、ナアソンはサルモンの父、サルモンはラハブによるボアズの父、ボアズはルツによるオベデの父、オベデはエッサイの父、エッサイはダビデ王の父、ダビデには子がいなかった。

俺ってよっぽど暇なんだね。超腕疲れた。これ以上読むのはやめた。

鼠ってどっかに巣を作ってるのかな、とか、ラミナなら知ってるのかな、とか考えながら教会を探索してみたら、あやしげな階段を発見した。よくあるじゃない。そう。学校とか老人ホームに無駄にある地下へと続く階段。無駄かどうか知らないけど、生徒が地下へ行く必要性はまずないから、まあ何かあるんだろうけど。今は地下への階段を不審に思うが、降りてみる勇気は残念ながら俺にはありません。

某日

月がよく見える夜だ。周りには物音すらない。私は冷たく硬い通路をゆっくりと歩いている。天井近くの窓から月の明かりが漏れている。床がその光を反射させて浮かび上がる。誰か人が来る。足音がする。忍び足で歩いている。他には誰もいない。彼は奥に行き、地下への階段を降りる。このところ毎日らしい。その階段には薬品のにおいがある。私たちはそこには入ろうとしない。

本の壁をよじ登っていると再び足音が聞こえる。今度のは二人だ。それも子供の。小さな足音が静かな空気を震わせる。その二人組は早足で奥に進んで、さっきと同じように階段を降りていった。私は裏口から外に出た。

今日は気温が低い。まだ冬だから。外に出るネズミはほとんどいない。夜はウサギもどこか暖かい場所で眠る。私は何もせずもとにいた屋根裏部屋に戻る。

某日

私は狭いケースの中にいる。閉じ込められている。繰り返しハンマーで打たれた右足は痛覚をほとんど失っている。骨も砕けた。体中の毛が抜けた。周りには私とおなじように、閉じ込められたウサギや鼠がいる。暗闇に低く唸る声が聞こえる。暗闇に閉じ込められたまま朝なのか夜なのかわからず、こうやって時間を過ごしている。足をなめる。ただ死を待つだけしかない。

某日（水）

まるで昨日までのことがすべて夢であったかのようだ!!! うーん。いつも通り目覚めたはずが、九時ぐらいに目が覚めたと思ったら部屋に両親がいたのだ!! そのまま家に帰宅。二週間ちょっとのトリップが、一晚の夢のように思われてカレンダーと格闘するが、どうにも勝てない。キノコもしっかり成長している。傘が破裂してグロテスクで、なんだか大変なことになっています。なんだか夢であってほしいのように書いてるけど、そういう訳じゃないのよ。そりゃ、もちろん。バッグに入れっぱなしだった薄い新約聖書を大切にしたりします。

いろいろどうなっちゃうんだろ。学校のこととかも気になるし、何よりリュウとクロウの二人のことはまだ何もわからないままだ。

某日

梯子から誰かが降りてくる。その誰かは両手に大きなケースを抱えている。梯子を降りてすぐの壁を押すと、壁は扉のように開いて、部屋が現れる。男は片方のケースをその中に入れ、中から拳銃を取り出してまた違う箱に入れる。もう片方のケースはそこに入れず、さらに男は奥へと進む。私は追いかけることはしない。

某日

私は空を飛んでいる。窓から部屋の中に入る。中は煙い。子供がたばこを吸っている。その女の子は私にパンくずをくれる。私はそれを食べる。私はしばらくその部屋にいる。女の子はタバコを吸い終わると、ガムを取り出して噛む。

女の子は言う。

「いつまでそこにいんのよ」

私は少し飛び跳ねる。

女の子は引き出しからナイフを取り出す。女の子はそれを自分の喉にあてて言う。

「俺たちにかかわろうとすんじゃねえ、ころすぞ」

ガムを吐きだして声を少し高くして言う。

「こっちは二人だぞ」

女の子はナイフを机の上に置く。女の子は笑う。

「笑わせてくれるわよ」

女の子は窓を閉めて私を閉じ込める。

某日（木）

現実っていうのはせっかちじゃないか? いやに結末を急ぎたがっているように思われる。

今朝目覚めると俺の隣で本を読んでいたのはリュウだった。たぶんリュウ。優しい方。一人だった。

クロウは学校の近くにいるという。何をしに来たのかと尋ねれば、俺を学校に連れ戻したいという。ラミナが閉じ込められたままだともいう。卑怯な奴らだ。俺に彼女を救えというのか。

武器は拳銃と手榴弾一個。拳銃の弾は6発。リュウとクロウも同じだけ持っているらしい。ラミナと連絡は取れないが、むこうも大した武器は持っていないだろう。

夜も十分に過ぎた頃、俺は庭の隅にあったガソリンを家にまく。マッチで火をつける。本当に焼き払えるとは思ってもみなかった。タクシーに乗って学校へ向かう。学校の場所はリュウが知っていた。

某日

子供が三人いて、ベンチに座っている。そのうちの一人はほかの二人より少し大きい。大きい方か言う。「お前らラミナと仲いいのかよ？」

二人は答えない。

「ラミナが話すところ全然見たことねえんだよな」

二人は答えない。

「おい、なんか言えよ」

二人は一緒に言う。

「お兄さん、ラミナのことが好きなんですよ。ラミナとやりたいんですよ」

大きい方は少し首を傾げる。

「何をだよ？」

再び一緒に言う。

「セックスだよ。でもねお兄さん、やっちゃいけないよ。先生たちは毎日やっているけどね」

大きい方は笑って言う。

「なんで知ってんだよ」

二人は今までより小さな声で言う。

「僕ら見るんだ。毎日夜に学校とか教会に忍び込んで。あいつらだいたいそういう場所でやるんだ。部屋でやりゃいいのにさ」

大きい方が答える。

「そりゃ学校が嫌になるな」

二人は言う。

「特にラミナに手を出そうなんて思っちゃだめだよ。ラミナは神様なんだから」

大きい方はまた笑って答える。

「ここで言ったら冗談に聞こえなくなるぜ」

二人で答える。

「ホントだよ。ラミナが自分で言ってたんだ」

大きい方は二人に言う。

「ラミナが神様なら、俺は天使くらいにはなれるぞ」

そのまま三人は同時に立ち上がり、別々に帰る。

某日（金）

時計を持ってこなかったの、あいにく何時からが今日なのか分からないので、こらで今日ということにしておく。リュウが何を書いているのか聞いてきた。俺は日記だとだけ答えた。リュウはさらに何か言おうとして口を動かしかけ、黙った。学校の近くで止めるようにリュウがタクシーの運転手に行った。俺

もリュウもお金は持っていない。リュウが運転手を撃った。

学校は山を少し登ったところにある。案外俺のうちからも遠くない。正面の門のそばにはクロウがいた。ラミナが閉じ込められてそうな場所は、二つ。門のそばにある倉庫か、教会の地下。リュウとクロウは教会の方。俺は倉庫の方を探しに行く。何かあった時の集合場所は、俺の部屋。明かりはなく、周囲は真っ暗だが、ロング達がいると思って間違いない。教会からは少し明かりが漏れているからだ。倉庫の前には大きなトラックが一台停まっているが、人の気配はない。

傍にあったブロックの石を重ねて足場にし、俺がまず乗る。そしてリュウとクロウの二人が中に入り、俺もそれに続く。懐中電灯を消してから、目が慣れるまでにはそうかからなかった。

トラックの荷台には動物が乗せられている。どの動物も静かに眠っている。

倉庫の中には汚れたボールとか、切れ切れの木材とかがつまっていたが、あやしそうなものはなかった。人を閉じ込められそうな場所ではない。

音をたてないように箱や木々をどかして、敷かれていたカーペットをどかすと、大きな扉があった。地下へと続くものであるらしい。地下は思ったより深い。下についたときは真っ暗だった。明かりは見えないが、銃声が聞こえる。ラミナを見つけたんだろうか。俺は懐中電灯をつけた。

果てしなく暗い廊下が続いていて、廊下の両側には檻がある。が、動物たちはほとんどいない。いても動かないので生きているのかもわからない。

奥には金属門の部屋があった。鍵がかかっているようなので、ノックをする。鍵を開けて出てきたのは先生だった。即、撃つ。先生を盾に部屋に入る。部屋にいたもう一人も撃つ。

ラミナは部屋の真ん中に転がっていた。裸だ。細い太ももの間には精液が固くこびりついていた。白く細い体には血が飛び散った。ラミナは僕が考える最も安らかな表情で眠っている。ラミナの上に覆いかぶせるように、来ていた上着をかけてやる。部屋を出ると犬が執拗に吠えてきたので二発撃ちこんだ。

廊下は行き止まりで、階段がある。どこか見慣れた階段だ。それを登ると教会に出た。つまり倉庫と教会は地下でつながっているということになった。裏口から外に出る。墓地には動物の死体そのまま転がっている。ウサギや鼠、シカやサル、ワニもいる。ひどい悪臭を放っている。梯子を上って教会の屋根に上る。教会は学校で一番高く、学校内部を見渡せる。四人の先生方が学校内をうろついている。明かりがつけられ、しばらくは逃げられそうもない。寮の建物に入ったりしたら死ぬだけだが、あの二人は大丈夫だろうか。俺は十字架の後ろで様子を見る。

先生が一人撃たれる。あの二人だ。続いてさらに撃たれる。気付いた先生が寮に入ろうとする。俺は狙い撃つ。外れる。もう一度打つ。当たる。先生は倒れる。もう一人は寮に入る。俺の部屋で銃声上がる。数秒して手榴弾が爆発する。

一発外したから弾はもうない。拳銃を思い切り投げる。

あとは僕が死ぬだけ。手榴弾でこの十字架を破壊してからさ、飛び降りるのさ。これが最後の記述。僕の書いてることについてこれてる？ 僕はこうやって死んだんだ。ごめんね、ラミナ

気にしないで…… なんてね

女の子の名前はリア。家の近くに、あまり人の来ない商店街があり、反対方向に城が見える。そう遠くではない。一応城下町。

リアが竹で編まれた鞆を持って石畳の道を歩いていると、向こうの方にニワトリが小麦色の地面をついているのが見えた。それを拾い上げて、果物屋の小母ちゃんのところまで持って行った。脱走したニワトリを探していた小母ちゃんはありがとう、と言って、林檎をくれた。萎びているが、食べられないほどではない。林檎を着ている薄水色のスカートで擦って、汚れを落として囓る。芯まで食べれるかなと思ったけれどかぶりついてみてやめる。

商店街を抜けて、家を通り過ぎ、城の方へ向かう道を歩いていくと、少ししたところで二筋道になる。他にも分かれる道はあるのだが、ここでは大きな道のことを指している。その道を右に行くと暗い森に入る。ここ最近は蛍を見ることが出来るが、それも、もうすぐなくなるであろう。その先は開けた空間となっていて、大きな湖がある。湖の水は透き通っていて、しかし魚は一匹としていない。リアはそこで毎日血が出るほどに妹の服に刺繍をしなければならなかった。継母の命令だ。

湖の方へ戻るとき、ポケットに入っている糸を巻いたワインのコルクがリアの太股にあたる。悔しいことに、心地よいと感じてしまう。

時々、リアは自分が惨めだと思うときがある。涙が止まらなくなって、そんな時は、『ハンプティ・ダンプティ』を歌う。歌っているとなんだかウキウキしてきて、惨めだと思うのは、あまりなくなる。

家を通り過ぎるときは、なるべく音を立てずに、速く歩く。音を立てて歩いたら妹が窓を覗いて、「おねえちゃんだ！」と言って、継母に告げ口するかもしれないからだ。そうすると継母は「まあ！」と言って、帰ってきたリアをぶつ。

さっさと家を通り過ぎてしまうと、リアは落ち着いて、物思いにふけ始める。

私は悲しむ。なにか黄色い物が動かなくなった。目を凝らしてみる。ひよこ……？

ひよこに触ろうと伸ばした手を何かに吹き飛ばされる。私は勢いで転び、すると耳になんとか気持ちの悪い物が飛び込んでこようとするので、耳を塞ぐ。今度は、頬をぶたれる。やめて、やめて、と叫びながら、私は逃げようとする。体にGが掛かって、動けなくなり、また頬をぶたれる。なんらかぼうっとしてきたときにGはなくなって、しかし力が入らない。頭を蹴られて立たされる。目の前は白くかすんでいる。お腹に強い衝撃を感じ、また私は倒れ込む。

不意に、ワインのコルクが当たる感触があり、頭を上げると森の中だと気付く。リアは歩き出す。いつも歩いている道なのに、毎回同じ木に目が止まる。雷で幹が割れて、口のようなその木はなんでも食べてしまいそうな予感がしてならない。リアは食べて欲しい物を考える。地位。現実。不公平。リアは首を振って、考え事を止める。もうすぐ湖に着く。落ち着いていないと、刺繍を間違える。間違えたら、継母が二、三日食事をくれない。

湖に着いたら、リアは鞆から模様のない服を五着出す。針も出して、ポケットからコルクを出す。草の上に座って、刺繍をし始める。糸の先を、啜って整える。針穴に糸を通す。リアの細くて白い指は器用なもので、すぐに糸が通り、玉結びをする。継母に言われたとおりの柄を刺繍し始める。頭で考えて縫わなければならないので、時々手が止まる。全体を見て、また縫い始める。リアの知っている縫い方は並縫いと対称縫い。継母は対称縫いで服を縫わせる。ただ難しいだけの縫い方をリアにさせる。リアは黙って言うことを聞く。

リアは一着縫い終わり、草の上に寝転ぶ。空では、カラスが驚に襲われている。

そういうものなんだろうな、とリアは一人で納得する。ほんの少し、目を瞑る。リアは『ハンプティ・ダンプティ』を口笛で吹く。吹き疲れて、少し眠る。

リアの髪を蟻が上り、落ちる。蟻は餌を探し求めて、リアの髪を上り、落ちる。リアが寝返りを打って、蟻は下敷きになる。

はっ、と目を覚ます。そんなに時間は経っていないことを確認する。そういうものなんだな、と改めて思う。死んだ蟻は、他の蟻が巣に持って行く。葬式を行うためだ。

作業の効率が上がって、四着目が終わった。五着目もすぐに終わる。しかし、すこし陽も傾いてきて寒くなったので、四着の中の一着を身につける。他の三着は鞆にしまい、五着目を縫い始める。

引っ張る。返す。裏にする。また引っ張る。もう一回引っ張って、裏へ返し、また引っ張る。

五着目が仕上がったときにはもう暗くならうとしていた。リアは急いで片付けをして、家へと急ぐ。森の中はしん、としていて、どうも薄気味悪かった。

お腹が痛い。私はそう思った。始まる。なにかが始まる。すべてが。いや、違う。私は手を挙げる。「お腹が痛いです。」

無数の顔が私へ向き、爆音の笑いが私を包む。顔は顔を創りだし、笑いは笑いを創りだした。顔の一人がこちらへ近づいてきた。私は目を瞑る。片方の手で胸を撫でられ、もう片方の手で、頬を抓られる。私は我慢する。涙が出そうになる。歌を思い出そうとする。なんの歌だったかは覚えていない。短調の音楽が頭を流れる。

お腹を殴られる。私は倒れ込む。

家に着いたとき、継母は庭で水を蒔いていた。継母はリアを見つけると水を掛けた。そして怒鳴った。「何を着ているの！」

リアはしまったと思った。妹の服を着てしまっていた。継母は近くにあったスコップでリアの足を殴り、倒れさせた。リアは痛いのを堪えて座り直し、妹の服を脱いだ。「こんなに濡らして！」継母はそう言って、スコップでリアの顔を殴った。そしてリアを屋根裏部屋へと引き摺って行き、小麦粉を飲ませた。リアはもうその時に非道く傷ついていたし、小麦粉を飲ませられたので、喉を痞えそうになって、咳をげほげほとした。涙が溢れたけれど、継母はリアの手足を紐で縛って、埃まみれの床に転げさせ、泥水を掛けた。そうしたら、満足したのか、屋根裏部屋から出て行った。

蝋燭も灯っていない部屋で、リアはまた咳き込んだ。血に絡まって、小麦粉が口から溢れ出る。ハンプティ・ダンプティを小声で歌う。なんでこんなに痛いのだろうと思う。痛みと疲れで、リアのまぶたは重くなる。

誰かが階段を登ってくる音で目が覚める。継母であることは大体予想が付く。寝ているふりをしたリアの横に継母は立つ。「起きなさい、この娼婦め。」と言って、リアのお腹をおもいきり蹴る。うっ、と呻き声を上げて、リアは目を開く。金属で出来たグラスを持って、「水。」と継母は言う。グラスを傾ると、リアの顔に泥水が当たる。泥水を被った後、足の縄だけ弛められて、立て、と言われる。リアがよろよろ立ち上がると、早く塗ってこいと言われる。縄で繋がれた足で小股にそろそろと歩いていると、継母が背中をどん、と押す。その勢いでまたリアは転ぶ。手を使えないせいで、頭が床に直接ぶつかる。よろよろ立ち上がって、階段を急いで降りようとするが足が絡まって、十段近く階段を転がり落ちる。

「案外早く降りられるのね。」と継母は言い、紐を解かぬまま鞆を持たせる。リアは黙って、玄関まで行く。戸を開くと、背中に何かがつつかってきて、倒れる。仰向けになって見ると、妹だ。妹が跳び蹴りしたのだろう。がはははは、と少女らしくない笑い声を上げ、光沢のある黒のドレスをひらひらさせて家に入

る。継母が戸まで歩いてきて、リアに何か言うと思ったが、何も言わずに、戸をばしっと閉める。

皆がじろじろリアのことを見るけれども、誰一人としてリアを助けない。継母が魔女であるという噂が流れているからだ。リアは上体を起こし、立ち上がる。結ばれた足で少しずつ歩き出す。

壁に突き飛ばされる。母が鞭を持って、私を脅す。ねえ。私は言う。なんで、なんで。四つん這いになった裸の体に鞭が食い込む。ごめんなさい。髪がばさりと目の前に落ちる。顔を蹴り上げられ、また壁に当たる。鞭が少し膨らんできた胸に叩きつけられる。

座り込んだら、目の前にひよこの死骸があった。鞭がひよこの死骸を襲う。軽快なリズムで鞭と私とひよこは踊る。重苦しい音だと言うことはわかりきっている。脳が軽快なリズムとして判断している。突然、目の前が真っ暗になる。と思ったら、ずれ動く残像と風景がぼんやりと目の前を流れる。目の辺りに痛みを遅れて感じる。思わず横になると、腹を蹴られ、失禁しそうになる。なにも積極的に行動が出来ない。世界中の映像が目の前を通り過ぎる。四方八方から銃弾が飛んでくる気がして、頭を避けようとする。体が動かない。また顔を蹴り上げられ、開いた口にバツタが投げ込まれる。私は吐き出そうとするけれども、口を何本もの手で押さえられ、飲み込んでしまう。胃の中でバツタが暴れている感じがして、吐き気を覚える。

誰かにぶつかって、リアはすみません、と言う。森の入り口にいることに気付く。青年は振り返って、ああ、と言う。リアと目が合った途端、目を開く。

「大丈夫？」

と青年は聞く。ポケットからナイフを取り出して、手と足の縄を切る。リアは清々しくなり、胸の鼓動が速くなるのが分かった。あ、ありがとう、と青年に言って、暗い森の中を歩いていった。

後ろで足音が聞こえる、とリアは思った。湖に出て、鞆から布を、ポケットからコルクを取り出し、刺繍を始める。緊張して指が上手く動かない。背中に視線を感じる。

針はリアの指を容赦なく刺す。左手の人差し指、中指を刺してしまい、血がじんわりと出てくる。紫色の服に血の染みが広がっていく。染みはなにかの予兆のように形を描き出したが、リアには読み取れなかった。服が血で汚れてしまったので、リアは湖のほとりでゴシゴシと洗った。いくらかして服の血はとれたが、湖が紅く染まった。リアは気味が悪くなって、湖から離れようとしたが、足が動かなかった。すると木の枝がべきべきと折られる音がして、リアは振り向こうとしたが、その前にさっきの青年が走り寄ってきて、と同時に水色の石のような物をブンと投げて、湖の中心辺りに落ちた瞬間、湖は元の透き通るような青と元に戻っていた。青年はフードを被っていたが、口元が笑っているのが分かった。リアは体が熱くなった。頬が赤くなるのを自分でもはっきり認識できたし、なぜか恥ずかしくなって腰の辺りがムズムズした。

青年がフードを外したときには、リアは天に舞い上がってしまいそうな気分だった。青年は鼻立ちが良く、目は深い黒だった。全体的に上品な感じがした。しかし、額に真新しい傷があった。その傷がさらにリアの心を捉えた。目が合って、何分もリアはぼおっと突っ立っていた。

青年は優しく笑って、それから森の出口へと進んでいった。遠くなった背中にはちらちらと蛍の光が咲いていた。

ずいぶん時間が経っていた。リアは急いで残った刺繍を始めた。近くに生えているヒルガオやツワブキや、水面を漂うホテアオイが刺繍をじっと見守る。リアが指をちょっと刺すと、ホテアオイはあっ、と短く叫び、リアはそのたびにホテアオイの方に向かってニコりと微笑む。

全ての着物に刺繍が終わったのは、手が血でひどく濡れて、陽が完全に落ちようとしていたときだ。また、ぶたれると思ったリアはそれでも急いで森の道を駆けていった。

手を塞がれていた。縄ではない。そんな生やさしい物はこの世界から追放されている。たとえ縄があるとしても、それは人の手を封じるために有るわけではない。

ナイフ。ナイフが転がっている。あとナイフを握っている人の手。手首から先は赤く染められてしまっ

ているので、ない。手袋が嵌められた手がそのナイフを持つ手をどかす。そしてその手がナイフを持つ。

死にたくないと思った。しかし、現実を直視しなくてはならない。現実を直視するための目は、今ではころん、と床に転がっているはずではあるが。ついでに目だけ転がっているのではない。目がはめ込んである、頭も、転がっているはずである。

継母は家にいなかった。リアは、今日はとてもついている日だと思った。鞆を一階に置いて、屋根裏部屋へと早歩きをした。階段を登っているうちに悲しくもないのにハンプティ・ダンプティを歌いたくなった。ラララー、と歌っていると痩せた鼠たちがチーズを届けてくれた。リアはチーズを大切に食べた。鼠たちにお礼を言って、なにか渡さないと、と思った。ポケットから、コルク栓を取り出して、糸ごとあげた。鼠たちは大喜びして帰って行った。

久しぶりに豪華な食べ物にありつけたので、朝、目が覚めたらリアはお腹が重いことに気付いた。胃もたれを起こしたのだろうと思った。上半身を床から上げた瞬間、リアは目を見開かずにはいられなかった。部屋には植物がぐちゃぐちゃに生えていた。リンドウやキキョウがむしゃむしゃしていたので、階段までたどり着くにはそれらを踏んで行かなければならなかった。ただ、甘い香りがほんのりと香水のようにリアを包んだ。リアはすっかり良い気分になって、ハンプティ・ダンプティを鼻歌交じりに歌いながら階段を降りていった。

これを気に食わなかったのは妹だった。妹は元から醜い顔をさらに不機嫌にしながら毛布にくるまって、大切にしていた鏡を殴り壊した。かあさんがいたらこんな事にはならないのに、と思って、姉が早く外へ行ってしまおうのを願った。

リアは継母がないことが分かるのもっと喜んで、すぐに湖の方へ鞆を持って行った。ずっと口笛を吹いていて、その音があまりにも綺麗だったので、雀や鳩やトビがリアの周りを飛んで、それぞれ美しい声で鳴き、蟻や犬や豚がリアについてきた。

町の人々はリアの歌や動物の声を聞いて、ぞろぞろと隊列に加わっていった。その声は少し遠くにある城にも響き渡っていた。

ついさっき帰ってきた王子の耳にもこの音は聞こえていた。疲れてベッドで寝ていたけれども、なんだか元気になって、さらに胸が高鳴った。窓際に走り寄って、外を見た。町に人が集まっている。人だけではない。沢山の動物もゆっくり行進している。先頭を歩いている少女を見てあの娘だ、と思った。

王子は家来に何も言わずに部屋の窓から飛び降りた。下に生えていた木の枝に掴まって、思い切って放して地面に降りた。馬小屋の近くに行き、ピー、と仲の良い馬を呼んだ。

静かに馬は来て、「あの歌の元へ行くんですね？」と興奮して言った。「あたしも体がほくほくしているような感じで堪らなかったんですよ。」

王子は黙って馬に乗り、馬は柵を跳び越えて町へと向かった。馬は追い風に乗ったので、凄いスピードで走り出した。馬はとてもウキウキしていたので、王子を落としても気がつかなかった。

馬にピーと呼んでも帰ってこなく、土煙が上がる中、王子はひとり、森の中に取り残された。しばらく森の中を彷徨うと、湖に出た。あの娘がいたところだ。彼女に会ってるはずだった今、馬は私を必死になって捜し回っているだろう。

馬は祭り騒ぎの行進に紛れて踊っていた。リアは理解した。結局こうなってしまうんだな、と。一緒に行進していた蟻を踏みつぶした。踏みつぶさないようにしているのだが、足がいうことをきかない。というより後ろの大人に押される。押されるのに、何に向かって行っているのかが自分でもよく分からなかった。リアが自分で決めるはずのことであるのに。

湖へ。直感で湖に決めた。しかし、いつの間にか湖へ行く道へ入っていた。リアは思わず溜息をついた。自分で決めることは出来ないのだと思った。リアの周りに蛍が飛んでいた。

行進が湖の前で止まった。リアが湖の水を飲んで顔を上げるとフードの青年が向こう岸にいた。リアの心臓はドゥックンドゥックンと森に響いた。隊列は完全に止まっていた。リアの鼓動が木魚の音に感じた。皆、葬式のように黙っていた。リアは静かに歩いて青年の方へ行った。青年は顔を殴られたのか唇を切っていた。リアが呼んでも、心臓は動いていたが、目を覚まさなかった。自分自身が死んでしまったようだった。それくらいリアは深く重い悲しみを腹の辺りに蓄えた。

ショックで頭がくらくとし、リアは湖の中へ沈んでいった。浮かび上がろうと藻搔いても、悲しみが重すぎた。暗い湖の底へとリアは向かって行ったようだった。

明るかった。リアは目を覚ました。ここは？死んだのか？辺りを見渡すと、パンが釜戸の中で騒いでいた。

「熱いよ、熱い！もう焼き上がっているんだよ！熱い、熱いよ！」と大声で叫んでいた。リアが様子を見に行くと、パンは「出してくれよ、もう焼き上がっているんだよ！」と言った。リアはかわいそうに思って釜戸からパンを出してやった。パンは大喜びで走って行ってしまった。

しばらくして歩いていると道ばたに亀の甲羅が落ちていた。リアは甲羅に向かって話しかけた。「甲羅さん、甲羅さん。どうしたんですか、中身は。」すると亀の頭が出てきて「元は僕は人間なんだ。」と言った。リアはかわいそうに思ってポケットに亀を入れた。亀は「ここをまっすぐに行ってください」と言った。

リアが歩いていると、おばあさんに出会った。おばあさんは紅いフードを被っていて、顔がよく見えなかった。手が皸だらけだった。しかし、おばあさんが重そうに砂を運んでいるのを見ると、リアは手伝わずにはいられなかった。「お手伝いしましょうか。」と言うと、おばあさんはこちらを向いた。おばあさんの顔には笑顔があった。

リアは二人で砂を運び、おばあさんの家に着いた。おばあさんの家には外から見て窓がなかった。おばあさんはごちそうを振る舞ってくれた。リアはその間おばあさんの家にあつたチェスに一人で填っていた。こちらが駒を動かすと相手の駒が勝手に動くことに驚き、関心を示し、夢中になった。

おばあさんはニワトリとカボチャのトマトクリーム煮を出してくれた。

食べているときにおばあさんは明日帰ってしまうかい？ と不安そうに聞いた。リアは心配だったので、もう少しいるよ、と答えた。おばあさんは安心したように椅子に深く座り直し、そのまま寝てしまった。

それからリアは一ヶ月ほど薪をくべたり、砂を運んだり、ニワトリ料理を教えて貰ったりした。リアは帰りたくなっていた。何でだろうと思うと、帰ってみるしかないのだと思った。

リアはおばあさんに言った。

「そろそろ帰りたいんです。」

おばあさんは遠くを見つめながら、分かったよ、明日帰ろうか、と言った。

リアはその晩、なかなか眠れなかった。リアは二階で眠っていたのだが、一階で火がごうごうと、鍋がぶくぶく煮えている音がかすかに聞こえていた。リアが静かに階段を降りていくとおばあさんが暗闇の中で皸だらけの顔だけが火で明るく照らされているのだけが見えた。リアが床の音を鳴らしてしまったせいで、おばあさんがこちらを向いたが、リアはその時にはもう自分の部屋のベッドで布団を被っていた。

翌朝、リアが一階に下りていくとおばあさんがよく研いだ包丁を持って何か企んでいるような、しかしにこやかに笑っていた。

リアに気付いたおばあさんは、もうちょっとで出来るからねと言った。リアは蟹鍋を平らげた。

おばあさんと一緒に外へ出ると、体が浮かび上がって、湖にいた。おばあさんは手伝ってくれたお礼だよ、と言って金貨が入った袋をくれた。

リアは大急ぎで帰って行った。帰ると継母が待っていて、ぶたれた。その拍子に金貨が音を鳴らしてしまったので金貨の袋を取り上げられた。

継母は金貨の数を数えながら、これをどこで拾ったの？ と聞いた。湖の中で、と言ったら、妹が湖へ飛んでいった。

町はお祭りだった。王子様の目が覚めたらしい。そういえば、ポケットにいた亀はいつの間にか何処かへ行っていた。王子様はリアの所まで迎えに来てくれて、リアはこれ以上ない幸せに満ちていた。王子様は笑顔を沢山持っていた。どこでそんなに笑顔を手に入れたのか聞いたら、ファストフード店だと言った。それはなんなの、と聞いたら、いずれ分かるさ、と言った。馬はヒヒーンと鳴いて城へ向かっていった。

妹？ 湖の底でホレおばさんにコンクリート固めにされて沈んでるだろうな。

両手でピースサインを作る。そのまま、いち、にい、さん、と叩き合せながら、右手を一本指、左手を三本に。子どもっぽい手遊びだ。

「それ、嫌い」

少女の眼は輝かない。暗い店内でもはっきりと分かるほどの嫌悪感を口元に滲ませる。溜息が出る。グラスの残りを一気に煽り、カウンターの向こうのボトルに手を延ばす。

「だめ！」

だって、しょうがないじゃないか。まだシェイカーの持ち方も知らないんだろう。

「だめだってば！ 子どものくせに」

自分だって子どものくせに。と思っているうちに、グラスの中が真っ白い液体で満たされていく。右手が一本指のままでは飲みづらいので、もう一度両手を叩き合せて元の本数に戻す。

「嫌いって言ってるのに」

少女は頬をふくらませて抗議する。そうすることを僕はよく知っている。知っているからやったのだ。一口煽って、足の届かないままにスツールを回す。棚に並ぶ瓶の色が混ざり合って、暗褐色の板壁に虹を描き出す。店に誰もいないのは、まだ開店時間じゃないからだ。少女にはまだ、できないことが多すぎる。

「僕がそっちに行けば、もうお店を開けられると思うよ」

「あんたなんか、役に立つもんか」

少女はまた頬をふくらませる。僕もまたスツールを回す。入口の方を向いて止まる。重々しい木の扉には、酒瓶のラベルがおびただしく貼られている。それぞれに何かのメッセージが書かれているが、薄暗い照明ではどれも読むことはできない。一口でグラスを空けて、飛び降りる。

「どうして、いつもよたよた歩くの？」

知ってるはずだろ。それでも僕はその話をする。

小さい頃――今よりもっと小さい頃、ずっとさっきの手遊びを繰り返していた。いち、にい、さん。いち、にい、さん。右から左、左から右、本数のバリエーション、空中に投げだして逆からキャッチ、異次元に飲み込まれて徐々に復活――自分で見ても、本当に指が移動しているんじゃないかって疑ってしまうくらい、ほれぼれする手際だった。

だから、足で試してみようと思ったのは、自然なことだった。

「でも、足でその遊びをやるのは無理よ。手の指みたいに、折り曲げることができないもの」

知ってるはずなのに決まりの合いの手。視線を下に落として、靴を脱ぐ。靴下まで脱いでいるが、結果は分かっている。

「ほら。できるはずない。そんなこと、試してみるまでもないわ」

でも、少女はいつでも試してみる。当然、僕だって試した。そして、僕はたった一回だけそれをやったにすぎない。僕は靴下を脱ぎ、靴を軽くつかけて、カウンターの向こうに回り込む。少女が息を飲むのを見て満足する。

果たして指は移動した。右足に七本、左足に三本。移動の瞬間を僕は覚えていない。ただ、静けさよりも孤独が耳に刺さったのを覚えている。僕は叫んだだろうか。母は仕事から帰ってこない。いや、時間帯からすれば仕事に向かったばかりか、もうすぐ開店という時間だったと記憶している。だから、テレビをつけた。バラエティ番組でも見て、僕に襲いかかった状況もネタにして笑い飛ばそうと思ったのだ。しかし、お笑い芸人たちは自分が笑いを取るのに必死で、テレビのこちらにいる人間の面白さになど、気づきそ

うになかった。

「それでどうしたの？」

すこし背の高くなった僕は、扉に貼られたラベルから一枚を引っぺがした。僕が初めて母に内緒で入れたボトルのラベルだ。いや、その言い方は正確じゃない。僕が初めて母に内緒で、棚から抜いたボトルだ。右巻きの矢印が無数に描かれた不気味な模様は、どこの国のものともわからない文字に囲まれている。この一本を最後に、二度とお目にかかったことはない。中に入っていたのが、どういう類の酒だったか、全く覚えていない。琥珀色の記憶は、それをウイスキーと思わせたいようだが、喉に残る清涼感はその意志をたやすく挫く。

「みんな右に消えていく」

僕の手からラベルを奪うと、少女は首を傾げた。グラスにはコーヒーリキュールが加えられていて、バー・スプーンが入れっ放しになっている。ステアの仕方も知らないらしい。矢印と同じ方向に軽くかき混ぜる。コーヒーがミルクを追い、ミルクがコーヒーを追う。少女の目の前のグラスにバー・スプーンを投げ込む。

僕の変化を見た母は、すっかり動転してしまった。そして、どうやってこのことを隠し通すかの算段を始めた。病院に行くか、靴を特注するかしてくれれば、まだよかったかもしれない。こうして、僕はまっすぐ歩けなくなった。どんなに注意深く歩いても、左に曲がっていく。曲がる分を計算に入れて、あらかじめスライス気味に足を踏み出すが、無駄な抵抗だった。帰宅するつもりが隣家に上がり込み、教室に向かえば隣のクラスに、お菓子売り場に行くはずなのに調味料の棚にたどり着く。そして、僕は、世界が左に傾いていることに気がついて、吐いた。事ある毎にえずく僕の様子に、友だちは皆、右に消えていった。一緒に歩いても、右に消えていった。右折しても左折しても、友だちは常に、より右に向かって消えていった。

「それなら、ずっとそのツールに座ってればいいわ」

肩を竦めたのか怒らせたのか、背中から少女の表情は読めない。カウンター越しにラベルを摘み、そこに書かれた文字の幼さを指先でたどる。ちょうどこれを書いた頃だ、と語り始めると、少女はなぜか涙を浮かべて振り向いた。

「だって、怖かったんだもん」

「何が？ どうして君が怖がることがある？」

「あなたに起こることは、あたしにも起こるかもしれないから」

「勝手だな」

僕は笑いながら、この話を打ち切る。僕も少女と同じで勝手なのだ。僕は僕のことを話したい。

その言葉を書いたのは、最後の友だちが右に消えて、その孤独もようやく右に消えていこうとしていた頃だった。瓶の中に残った液体はわずかで、手に握ってさえいれば右に消えないその液体を慈しんでいた僕は、瓶の口に付いたわずかな雫を指先でこすり取って、舌の上に置きながら、いつ尽きるとも知れないその香りを楽しむのが日課だった。その日も、学校から帰った僕は、手を清潔に洗浄し、うがいで舌を新しくし、物置の奥から瓶を引っ張り出した。普段は、その行為だけに集中するために、余計なことはしないのだが、その時に限って、僕はもう一つの大切なものを、矢印の供にしようと考えたのだ。

「テープレコーダーね」

ご明察。どうして知っている？ この話もしたことがあったかな。

とにかく、テープレコーダーだ。入っているのは九十分の、なぜかメタルテープ。五歳から七歳まで、何かの折に一言ずつ録音してきた。七歳は、僕が足の指の正常性を失った歳だから、このテープには、まだ大丈夫だった頃の僕が記録されていたというわけだ。このテープレコーダーが、どうやって僕の手元にやっ

てきたのかは分からない。記憶にはない父親が置いて行ったものかもしれない。僕がメッセージを録音しなければ、そこには父親の手がかりが残されていたかもしれない。というのは、今の僕が思いつきに語ったことに過ぎず、当時の僕がそういう考えを持っていたかと聞かれれば、ノーと即答するし、そもそもテープもテープレコーダーも失われてしまった以上、想像そのものに意味がない。

テープレコーダーは瓶よりもずっと手前にしまっている。母親から隠す必要がないからだ。瓶を食卓に置いたまま、不意の思いつきに足取り軽く物置の前に正座した僕は、テープレコーダーの取っ手を手で引っ張り上げた時に、何かがちぎれるぷちっという音を聞いたのだった。そこから溢れだしていた黒いビニールのひもはカセットのテープだったし、物置に同居していた何かに引っ掛かったテープは、テンションの上だった僕の一撃で引きちぎれてしまっていた。真っ白になった僕はテープレコーダーを放り投げ、見事に食卓に着地。下敷きになった瓶からは、残り少ない液体が流れ出し、僕は慌てて台拭きを手に取った。液体が無くなることより、母親にばれることの恐怖の方が大きかった。こうして、何もかもが右に消えていった。残ったのはこのラベルだけ。

「それがどうしてここにあるの？」

「僕が聞きたいよ」

そう、それを貼ったのはきっと母に違いない。

「帰ってこないね」

「帰ってこないわ」

「だから、僕がそっちに行けば、店は開けられるんだ」

「でも、あんたはまだ子供でしょ」

「これでもずいぶん大きくなった。酒だって飲める」

カルーア・ミルクはご免だが。

スツールから降りて、カウンターとテーブルを磨き始める。十分な背丈がある。体は成長し切った。これでも不十分だっていうのか。

「虹が出るくらい、綺麗に拭きな」

虹なんて出るわけがないだろう。結局、母親は僕が近くにいるのが嫌だったのだ。勝手に畸形化しとして、その存在そのものが自分の安全を脅かす。

「どうして虹が出ない、って言えるの？」

いつの間にか隣に来ていた少女が、カウンターを磨きながら言う。僕より力強く、僕よりも優しい手つきだ。

虹ってというのは、大気中に浮遊した水滴が太陽光を分散させて生まれるものだから。ここには、そのための何もかもが欠けている。水蒸気が発生してるでもなし、窓から日光を取り入れているでもなし。そもそも、店の中に虹が出たとして、それは一生懸命拭いたことの対価じゃない。

「それだけはっきり分かってて、どうしてあんたは虹を渡ろうとしたんだ」

虹を渡ろうとしたわけじゃない。

いや、虹を渡れるなら、本当に渡れるなら、生きていてもいいかな、と思ったんだ。

「だとしたら、あんたが見た虹と、母さんが言った虹は、同じもんだよ」

少女のような笑顔で、母親が笑う。どこか疲れた、諦めにも似た笑顔だ。そうして、一枚の分厚い板の向こうで、力強く、優しく、開店の準備を進めている。テーブルの中に閉じ込められた僕は、母のその腕の動きに魅了される。行きつ戻りつ、同じ動きを何十年も繰り返す。店の息遣いは、母のリズムそのものだ。

虹一一か。

母さんも、渡れないはずの虹を渡ろうとしている。だったら、一緒に渡ればよかったんだ。せっかく道

を、人よりも左に曲がった道を用意してくれたのに。

「ごめんなさい」

「子どものくせに、分かったような口きくんじゃないよ」

少女の笑みは頬をふくれさせた泣き顔になって、静かに伝った涙は七色に光った。でも、次の瞬間にはテーブルの上で砕け、ダスターのひと拭いでなくなってしまった。

編集後記

文芸部機関誌「虐睨第二号」はいかがでしたか。

実は、この「第二号」には紙版が存在しません。というのも、2013年にウェブ版を立ち上げるにあたって、2012年に発表した作品を編集した特別版だからです。収録作のほとんどは、2012年度の文化祭で配布したのですが、その時にも「一冊にまとまっていたらいいのに」というご意見を多く頂きました。そこで、このような変則的な形での刊行になったわけです。

「第一号」「第二号」はいわばベータテストのような位置づけでした。そして、2013年10月に刊行予定の「第三号」が、ウェブ版「虐睨」の正式リリースとなります。コンテンツも充実し、読みごたえ見ごたえ十分の機関誌になるかと思しますので、どうぞご期待下さい。学園祭の展示会場では紙版も配布する予定ですので、こちらもよろしくお祈いします。

(学校名はこの誌面のどこかにこっそり記載してあります)

文芸部顧問 鵜川龍史

虐睨第二号（2012年）

<http://p.booklog.jp/book/75923>

2013年8月31日発行

著者：世田谷学園文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ryujiu/profile>

編集者：鵜川龍史

発行者：鵜川 龍史

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75923>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75923>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ